

# 吹田の石器時代

—旧石器時代～縄文時代草創期を中心に—

2001年3月

吹田市教育委員会

## 序

吹田市におきましては、從来より吉志部遺跡や垂水遺跡などで旧石器時代の遺物が確認されており、1万年以上前から人々の活動のあったことが知られています。

吉志部遺跡におきましては、昭和55年度から7次にわたる調査を行っており、これまでに旧石器時代の資料の増加をみてきました。そして、第7次調査では、礫群とよばれる旧石器時代の人々が地表に残した遺構を確認しています。

また、近年になって、このほかにも新たに旧石器が出土する遺跡が確認されるようになり、特に吉志部瓦窯跡においては、多くの良好な資料を得るとともに、ここでも礫群を検出するに至っています。

このように、吹田市では、現代の私たちにとって、やや遠い存在という感のある石器時代の実態が徐々に明らかになりつつあります。

本書は、近年吹田市において確認された石器資料をまとめたものです。これが市民の皆様方に、はるか昔に生きた人々の存在について知つてもらう機会となれば幸いです。

平成13年3月

吹田市教育委員会  
教育長今記和貴

## 例　　言

1. 本書は、平成4・5年度に実施した吉志部遺跡における第4次・5次・7次発掘調査の成果、および平成3・7年度に実施した吉志部瓦窯跡（工房跡）での発掘調査において検出された旧石器資料を中心に、近年吹田市内で確認された旧石器時代から縄文時代草創期にかけての資料を報告したものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

吉志部遺跡	吹田市岸部北1-157-3他
吉志部瓦窯跡（工房跡）	吹田市岸部北4-106他
3. 発掘調査は、吉志部遺跡については吹田市立博物館文化財保護係賀納章雄が担当し、吉志部瓦窯跡については同係増田真木が担当した。また、その整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館で実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本文の執筆は、第1章・第2章I～III・第4章(1)～(4)及び(6)・第5章を賀納、第3章I～II(2)を増田が行い、第3章II(2)2～III・第4章(5)については関西大学博物館山口卓也氏により、第2章IVについては文化財コンサルタント（㈱渡辺正巳氏・奈良教育大学西田史朗氏）により執筆して頂いた。
5. 遺物実測は、吉志部瓦窯跡・七尾瓦窯跡出土の石器類については山口氏が、吉志部遺跡他の石器類については賀納が、土器類については花崎晶子が行い、石器類は縮尺3/4、土器類は縮尺1/4とした。
6. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P（東京湾標準潮位）を示す。
7. 発掘調査及び資料整理に際しては、関西大学博物館山口卓也氏、京都大学山中一郎氏、（財）大阪府文化財調査研究センター新海正博氏、同志社大学大学院森川実氏よりご教示を得た。特に、山口氏からは遺構・遺物観察について細かくご指導・助言を頂いた。また石材の一部については、大阪市立自然史博物館川端清司氏に鑑定して頂いた。この他、関本良太郎氏、若村正博氏、関西電力㈱はじめとして、多くの方々の協力を得た。記して感謝致します。
8. 発掘調査および資料の整理作業には以下の方々の参加を得た。  
秋山芳恵、太田宏明、大西文代、小川里美、喜田みゆき、木松安紀子、桑原暢子、高井明美、花崎晶子、林裕子、福住日出雄

## 目 次

第1章	位置と環境	1
第2章	吉志部遺跡第4次・第5次・第7次発掘調査	4
第3章	吉志部瓦窯跡(工房跡)における発掘調査	61
第4章	吹田出土旧石器関連資料	73
第5章	総括	77

## 挿図目次

第1図	旧石器・縄文時代遺跡分布図	1
第2図	旧石器・縄文時代遺跡分布と沖積層等厚線	2
第3図	吉志部遺跡発掘調査地周辺図	4
第4図	吉志部遺跡調査トレンチ配置図	7-8
第5図	第4次調査土層断面図1	10
第6図	第4次調査土層断面図2	11
第7図	第4次調査土層断面図3	12
第8図	第4次調査遺物実測図1	14
第9図	第4次調査遺物実測図2	15
第10図	第5次調査土層断面図1	17
第11図	第5次調査土層断面図2	18
第12図	第5次調査土層断面図3	19
第13図	第5次調査土層断面図4	20
第14図	T H・T J・T K 遺構平面図	21
第15図	T O・T P 遺構平面図	22
第16図	T B 石器類分布図	23
第17図	第5次調査遺物実測図1	25
第18図	第5次調査遺物実測図2	26
第19図	第5次調査遺物実測図3	27
第20図	第5次調査遺物実測図4	28
第21図	第5次調査遺物実測図5	29
第22図	第5次調査遺物実測図6	30
第23図	第7次調査土層断面図・石器類分布図	33-34
第24図	第7次調査疊群平面図	35
第25図	第7次調査疊群接合関係図	36
第26図	第7次調査遺物実測図1	37
第27図	第7次調査遺物実測図2	38
第28図	第7次調査遺物実測図3	39
第29図	第7次調査遺物実測図4	41
第30図	第7次調査遺物実測図5	43
第31図	吉志部遺跡既出資料1(ナイフ形石器)	46
第32図	吉志部遺跡既出資料2	47
第33図	吉志部遺跡既出資料3	48
第34図	吉志部遺跡既出資料4(尖頭器)	49
第35図	吉志部遺跡調査トレンチ配置および出土品断面図	51-52
第36図	火山ガラスの粒数比・重量比一覧図	58
第37図	吉志部瓦窯跡(工房跡)発掘調査地周辺図	61
第38図	B区土層断面図(東壁)	62
第39図	B区下層調査状況	62
第40図	吉志部瓦窯跡(工房跡)疊群実測図	63
第41図	吉志部瓦窯跡(工房跡)構成疊類別図(石柱・片岩・塊存率)	63
第42図	吉志部瓦窯跡(工房跡)構成疊重量	65
第43図	吉志部瓦窯跡(工房跡)石器出土状況	65
第44図	吉志部瓦窯跡(工房跡)出土石器実測図1	68
第45図	吉志部瓦窯跡(工房跡)出土石器実測図2	70
第46図	吉志部瓦窯跡(工房跡)出土石器実測図3	71
第47図	吹田出土土石器実測図1	74
第48図	吹田出土土石器実測図2	76
第49図	吹田周辺地域(大阪府)旧石器出土遺跡分布図	79

## 表 目 次

第1表 吉志部遺跡旧石器器種割合	45	第7表 包含下層の火山ガラス元素分析結果	59
第2表 吉志部遺跡石器計測表1	53	第8表 地山層の火山ガラス元素分析結果	59
第3表 吉志部遺跡石器計測表2	54	第9表 吉志部瓦窯跡(工房跡)疊群構成疊	64
第4表 吉志部遺跡石器計測表3	55	第10表 吉志部瓦窯跡(工房跡)出土石器計測表	66
第5表 火山ガラスの含有量分析表	58	第11表 吹田出土石器計測表	74
第6表 包含上層の火山ガラス元素分析結果	59		

## 図版目次

図版1 吉志部遺跡1	図版19 吉志部遺跡19(石器)
図版2 吉志部遺跡2(第4次調査)	図版20 吉志部遺跡20(石器)
図版3 吉志部遺跡3(第5次調査)	図版21 吉志部遺跡21(石器)
図版4 吉志部遺跡4(第5次調査)	図版22 吉志部遺跡22(石器)
図版5 吉志部遺跡5(第5次調査)	図版23 吉志部遺跡23(石器)
図版6 吉志部遺跡6(第5次調査)	図版24 吉志部遺跡24(石器)
図版7 吉志部遺跡7(第7次調査)	図版25 吉志部遺跡25(石器)
図版8 吉志部遺跡8(第7次調査)	図版26 吉志部遺跡26(石器)
図版9 吉志部遺跡9(第7次調査)	図版27 吉志部遺跡27(石器)
図版10 吉志部遺跡10(第7次調査)	図版28 吉志部遺跡28(疊)
図版11 吉志部遺跡11(第7次調査)	図版29 吉志部遺跡29(疊)
図版12 吉志部遺跡12(石器)	図版30 吉志部遺跡30(疊)
図版13 吉志部遺跡13(石器)	図版31 吉志部遺跡31(疊)
図版14 吉志部遺跡14(石器)	図版32 吉志部瓦窯跡(工房跡)1
図版15 吉志部遺跡15(石器)	図版33 吉志部瓦窯跡(工房跡)2
図版16 吉志部遺跡16(石器)	図版34 吉志部瓦窯跡(工房跡)3
図版17 吉志部遺跡17(石器)	図版35 吹田出土石器1
図版18 吉志部遺跡18(石器)	図版36 吹田出土石器2

## 第1章 位置と環境

吹田市は地形的にみると、その北側と南側で大きく分かれる。市域北側の約2/3は、鮮新世末から更新世にかけて古大阪湖・古大阪湾に堆積した大阪層群とよばれる砂礫・粘土層の隆起によって形成された千里丘陵が占めている。また南側については、主に完新世以降、神崎川・淀川などの沖積作用によって形成された平野部が広がっている。

北部を占める千里丘陵は、吹田市・豊中市・箕面市・茨木市にまたがり、東西約10km、南北約8kmにわたって広がる全体になだらかな丘陵である。豊中市鳥熊山付近を最高位（133.8m）として、概して丘陵の西側が急傾斜で、東側で緩やかとなっている。吹田市では、これまで旧石器時代の遺物を伴う遺跡として、千里丘陵上に位置する垂水遺跡と吉志部遺跡が知られてきた。

垂水遺跡は、本市円山町・垂水町1・2丁目に広がる旧石器時代から中世に至る複合遺跡で、昭和初期に始まる円山町一帯の開発工事に伴い、多数の弥生時代の遺物が採取されたことにより、その存在が知られるようになった。現在、遺跡自体は丘陵部分と丘陵南側の平野部にまたがっているが、旧石器類については標高20~50mの丘陵上において確認されおり、ナイフ形石器や彫器などが採集されている。

吉志部遺跡は本市岸部北1丁目に所在し、垂水遺跡の北東約2kmの地点にある。遺跡の標高は約20~25mで南東方向へ傾斜する。これまで旧石器が主に採集されてきた地点は棚田として利用されてきた場所であるが、その周囲には住宅や学校が建ち並び、旧来の地形は大きく改変されている。そもそも千里丘陵では、1960年代からの千里ニュータウン建設や大阪万国博覧会

### 〈遺跡名〉

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 吉志部遺跡  | 9. 高畠遺跡     |
| 2. 吉志部瓦窯跡 | 10. 高堤遺跡    |
| 3. 七尾丘墓跡  | 11. 高堤B遺跡   |
| 4. 七尾東遺跡  | 12. 高浜遺跡    |
| 5. 中ノ井遺跡  | 13. 片山公園遺跡  |
| 6. 吹田垂水遺跡 | 14. 番崎郡条里遺跡 |
| 7. 片山芝田遺跡 | 15. 垂水遺跡    |
| 8. 日供遺跡   |             |

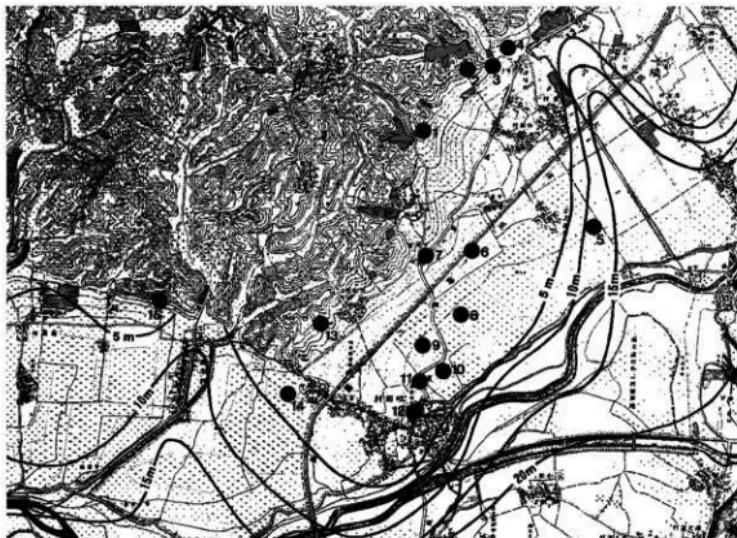


第1図 旧石器・縄文時代遺跡分布図 (1:40,000)

の開催を契機に、めまぐるしい開発・造成工事が行われ、これらの開発によって消失した遺跡も多い。吉志部遺跡内においても、これに伴い大きく地形が削平された部分もある。

さて、吹田市内では従来この2遺跡が旧石器時代の遺跡として知られてきたが、最近になって、吉志部遺跡の北東約400mの地点にある平安宮の瓦を製作した吉志部瓦窯の工房跡からも国府型ナイフ形石器などの旧石器が確認され、また旧石器時代に比定される砾群も検出されている。砾群については本書にある吉志部遺跡第7次調査で吹田市内で初めて検出されており、吉志部瓦窯跡の検出は市内2例目となる。

さらに、この他にも旧石器が確認されつつある。特に注目すべきは千里丘陵の南側に広がる平野部の遺跡において、旧石器が検出されるようになったことである。これらは地山面とは離隔したかたちではあるが、高城遺跡で小型のナイフ形石器が1点、目依遺跡でナイフ形石器や角錐状石器、翼状剥片などが検出されている。先述のごとく市域南側に広がる平野部は主に河川の沖積作用によって形成されたものであるが、これら遺跡の立地点は千里丘陵から比較的至近にあり、この付近では沖積土の層厚がまださほど厚くないことなどから、旧石器の検出に至ったものと考えられる。さらに、平成10年には吉志部遺跡から南東へ約800m、標高9~10mの丘陵部と平野部の地形的変換点に位置する吹田操車場遺跡において、風化程度の進んだサヌカイト片が検出され、調査を実施した関大阪府文化財調査研究センターはこれを旧石器時代の



(社)日本建築学会近畿支部・(社)土質工学会関西支部編『大阪地盤図』(コロナ社、1966年)付図をもとに作成。(遺跡名は第1回番号と同じ)

第2図 旧石器・绳文時代遺跡分布と沖積層等厚線 (1:40,000)

ものと報告している<sup>1)</sup>。

このように、最近になって丘陵から平野部にかけて位置する遺跡からも旧石器が認められるようになり、今後、さらに他の遺跡にからも旧石器資料の検出が期待されるようになった。

ところで、吉志部遺跡では、旧石器時代の遺物の他に縄文時代草創期に属する有舌尖頭器が多数採集されていることでも特徴がある。現在までのところ、石器以外にこの時期の遺物は確認されていないが、吉志部遺跡においては、旧石器文化の後に有舌尖頭器をもつ文化が展開したと想定されている。そして吉志部遺跡の北東約700m、吉志部瓦窯工房跡から東へ約100mの地点にある後期難波宮の瓦を製作した七尾瓦窯の工房跡においても、平成5年に縄文時代草創期のものと目される尖頭器が1点検出されている。この七尾瓦窯跡も吉志部遺跡から吉志部瓦窯跡を含めて続く千里丘陵の末端に位置しており、この吉志部遺跡を中心とした千里丘陵一帯において旧石器時代および縄文時代草創期に人々の活動があったものと考えられる。さらに、平成9年には、吉志部遺跡から南東へ約1.3km、標高4～5mの平野部に位置する中ノ坪遺跡においてもチャート製の有舌尖頭器が1点検出されている。また平成12年には、千里丘陵南端部に位置する片山公園遺跡において木葉形尖頭器の基部とみられる石器片が1点採集されている。

なお、吉志部遺跡では尖頭器の他に縄文時代の石鎌や石錐なども検出されている。そして市内では他にも同時代のものと目される石器類を検出した遺跡が多い。それらの遺跡をあげると、垂水遺跡・吉志部瓦窯跡・高城遺跡・高城B遺跡・目俵遺跡・中ノ坪遺跡・吹田操車場遺跡・高畠遺跡・片山芝田遺跡などがある。また、縄文土器が検出された遺跡としては、中期の土器片を検出した高浜遺跡、後期の豊嶋郡条里遺跡、晩期の七尾瓦窯跡・七尾東遺跡・目俵遺跡などがある。これらのうち、高城・高城B・目俵・中ノ坪・吹田操車場・高畠・七尾東・高浜・豊嶋郡条里の各遺跡は平野部上にあるが、高浜遺跡は縄文海進時に形成されたといわれる吹田砂堆上にあり、また豊嶋郡条里遺跡はかなり軟弱な地盤上に立地する。

ここで検出された縄文時代の遺物の多くは、本来の生活面から離れた状況のものであり、現在のところ明確な遺構の検出はない<sup>2)</sup>。縄文時代に至っては、その遺物を伴う遺跡が平野部においても広く認められるようになる。ただし、これは縄文時代になって人々の活動の場が丘陵部からその南側の平野部に広がったことを示しているのではなく、旧石器時代の遺跡が沖積土層に埋没していることから、現在、平野部にて確認されている旧石器時代の遺跡が少ないのだという可能性を考慮しておく必要がある<sup>3)</sup>。

#### 注)

1) 関大阪府文化財調査研究センター編『吹田操車場遺跡』、1999年。

2) 七尾瓦窯跡においては落ち込み内から、また七尾東遺跡では溝内より、それぞれ縄文時代晩期の土器片を検出しているが、これらが縄文時代の遺構であるのかについては検討の余地が残されている。(七尾瓦窯跡については、吹田市教育委員会編『昭和59年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1985年で報告。七尾東遺跡については、報告書未刊)

3) 吹田市教育委員会編『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1981年、7頁。

## 第2章 吉志部遺跡第4次・第5次・第7次発掘調査

### I. 発掘調査の経過

千里丘陵上に位置する吉志部遺跡の存在が広く知られるようになったのは、土地所有者である関本良太郎氏が昭和初期から収集していた旧石器・縄文時代の石器類を、昭和43年になって大阪府教育委員会に呈示されたことによる。その後、部分的にそれら収集資料は紹介されるなどしたが、昭和56年に刊行された『吹田市史第8巻』において収集資料のうち約130点が収録されるに至り、その全体的な内容が明らかとなつた<sup>1)</sup>。また、市史刊行目前の昭和55年12月には、吉志部遺跡において初めての発掘調査が本市教育委員会によって実施され、これまでに本報告分も含めて7次にわたる調査が実施されている。

昭和55年（第1次）の調査をはじめ、昭和57年（第2次）・平成3年（第3次）・平成5年（第6次）の各調査では<sup>2)</sup>、旧石器・縄文時代の文化層を確認することを主目的としていたが、これらの調査ではそれを確認するには至らなかった。しかし、各調査においては、原位置から遊離した形ではあるが、旧石器・縄文時代の石器類が新たに確認され、資料の増加をみることができた。そして、これらの調査成果や関本氏収集資料の分析から、これまでに吉志部遺跡に関する見解が得られている<sup>3)</sup>。

①ナイフ形石器は、大型（長さ7.2cm）・中型（2.9~4.4cm）・小型（2.3~2.7cm）のものが存在するが、大型は1点のみで、中小型のものが主体となる。素材としては横長剥片・縦長剥片の両方を使用し、打面側縁辺と刃部側縁辺の二側縁を調整加工するものが多い。その中で翼状剥片を素材とした可能性のあるものが1点あるが、基本的に瀬戸内技法の存在は認められない。このことから、翼状剥片を素材とした可能性のあるものを除いて、これらの石器は大きさの違



第3図 吉志部遺跡発掘調査地周辺図 (1:5,000)

いを越えて一群として共伴するものと考えられる。

②ナイフ形石器から編年の位置づけをみると、瀬戸内技法の存在が認められないことから、国府期より後出のものと考えられる。大型のナイフ形石器は、国府期直後に想定される高槻市津之江南遺跡C地点の資料に類似するものがあるが、中小型のナイフ形石器を主体とする高槻市塚原遺跡により類似性が求められる。おそらく吉志部遺跡と塚原遺跡は同時期のものと考えられ、編年的には、国府期→津之江南遺跡C地点→吉志部遺跡・塚原遺跡と位置づけられる。

③剥離技法からみると、打面調整を施さず、直接に平坦面からの打撃により剥離を行っているものが多い。この点で塚原遺跡と津之江南遺跡C地点に類似性が認められる。また、櫛石鳥型の石核の存在から、剥片剥離技術が複合的に存在する可能性がある。

④石器組成をみると、ナイフ形石器、楔形石器、錐状石器、削器、搔器などからなり、この点も塚原遺跡と似ている。

⑤これまでに尖頭器が11点出土しており、そのうち有舌尖頭器として確認・想定できるものが8点あり、近畿地方の単独の遺跡においてこれだけの点数が認められる例は稀である。また、有舌尖頭器には、柳又型、小瀬ヶ沢型に分類されるものがある。

⑥石鏃をはじめとする縄文時代の石器が多く出土しているが、縄文土器については検出されておらず、縄文時代の吉志部遺跡はハンティングサイト、キルサイトであったと想定される。

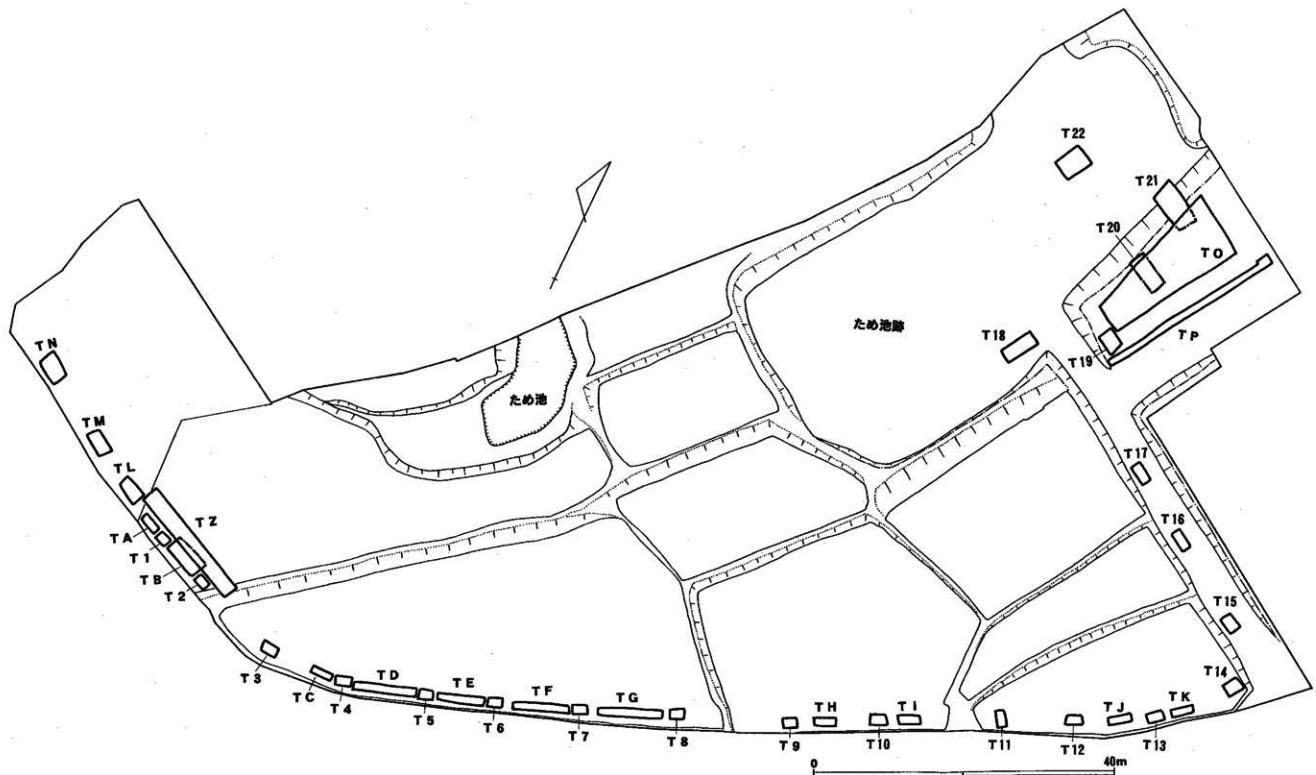
以上のような知見を得ている吉志部遺跡であるが、本報告分の発掘調査は、遺跡内にて変電所の建設とそれに伴う地下ケーブルの埋設工事が計画され、それに先立って試掘調査および拡大調査を行ったものである。

試掘調査（第4次調査）は、平成4年6月30日から同年7月15日にかけて地下ケーブル埋設予定箇所に調査トレンチ17か所（T1～T17）を設定して調査を行い、その後、変電所建設予定箇所について同年8月19日から8月26日にかけて5か所（T18～T22）の調査トレンチを設けて実施した。その結果、旧石器および縄文時代に相当すると考えられるサヌカイトを主とする石器類の包蔵が確認されたため、必要箇所について拡大調査を行うこととなった。

拡大調査（第5次調査）については、平成5年1月11日から同年3月13日にかけて調査トレンチを16か所（TA～TP）設定して実施し、遺跡西部に設定したトレンチ内より多数の旧石器類を検出し、また、遺跡北部において中世期に相当すると思われる掘立柱建物跡等を検出した。これによって、変電所建設に伴う発掘調査を一応は終了した。

ところが、後日、地下ケーブル埋設工事において、一部が当初の計画よりもその掘削範囲が拡大することとなり、その箇所が、ちょうど第5次調査において旧石器類を多数検出したTB付近であったため、平成5年11月17日から同年12月8日にかけて、調査区を1か所（TZ）設けて調査を実施した（第7次調査）。その結果、多数の旧石器類とともに礫群を検出するに至り、旧石器時代の文化層を確認するという貴重な成果を得た。

本報告では、これら3次の発掘調査を各次調査ごとにまず報告し、後にそれをまとめてみることとする。



第4図 吉志部遺跡調査トレンチ配置図

## II. 各次調査

### (1) 第4次調査

#### 1. 調査区の設定

第4次調査は、遺構・遺物包蔵の有無の確認を目的としたもので、調査区は、調査地の状況に応じて任意に設定した。地下ケーブル埋設箇所については、おおよそ5~15mの間隔をもつて約2×1.5mの調査トレンチを17か所設定した。変電所建設箇所については5か所の調査トレンチを設定したが、建設予定箇所の大部分がもともとため池であったため、1か所でため池内の包蔵状況を確認した他、残る4か所については、ため池に直接つからない箇所にトレンチを設定して調査を行った。この5か所のトレンチの調査面積は各々で異なる。

#### 2. 土層序

トレンチ内の土層序は、調査地が棚田（調査当時）ということもあり、洪積粘土層である地山層上に耕作地造成に伴う整地層の堆積がみられた。整地層は、主に灰色系の砂質土からなっていたが、各トレンチにおいてその堆積状況は異なり、耕土層と地山層、そして一部土層を除いては、各トレンチ間で共通する土層の対比は難しかった。以下、各トレンチの状況をみてみる。

（T1、T2、T4~T10、T12~T14）

これらのトレンチにおいては、耕土層以下、灰色系の整地層が堆積し、明黄灰色粘質土層・明黄灰色粘土層が地山層として認められた。そして各トレンチ内においては、地山層上に黄灰色砂質土層・黄灰色粘質土層の堆積が認められ、T1内においては、この土層中より旧石器時代に属するとみられる石器類が14点検出され、T4においても同層中にサヌカイト片1点の包含が確認できた。このことより、この黄灰色砂質土層・黄灰色粘質土層が旧石器時代の遺物包含層に相当するものと考えられ、このことは、後の第5次・第7次調査で確認することができた。

（T3・T11）

T3の設定箇所は、かつてため池があった場所であり、池の埋土が認められ、池埋土下より地山層である灰色シルト層が確認された。T11の設定箇所は、水口部分に当たり、その土色は還元化の影響を受けていたが、耕土層・整地層以下、黄灰色粘質土層の堆積が認められ、地山層として灰色シルト層を確認した。

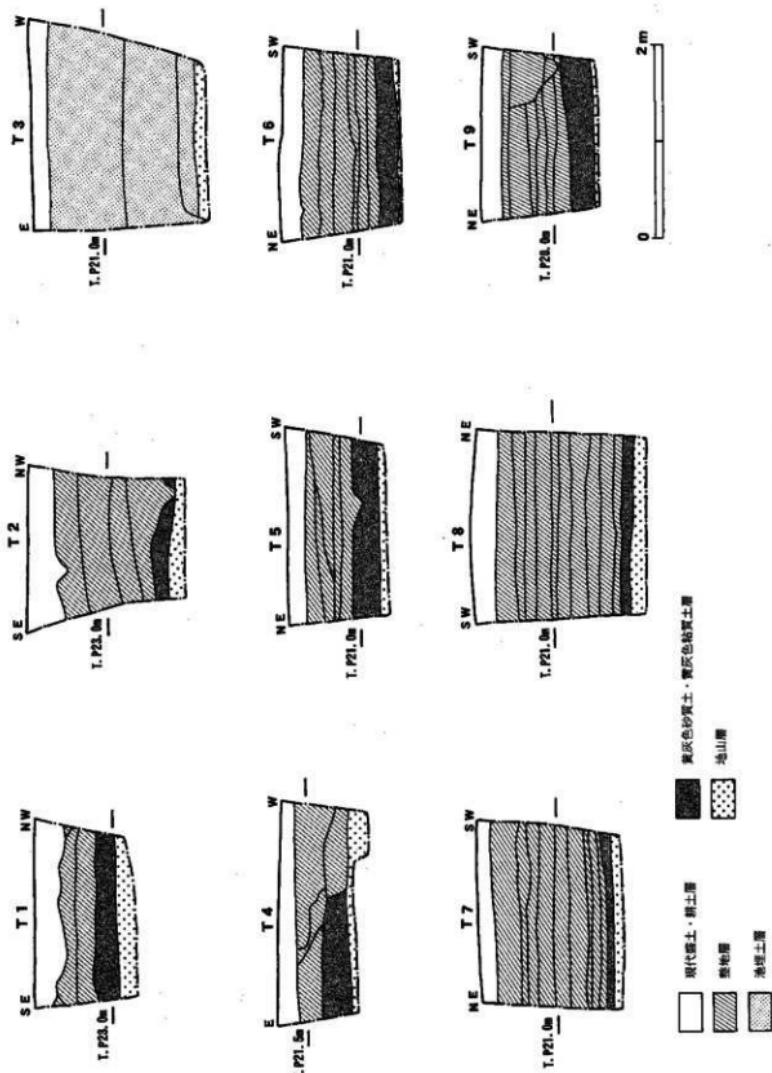
（T15~T17）

これら3か所のトレンチは、遺跡内に敷設されていた仮設道路上に設定したものである。その土層序は、盛土層以下、耕土層・整地層が堆積し、T16とT17で明黄灰色粘土層、T15で灰色粘土層が地山層として確認された。

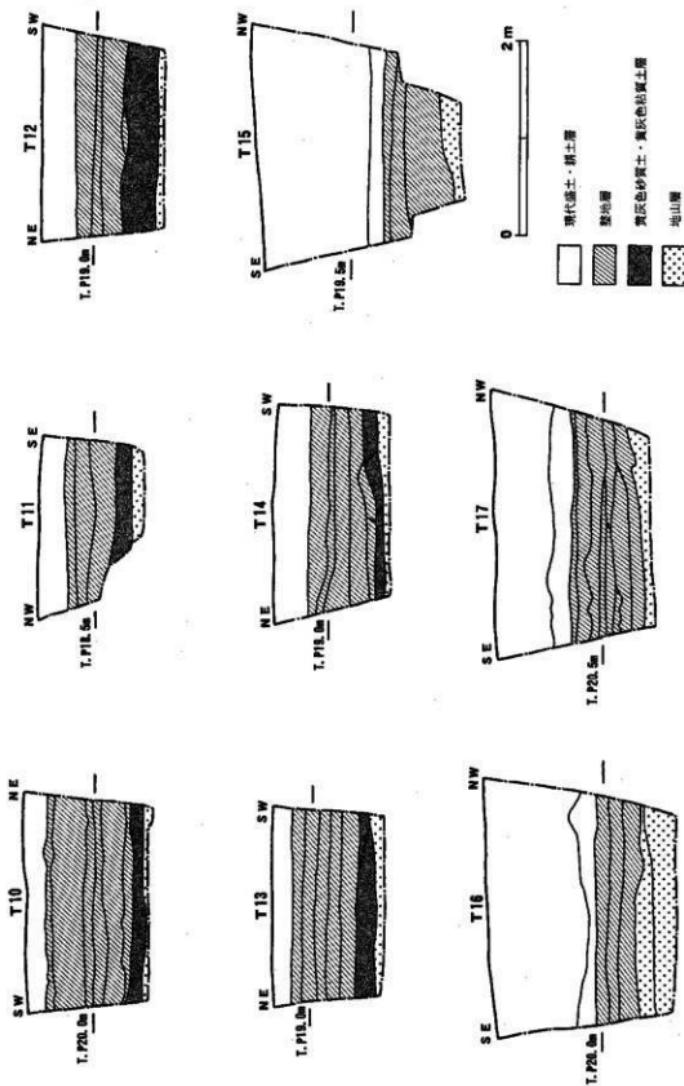
（T18、T21）

これらのトレンチは旧ため池の土手部分に設定したものである。ここでは土手築造に伴う堆

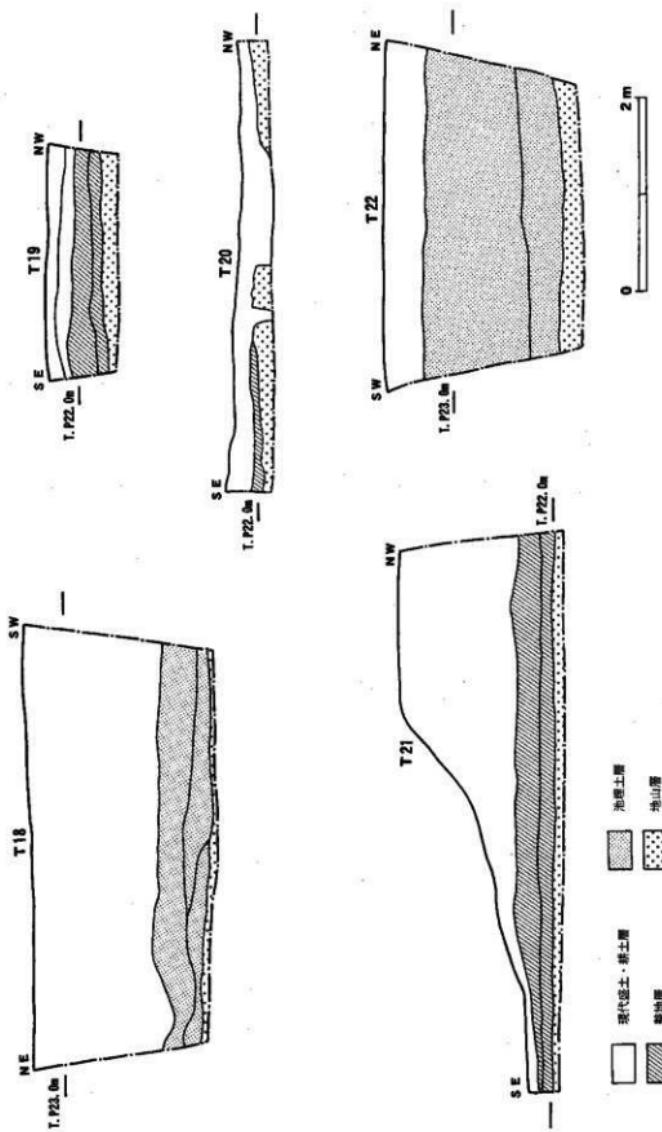
第5図 第4次調査土層断面図1



第6図 第4次調査土層断面図2



第7図 第4次調査土層断面図3



積土層下において、T21では地山層として明黄灰色粘質土層が認められたが、T18では池の埋土が認められ、その下より地山層である青灰色粘質土層が確認された。

(T19、T20)

これらのトレンチは旧ため池土手下方に設定した。T19では盛土層以下、旧耕土層と整地層の堆積が認められ、T20では盛土層のすぐ下において地山層である明黄灰色粘質土層が確認された。

(T22)

このトレンチは旧ため池の埋め立て部分に設定した。トレンチ内は池の埋土層下において地山層である明緑灰色砂質土層の堆積が認められた。

### 3. 遺物

第4次調査では、サヌカイト・チャートの石器類を20点（サヌカイト16点、チャート4点）検出した。これらのうち、T1・T4内より検出した15点（サヌカイト12点、チャート3点）を除いては、整地層中もしくは表探のものであり、これらすべてが旧石器時代に属するものかという判断は難しい。おそらく、ここで図化したものでは4-14が旧石器時代より後世のものであると考えられる。なお、ここでは石材がサヌカイトのものについては特に石種を記さなかった。また、遺物番号の後に出土トレンチ名と包含層内外の別を記した。

4-1 (T1・外) は赤色チャートのナイフ形石器の基部部分と思われる。縦長剥片を素材としており、残存部の両側縁に裏面からの調整剥離が施されている。

4-2 (T7・外) は搔器である。横長の剥片を素材としており、両側縁を主に裏面からの剥離によって、また先端部分については表面から裏面にかけての剥離によって刃部を作り出している。基部部分については折断されてしまっている。

4-3 (T1・外) は上端が折断されており、この折断面から表面にかけて剥離がなされている。これを何らかの意図をもって刃部を作り出したものとしてみると、彫器としての見方もできる資料である。また、下端については欠損によって明確ではないが、1回以上の剥離がなされている。

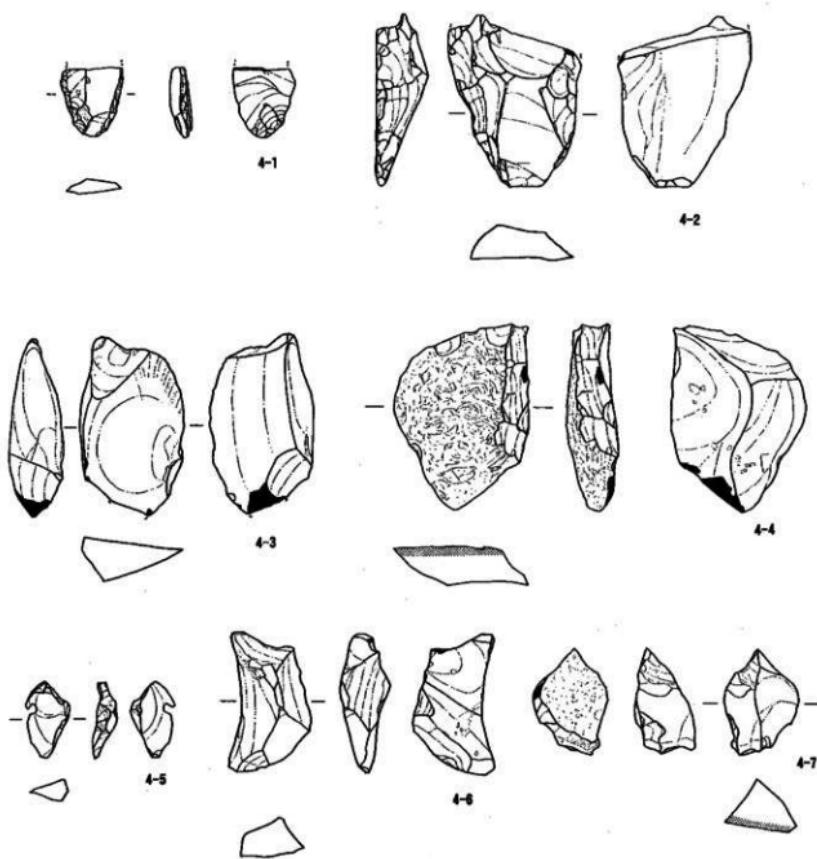
4-4 (T6・外) は石核である。原砾面からなる表面右側縁に打面調整のための剥離痕が認められ、調整後に上端部が折断されている。裏面にはポジティブな底面をもち、1枚の主要剥離痕が認められる。

4-5 (T1・外) は赤色チャートの碎片である。右側縁に打面調整による剥離面が残る。当遺跡でチャートの石器加工が行われた可能性を示すものである。なお左側縁が一部欠損している。

4-6 (T1・外) は石核の断片と思われる。裏面にネガティブな剥離面が大きく2枚認められる。

4-7 (T1・外) は石核の断片である。断面形が三角形となり、1面に大きく原砾面を残す。

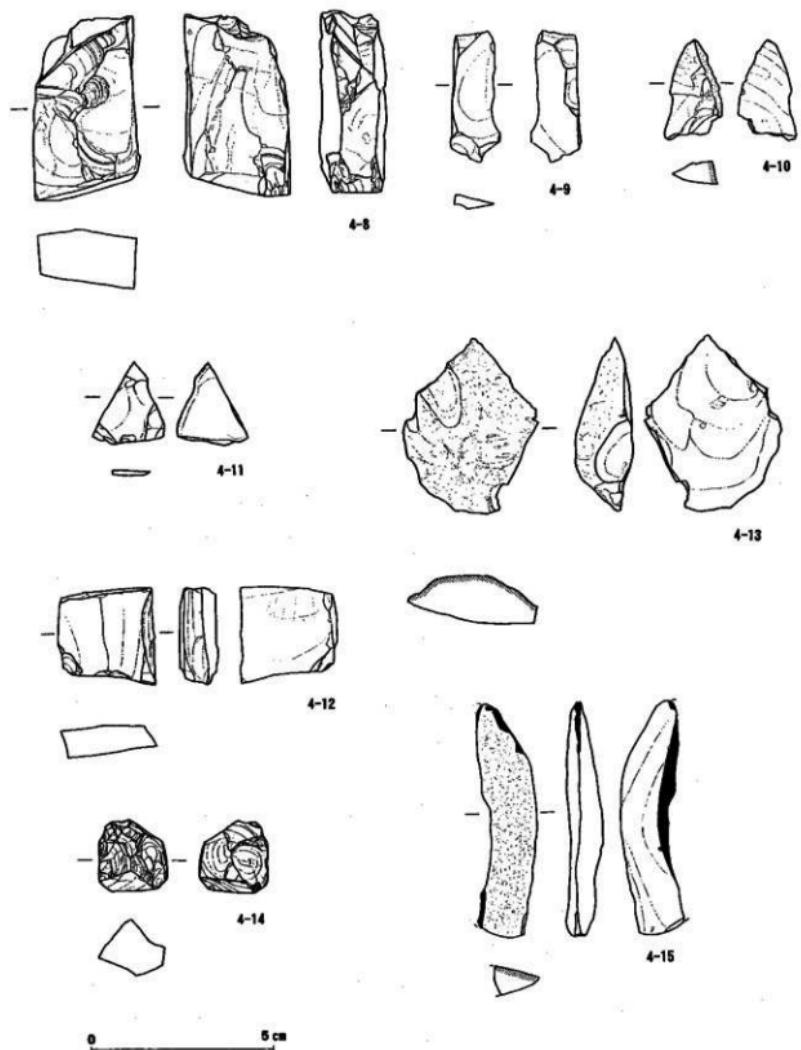
4-8 (T1・外) は赤色チャートの原石分割砾である。右側面全体と左側面の一部が自然面として残るが、所々に剥離痕・加撃痕が認められる。



注) 断面のトーンについては、原礫面のつく部分を示す。

0 5 cm

第 8 図 第 4 次調査遺物実測図 1



第9図 第4次調査遺物実測図2

4-9 (T1・内) は表面にネガティブな面、裏面にポジティブな面がそれぞれ大きく占める剥片である。

4-10 (T1・内) は右側縁に原礫面を残し、表面は石理が段となって目立つ。

4-11 (T1・内) は剥離後に左側縁と下端が折断された剥片である。下端部に加撃痕が認められる。

4-12 (T4・内) は上下端・左右側縁の四周が折断された剥片である。その目的は不明である。

4-13 (T1・外) は原礫面を大きく残す剥片である。裏面が1枚のポジティブ面からなり、左側縁上方に打面を残す。また打点と対角をなす右側縁下半が折断されている。

4-14 (T7・外) は青緑色チャートであり、ほぼ全面を打ちかかれており、不定形なサイコロ状のものとなっている。剥離の方向などに規則性は認められず、中世以降の火打ち石の可能性がある。

4-15 (鱗) はT19・20付近での表探資料である。縦方向に半身が大きく欠損しており、本来のサイズは不明である。表面は原礫面からなる。

## (2) 第5次調査

### 1. 調査区の設定

第4次調査の結果を受けて、調査の拡大が必要と判断された箇所についてトレンチを設定した。TA～TNは地下ケーブル埋設部分に設定し、TA～TKについては前回の調査で設定したトレンチの間に設けた。TL～TNについては、第4次調査で調査を行わなかった遺跡西端部に設定した。TO、TPは、変電所建設箇所のうち旧ため池の土手下部分に設定した。

### 2. 土層序

#### (TA～TK)

これらのトレンチにおいては、旧耕土層以下、主に灰色系の砂質土が整地層として堆積し、その土層下にて黄灰色砂質土層の堆積が共通してみられた。この黄灰色砂質土層中からはTA・TB・TD・TE・TF・TGにおいて旧石器とみられる石器類が検出された。また明黄灰色砂質土・明黄灰色粘質土・明黄灰色粘土層が地山層として認められた。

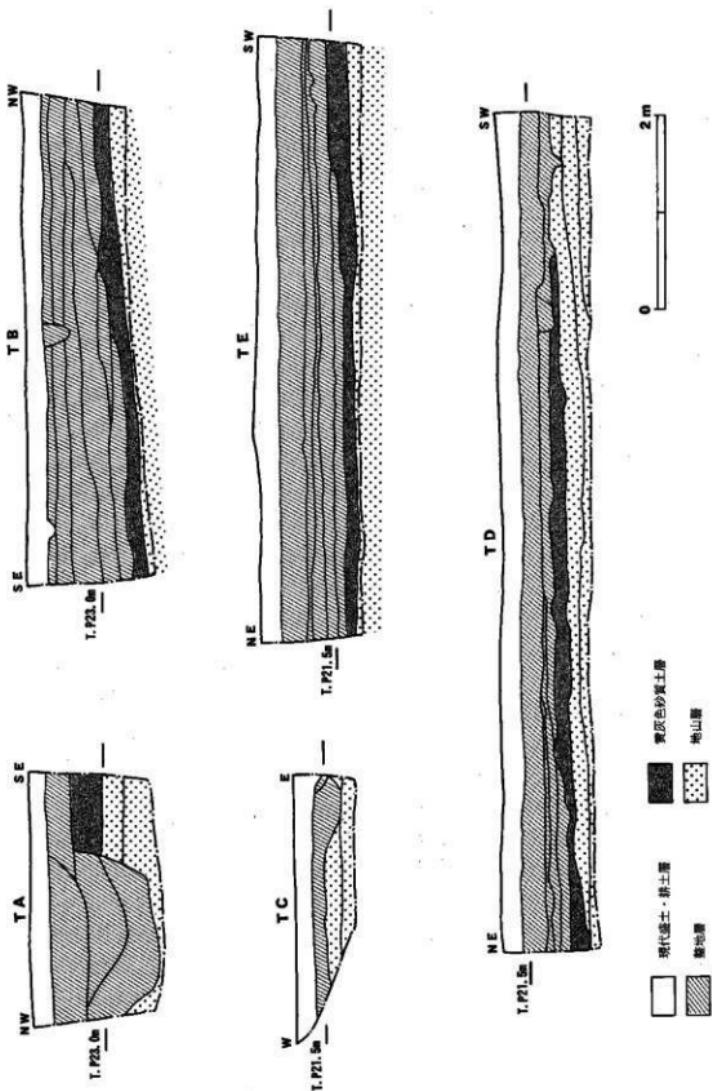
#### (TL～TN)

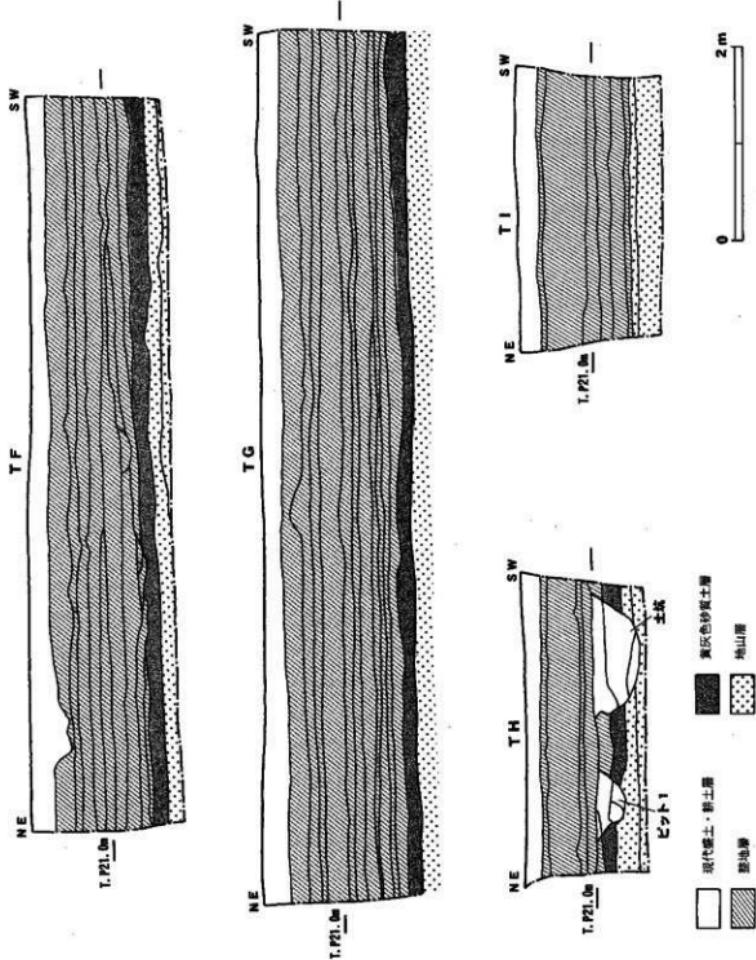
この3トレンチ設定箇所は、調査時において駐車場であった。当該地の地形は以前に大きく削平を受け、後に盛土造成されている。土層序は、厚い盛土層以下、暗灰色粘土層、地山層として暗青灰色砂質土層が確認された。

#### (TO、TP)

TO、TPにおいては、盛土層以下、旧耕土層、整地層として灰色系の砂質土層が堆積し、その下層において、地山層として黄灰色～明黄灰色の土層が認められた。ここでは地山層をベース面として中世のものと思われる遺構が検出された。

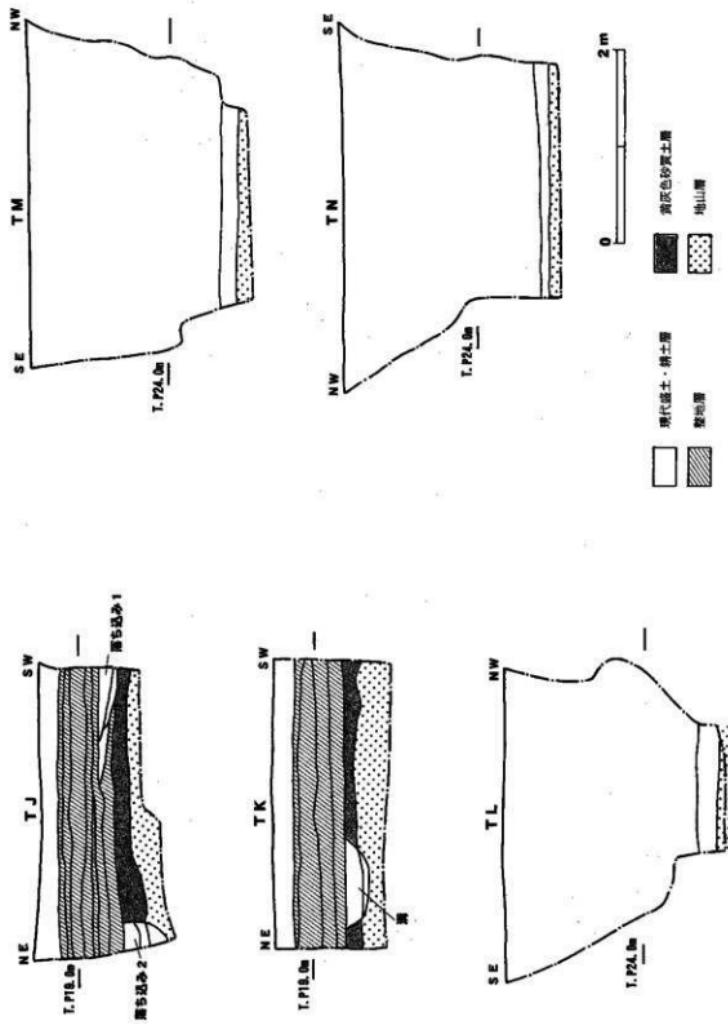
第10図 第5次調査土層断面図1

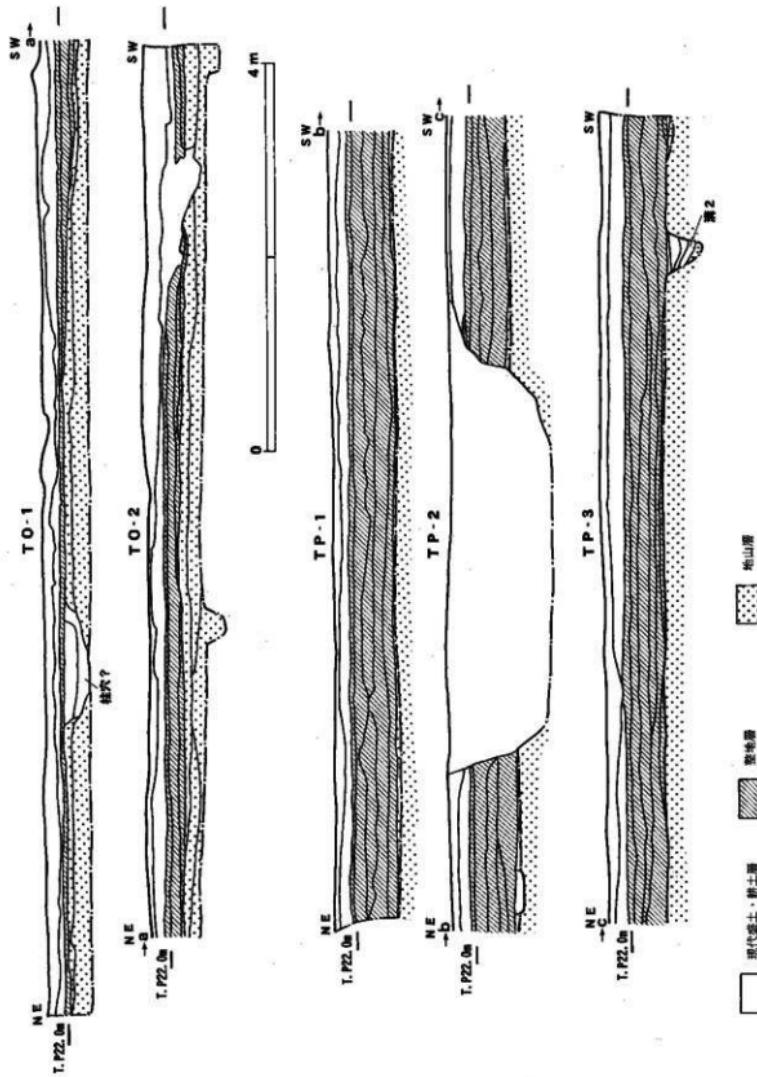




第11図 第5次調査土層断面図2

第12圖 第5次調查土層斷面圖3



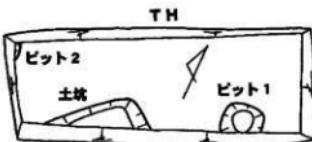


第13圖 第5次調查土層斷面圖 4

### 3. 遺構

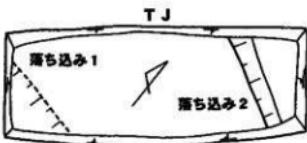
(T H)

ピット2基、土坑1基を検出した。ピット1は直径約40cm、深さ約40cmを測った。ピット1内からは中世の土師器羽釜片などが検出された。ピット2はトレンチ北西隅で部分的に検出したのみであった。土坑についてはトレンチ南側で部分的に検出した。平面形は方形形状を呈し、深さは約48cmを測った。



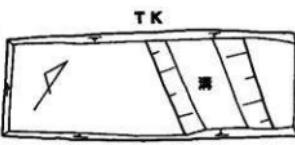
(T J)

トレンチの東西両端において、落ち込みを2か所確認した。トレンチ西側で検出した落ち込み1は深さ約20cmを測った。落ち込み1内からは土師器甌を検出した。トレンチ東側で検出した落ち込み2は層位的に落ち込み1の下層にあたる。その深さは約50cmを測り、落ち込み2内からは土師器甌が検出された。



(T K)

溝を1条検出した。幅約90cm、深さ約20~25cmを測った。遺構内から遺物は検出されなかったが、他のトレンチとの状況から歴史時代のものと思われる。



(T O)

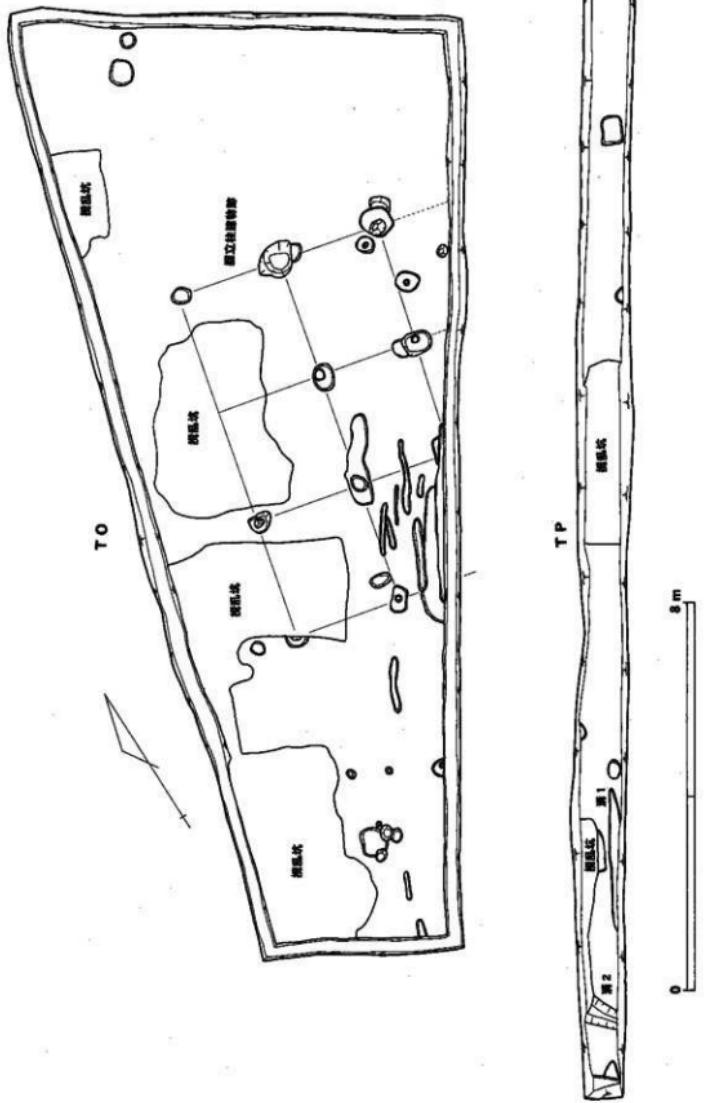
約120m<sup>2</sup>の調査区からは掘立柱建物跡、ピット、溝、土坑等が検出された。建物跡は検出部分で3間×2間、南北約7.5m、東西約4.5mを測り、その南北軸の方位はおむねN15°Eを示す。しかし、建物北側の東西方向ライン東側延長線上にあたる調査区東壁断面をみると、ピット状の落ち込みが認められ、この建物跡の規模はさらに東側に拡大する可能性がある。また、調査区東側では溝が多く検出されたが、これらは深さが約2~3cmと浅く、11条がN25~35°Eの方位をもってほぼ平行してのび、耕作関連のものではないかと思われる。なお、建物跡を構成する柱穴と溝との間で一部重複関係が認められ、溝が柱穴に重なる箇所がみられた。



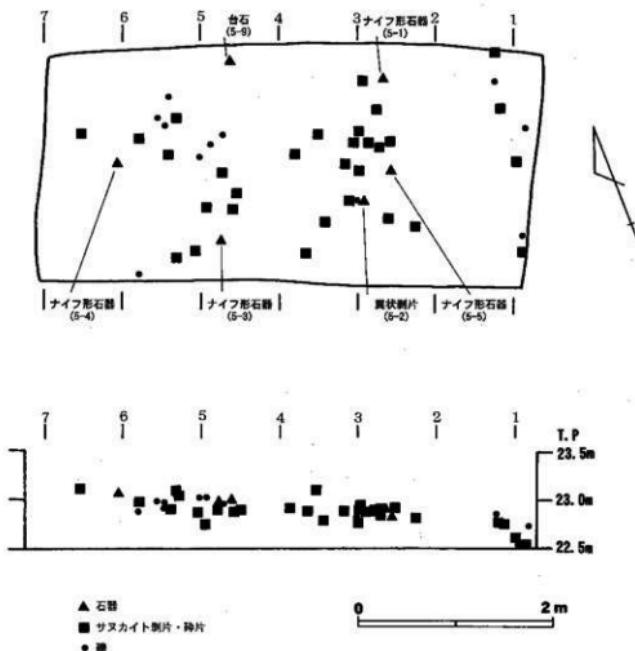
第14図 T H・T J・T K遺構平面図

(T P)

約25×1mの細長いトレンチである。このトレンチ内からはピット4基、溝2条、土坑状のものを3基検出した。ピットについては建物跡として確認できるものはなかった。溝1は、深さが2~3cm程度と浅く、N30°Eの方位を示し、T Oで検出された溝と同様に耕作関連のものと思われる。トレンチ南側で検出された溝2は、溝断面がややV字状を呈し、しっかりと掘



第15圖 TO·TP造構平面圖



第16図 T.B.石器類分布図

り込まれており、検出部の深さは約30cmを測る。方位はN25~45°Wの範囲を示すようだが、検出部分が限られているため明確ではない。

#### 4. 遺物

##### (石器類)

第5次調査では、サヌカイト・チャートなどの石器類を70点（サヌカイト59点、チャート10点、砂岩1点）検出した。このうち43点（サヌカイト40点、チャート2点、砂岩1点）を旧石器時代遺物包含層と考えられる黄灰色沙質土層から検出し、特にT.B.よりまとまって検出された。また、整地層出土のものにはナイフ形石器や搔器等に分類できるものもあるが、縄文時代の石鏃も4点含まれており、整地層出土石器類のうち、石鏃や火打ち石の可能性のあるチャート片などは旧石器時代より以降のものと考えられる。

5-1 (T.B.壳) は国府型ナイフ形石器である。右側にやや広く石核底面をつけ、左側縁には打面調整剥離痕および裏面からの背つけ加工痕が認められる。底面側の上端部分が背つけ加工前に

折断されている。また、先端部および下端がナイフ整形後に折断されている。

5-2 (TB・内) は翼状剥片である。右側縁に打面を残し、左側縁下半に石核底面がつく。下端部については折断されている。

5-3 (TB・内) は横長の剥片を素材とするナイフ形石器である。石核底面はつけず、断面形は三角形を呈する。右側縁に裏面から背つけ加工が施されている。上下端は折断されている。

5-4 (TB・内) は縦長の剥片を素材とするナイフ形石器である。上端左部が欠損しているため、その先端部の形状は不明であるが、左側縁に基部から残存部の上端まで、そして右側縁についてはその下半に裏面からの調整剥離が認められる。表面の稜線は上半でやや不鮮明となる。

5-5 (TB・内) は右側縁に広く打面をつける横長の剥片であるが、右側縁下端には背つけのためと思われる剥離痕が認められ、ナイフ形石器としてみることのできる資料である。左側縁が欠損しているが、石核底面はもともとついていなかったようである。

5-6 (TF・内) は暗緑灰色チャートで、鋭い先端部をもつ尖頭器である。先行する剥離痕も同じ打面から剥ぎ取られており、連続的に剥ぎ取られた縦長剥片を素材とするものである。左側縁には裏面から角度の浅い細かな調整剥離が施され、先端部が整えられている。ここではこの資料に背つけ加工が認められないことから尖頭器と分類したが、祖形ナイフ形石器としても分類し得るものである。なお打面は自然面のままであり、特に打面調整は認められない。

5-7 (TI・外) は右側縁に調整剥離が認められ、おそらく国府型ナイフ形石器の上端と下端が折断してしまったものと思われる。石核底面はつけない。

5-8 (TI・外) は横長の剥片を素材とするナイフ形石器である。左側縁に打面調整痕および裏面からの背つけ調整がみられ、右側基部部分についても1回の剥離によって、形が整えられている。石核底面はつけない。

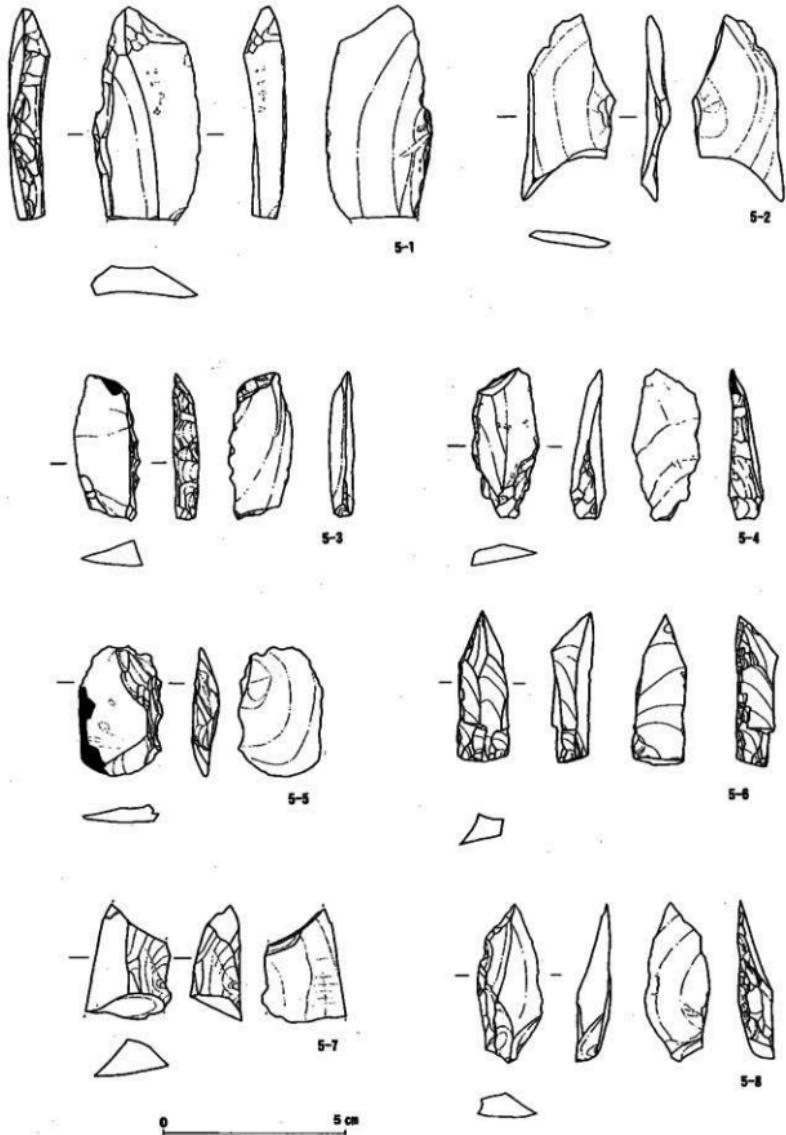
5-9 (TB・外) は砂岩製の台石である。上面に打撃によるものと考えられる窪みが認められる。縱方向に長く、下半部がやや戻すほみであることから、足に挟むか土中に固定するかして使用されたものと考えられる。

5-10 (TG・外) は厚みのある横長の剥片を素材として、先端部および両側縁を裏面からの調整によって整形された搔器である。左側縁に打面が残されている。また基部側は折断されている。なお、この資料は断面形がやや台形状を呈し、両側縁の傾斜角が約50~70度となり、角錐状石器の基部部分という可能性も考えられる。

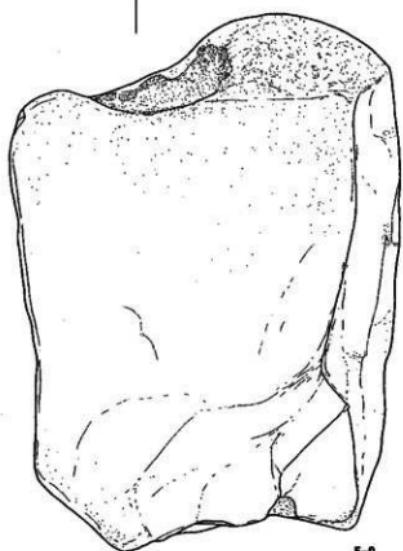
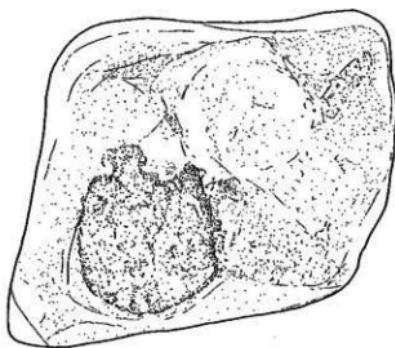
5-11 (TE・外) は右側縁に打面調整が広く認められる横長剥片である。石核底面を左側縁につけ、剥離後に下端部が2方向から折断されている。また上端部も後に折断している。

5-12 (TF・外) は緑褐色チャートの楔形石器である。表面はその中央に自然面を残しつつ、その上半と下部にやや大きめの剥離が認められる。右側縁下半には裏面からの細かめの剥離痕がみられ、左側縁下半から下端には裏面において部分的に表面からの剥離痕が認められる。

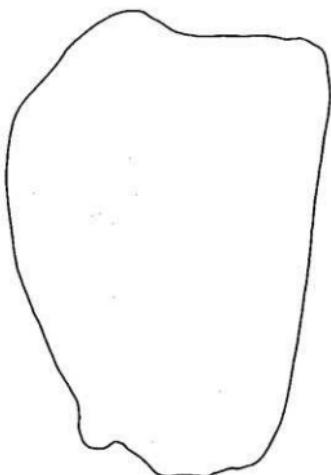
5-13 (TB・外) は明確な作業面が認められないが、石核と思われるものである。裏面についてはもともと原礫面に近かったのか、石理に伴う窪みや段がみられる。



第17図 第5次調査遺物実測図1



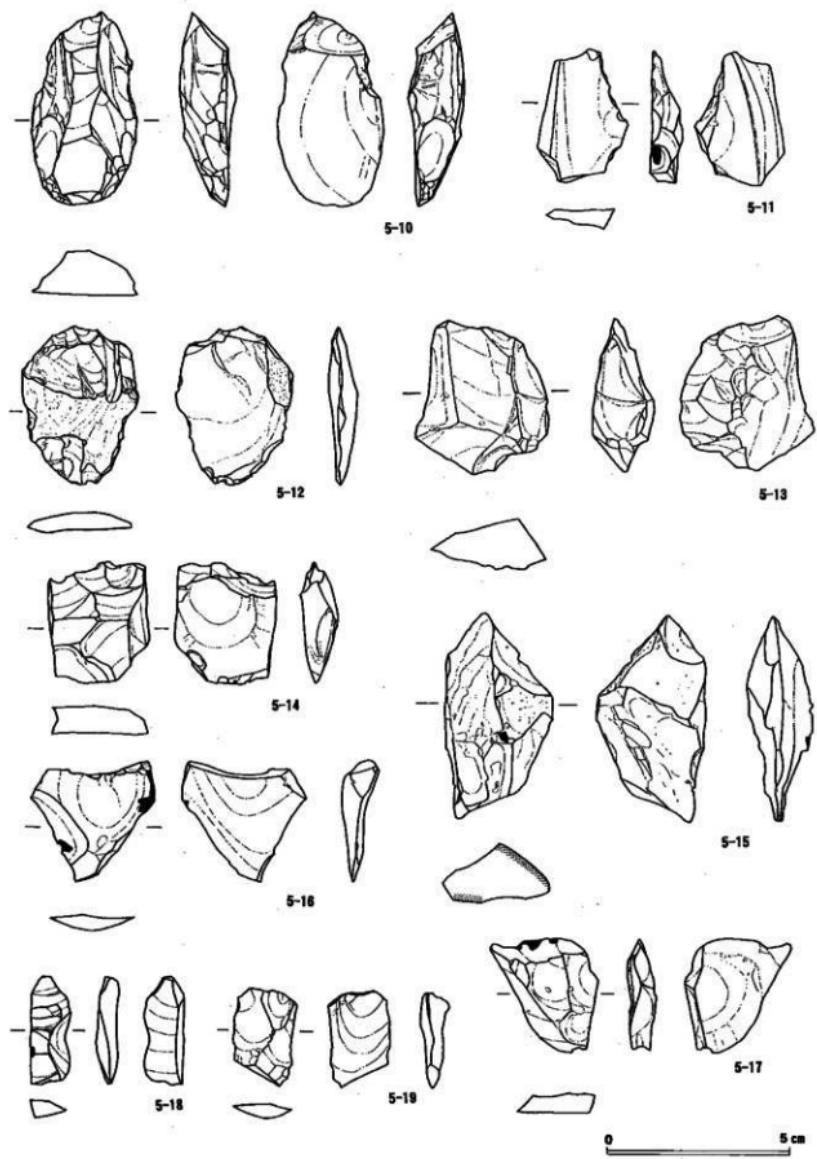
5-8



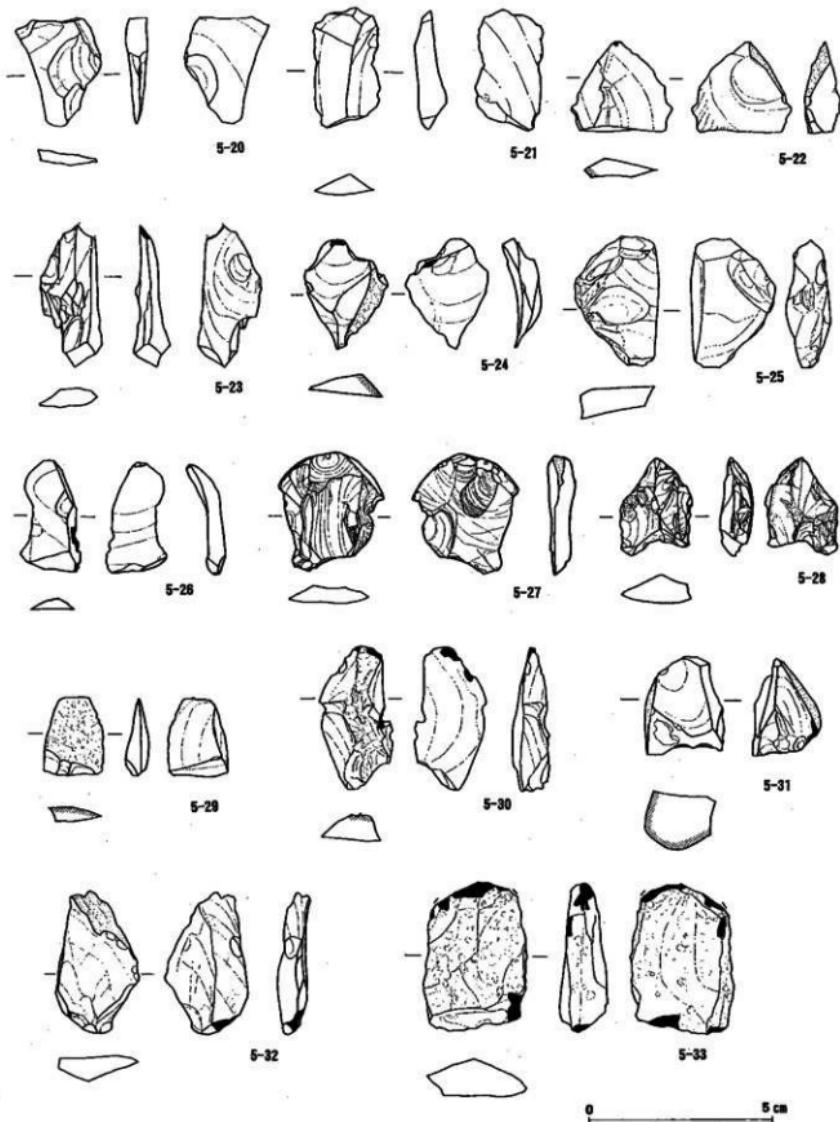
0

10cm

第18図 第5次調査遺物実測図2



第19図 第5次調査遺物実測図3



第20図 第5次調査遺物実測図4

5-14 (TB・内) は両側縁を折断した後、その上端を作業面とした石核である。石核としてはかなり矮小化してしまったものである。

5-15 (TB・内) は表裏面の一部に水磨した原礫面を残す剥片である。石核を得るにあたって、原石の原礫面を除去して、作業面を作り出そうとした時にできた剥片である。

5-16 (TB・内) は表面に2枚のネガティブな面、裏面に1枚のポジティブな面が占める剥片である。剥離後、打点面がきれいに除去されている。

5-17 (TB・内) は山形に調整された打面から剥ぎ取られた剥片である。ポジティブな石核底面が左側縁につく。

5-18 (TB・内) は小型の剥片である。右側縁の剥離面は、剥片剥ぎ取り後のものである。

5-19 (TB・内) は打面調整された上端から剥ぎ取られた剥片であり、下端は折断されている。

5-20 (TB・内) は裏面に打面を除去するように1枚の剥離痕が認められる剥片である。左側縁と上端は折断されている。

5-21 (TB・内) は下端部に打点が認められ、ねじれ気味に剥離された剥片である。表面左側に広く石核底面をつける。

5-22 (TB・内) は表裏面ともポジティブな面をもち、石核から最初に剥ぎ取られたファーストフレイクの可能性がある。左側縁に原礫面を残す。

5-23 (TB・内) は打面をわずかに残し、石核底面をつける剥片である。上端は欠損している。

5-24 (TA・内) は右側縁に原礫面を残す剥片である。打面調整が認められる。

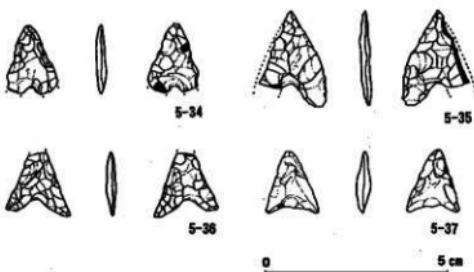
5-25 (TA・内) は左側縁中央付近にわずかに原礫面を残す。打面側にあたる右側縁および上端は折断されている。また左側縁も剥片剥ぎ取り後に加撃・折断されている。

5-26 (TD・内) は表面に広くポジティブな面をもつ。上端には小さな打面がみられ、また下端に底面をつくる。

5-27 (TE・内) は淡青緑色チャートである。上端面に自然面を残し、そこを打点に剥離された剥片である。裏面には打点近くからの1枚の剥離痕が認められる。

5-28 (TE・内) は青緑色チャートである。全体的に乱雑な加撃によって、石鎚様の平面形を呈するが、厚ぼったく、側縁もシャープさに欠ける。中世以降の火打ち石の可能性が高い。

5-29 (TG・内) は表面に広く原礫面をつける剥片であるが、表面下端に3枚の剥離痕が認められ、石核を作り出すにあたっての調整によって生じた剥片と思われる。下端および左側縁は剥離後



第21図 第5次調査遺物実測図5

に折断されている。

5-30 (TG-4) は表面中央に原礫面を残し、左側縁にポジティブな面をつける。右側縁は裏面からの加撃によって打点は除去されている。下端は折断されている。

5-31 (TG-4) はかなり水磨を受けた亜角礫を打ち削ったものである。広く原礫面をつける。

5-32 (TG-4) は表面はネガティブな面からなり、右側縁上半に原礫面を残す。裏面は左下方からの加撃による剥離面をもち、その右半にポジティブな面を残す。またポジティブ面の右側下半に石核底面と思われる面を残す。

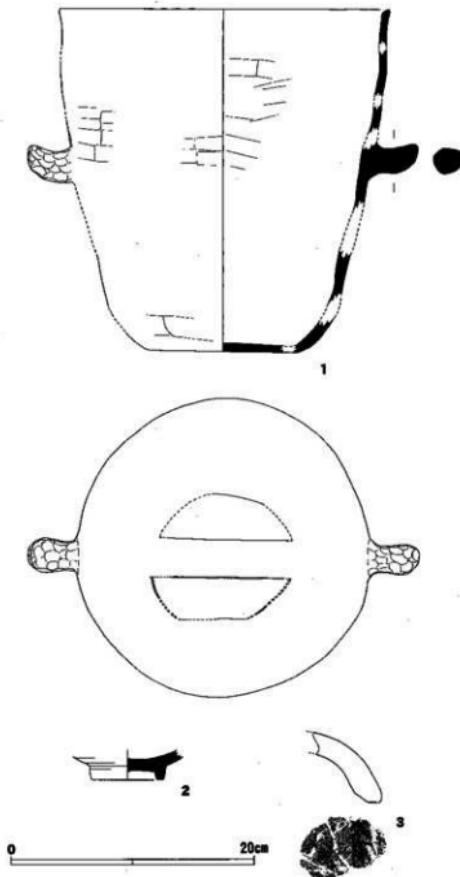
5-33 (TP-4) は水磨を受けてやや偏平な亜角礫状を呈するサスカイトの原石である。

5-34 (TE-4)、5-35 (TG-4)、5-36・37 (TP-4) は凹基式の石鎌である。縄文時代のものと考えられる。

(その他)

歴史時代の遺物として古墳時代～中世にかけての須恵器、土

師器、瓦器等を検出した。しかし、そのほとんどが細片であったため、図化できたものは少なかった。第22図1はTJ落ち込み1で検出された土師器瓶である。摩滅が著しく、その調整等は明確でないが、内外面とも板状のもので調整されたような痕跡が認められる。おそらく7世紀頃のものと考えられる。2はTOから出土した青磁片である。釉薬は緑色を呈し、外面は高台まで施釉されている。3もTOから検出された丸瓦である。内面に布目痕がわずかに認められる。この他に図化できなかったが、TJ落ち込み2から布留式甕を1個体分検出した。



第22図 第5次調査遺物実測図6

### (3) 第7次調査

#### 1. 調査区の設定

第7次調査は、第4次・第5次調査で多数の遺物を検出したT1・T2・TA・TBの北側に調査区(TZ)を設けて実施した。TZは約16×2mの東西方向に細長いトレンチで、調査地点の地形に沿うような形で、西側から東側にかけて傾斜し、地山面上で比高差が約1mあった。また、調査区は一部TBと重複した。

#### 2. 土層序

土層序をみると、第4次・第5次調査と同様に、地山層として明黄灰色粘質土層が認められ、旧石器時代の包含層として黄灰色砂質土層を確認したが、ここでの土層観察では、黄灰色砂質土層の上層部がやや淡い黄灰色砂質土層となっていることを確認した。しかし、調査においては、淡黄灰色砂質土層と黄灰色砂質土層との間で特に遺物の包蔵状況に差異は認められなかつた。また、遺物包含層より上位には、盛土層・旧耕土層と耕地造成に伴う整地層が堆積していくが、調査区の西側では、盛土層下すぐに地山層が認められた。

なお、平成12年度になって、淡黄灰色砂質土層・黄灰色砂質土層・明黄灰色粘質土層より各々採取した土壤を分析にかけたところ、純粹な火山灰層は認められなかつたが、黄灰色砂質土層と明黄灰色粘質土層にAT火山ガラスが二次的ながら比較的多く含まれていることが確認された。

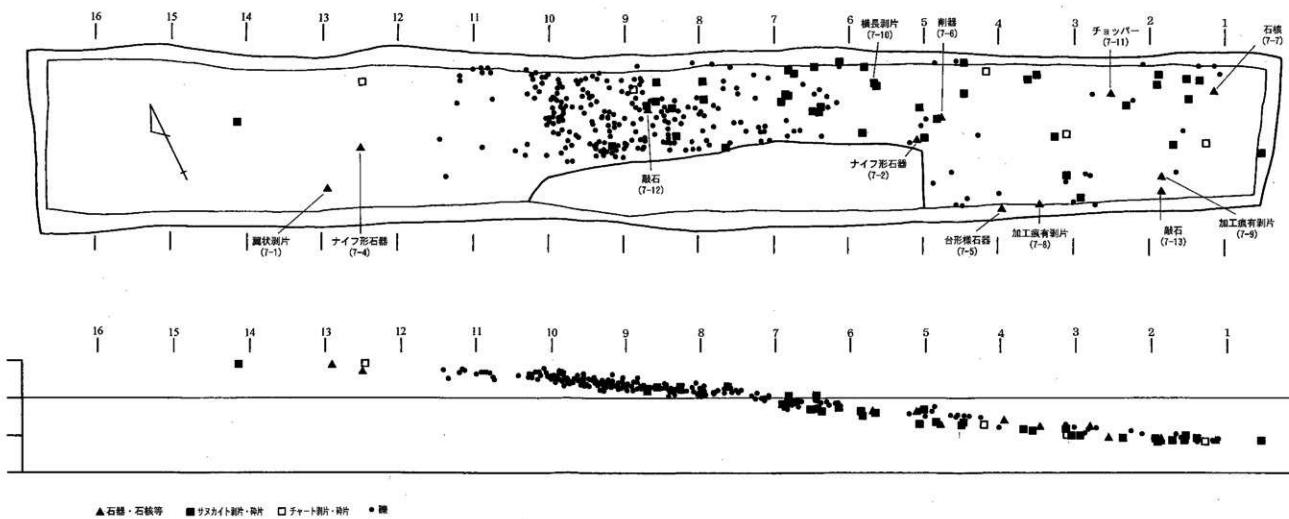
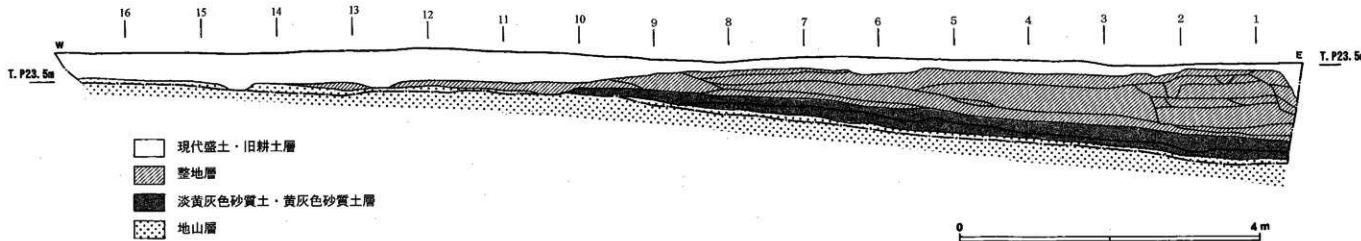
#### 3. 遺構

礫群が検出された。礫は検出部分で約4×1.5mの範囲で緩やかにまとまり、その外方にかけてもまばらに広がっていた。礫群の範囲は、調査トレンチの長軸方向についてはおおむねどうえ得たが、短軸方向についてはさらに広がりをもつものと考えられる。

礫は実測・記録したもので248点を数え、その大きさは2~4cm程度(平均重量26g)のものが多かった。礫の種類には、砂岩、チャート、花崗岩、泥岩などがみられ、被加熱の痕跡のあるものが149点あり、全体の約60%を占めていた。また、礫群中にはサヌカイト・チャートの剥片なども混じって検出された。

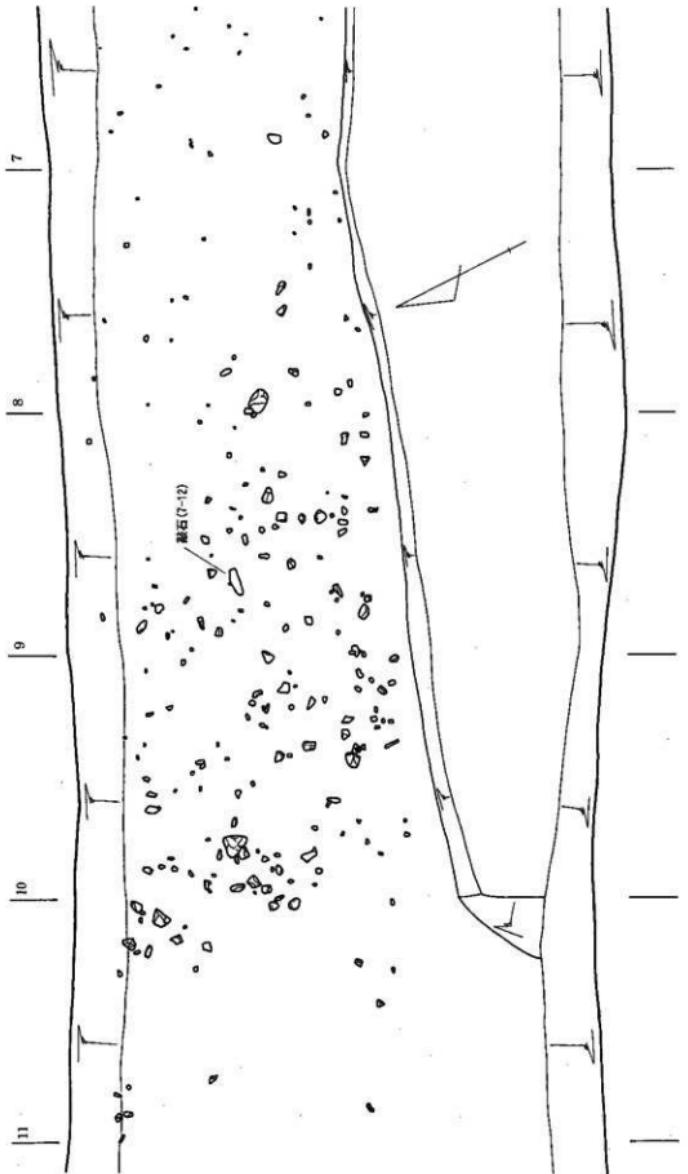
今回検出された礫群は比較的広範な広がりをみており、離れた位置関係で接合する礫も認められた。そして検出地点が比高差約1mの傾斜地面上にあることなどを考えると、これは加熱を受けた後にそのまま放置されたものというよりも、廃棄された状態のものであるという可能性が考えられる<sup>4)</sup>。

なお、やや小さめの礫が緩やかなまとまりをもって検出されるという状況は、高槻市郡家今城遺跡や津之江南遺跡などで検出された礫群とよく似ている<sup>5)</sup>。これまで近畿周辺において密集した礫群がほとんど確認されていない状況を考えると、この吉志部遺跡や郡家今城遺跡などの類似性は何らかの地域性を示すものかもしれない。

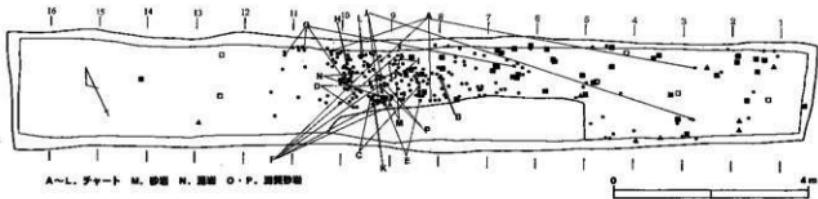


第23図 第7次調査土層断面図・石器類分布図

1m



第24図 第7次調査地盤平面図



第25図 第7次調査砾群接合関係図

#### 4. 遺物

第7次調査では、サヌカイト・チャートなどの石器類を85点（サヌカイト74点、チャート9点、砂岩1点、ホルンフェルス1点）検出した。これらのうち3点を除いては旧石器時代遺物包含層と考えられる淡黄灰色砂質土・黄灰色砂質土層から出土した。

7-1は翼状剥片である。しかし、底面側にあたる左側縁にその上半部分で裏面から表面にかけて、またその下半で表面から裏面にかけて細かな剥離調整が施されている。これを翼状剥片形成時の一次的な側縁部を、二次的な加工によって刃部を作り出したものとしてみると、削器としても分類できる資料である。

7-2は小型のナイフ形石器である。右側縁に打面調整痕および裏面からの背つけ加工が認められ、左側縁上部の約1/3に一次的な剥離に伴う刃部が認められる。また左側縁の下部約2/3が縦に折断されており、この折断によって背つけ加工したものとみると、これを二側縁加工のナイフ形石器としてもみることができる。

7-3は極小化したナイフ形石器である。右側縁と左側縁下部に表面からの調整剥離が施されている。表面には石理が目立つ。

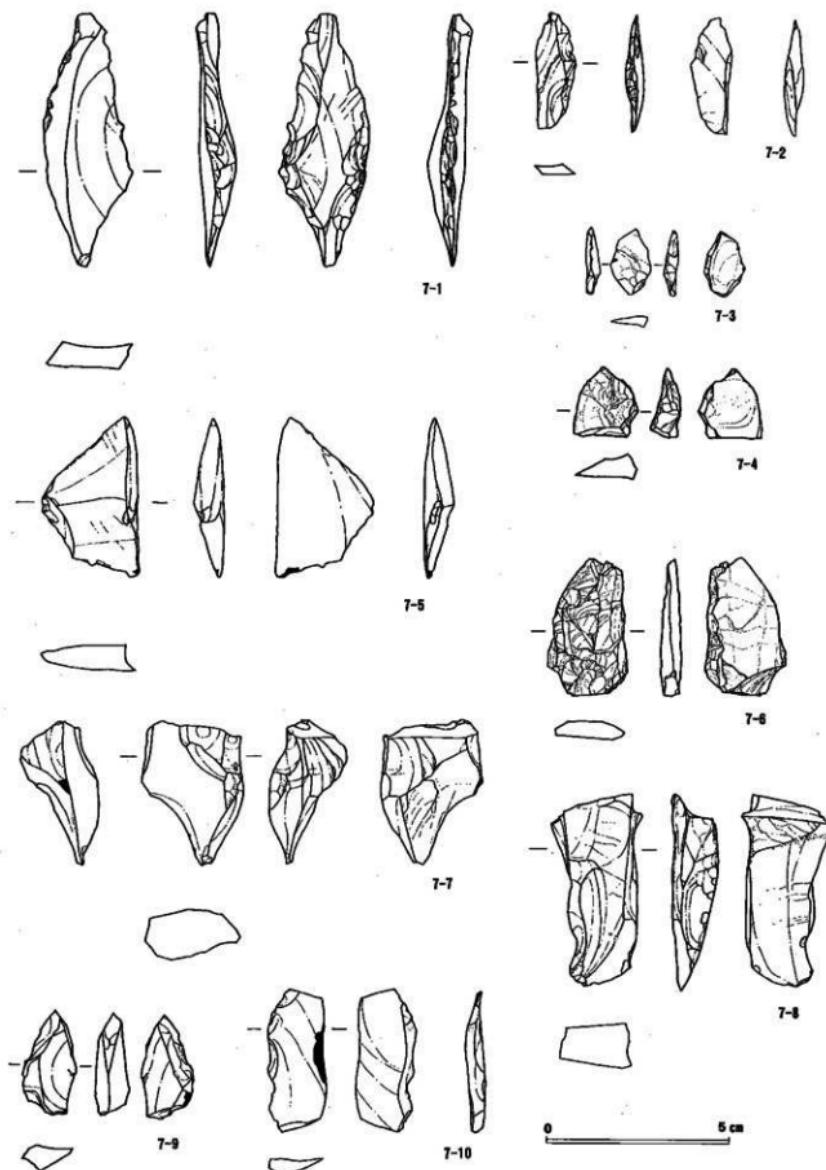
7-4は暗緑灰色チャートである。右側縁には打面調整と背つけのためと思われる剥離が認められ、小型のナイフ形石器としてとらえ得る資料である。上端および下端が折断されている。

7-5は2枚の大きなネガティブ面を表面にもつ素材剥片を、打点側にあたる右側縁とその対側縁とを折断することによって、台形様に整えられた石器である。他に調整は加えられていないが、左側縁上半に刃こぼれと思われる微細な剥離痕がみられ、この部分を刃部として使用したものと考えられる。

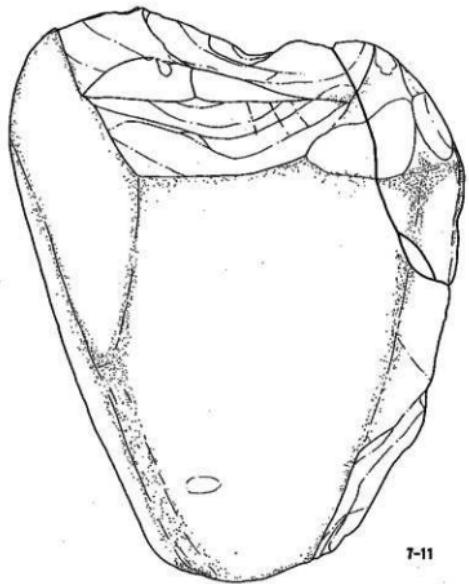
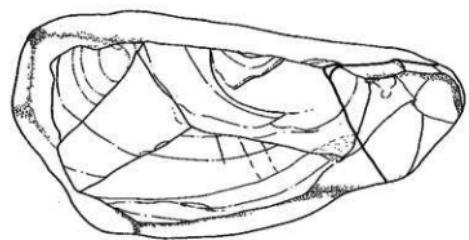
7-6は黒灰色チャートである。節理によってやや不鮮明であるが、表面左側縁と右側縁の裏面側にそれぞれ剥離痕が認められ、これを刃部を作り出したものとしてみると、削器としてみることのできる資料である。上端および下端については折断されている。

7-7は石核で、表面の上部右側に最終剥離作業面が認められる。この作業面から得られた剥片はかなり小さなものとなる。

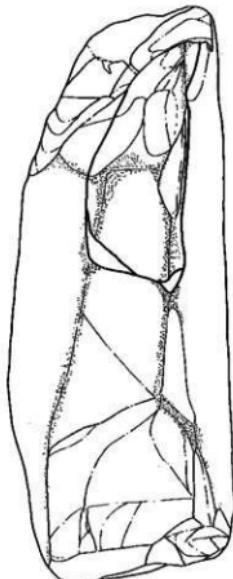
7-8は石核の素材ともなる大型剥片の両側縁を加熱・折断した後、上端部が折断されたものである。何を意図したのかはわからないが、折断後の右側縁に細かな剥離が施されている。



第26図 第7次調査遺物実測図1



7-11



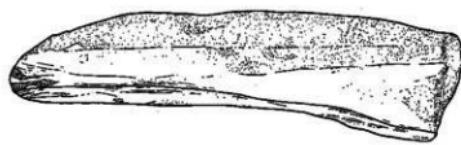
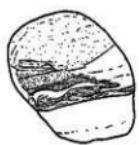
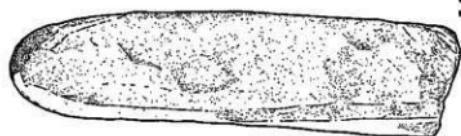
0 10cm

第27図 第7次調査遺物実測図2

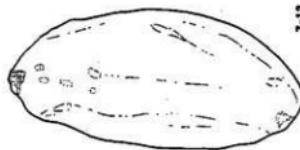
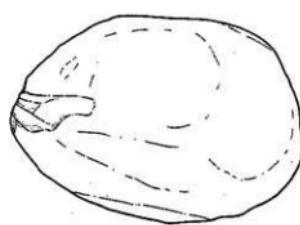
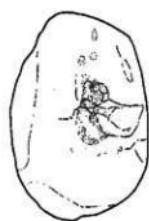
第28図 第7次調査遺物実測図 3

10cm

7-12



7-13



7-9は打点の位置が180度入れ替わっている剥片である。左側縁にいくらかの剥離痕が認められ、これを何らかの剥片を得るための最終剥離作業面としてとらえると、矮小化した石核の断片としてもとらえ得る資料である。しかし、この作業面から得られる剥片の大きさを考えると、石核であるとは断言できない。

7-10はやや山形を呈するように調整された打面から剥離された横長剥片である。上下端が折断されている。

7-11は砂岩製のチョッパーである。砂岩礫の一端の片面を大きく打ち欠いて刃部を作り出している。

7-12と7-13はその一端に打撃痕が認められ、敲石として使用されたと考えられる礫である。7-12はホルンフェルス、7-13はチャートである。

7-14は剥離後に打点側への加撃により打面は除去され、右側縁にわずかながら石核底面をつける剥片である。上端が少し欠損している。

7-15は表面に原礫面を残し、左側に石核底面をつける。右側縁には打面調整による剥離痕をわずかに残すが、剥離後に上下端および両側縁が折断されている。

7-16は表面がもともと原礫面に近かったようで、石理が段となり、中央付近に原礫の質感を残す。打点側には原礫面をつけ、特に打面調整は施されていない。剥離後に下端は剥ぎ取られ、上端は折断されている。

7-17は表面左側に広く石核底面をつける剥片である。打点側にあたる右側縁から下端にかけて原礫面を残し、明確な打面調整痕は認められない。上端および左側縁上半が剥離後に折断されている。

7-18は表面に原礫面をつけ、剥離後に両側縁が折断されて撥形を呈する剥片である。下端左に3枚の剥離痕が認められる。

7-19は特に打面調整を行わず、上端の原礫面から剥ぎ取られた剥片である。下端は折断されている。

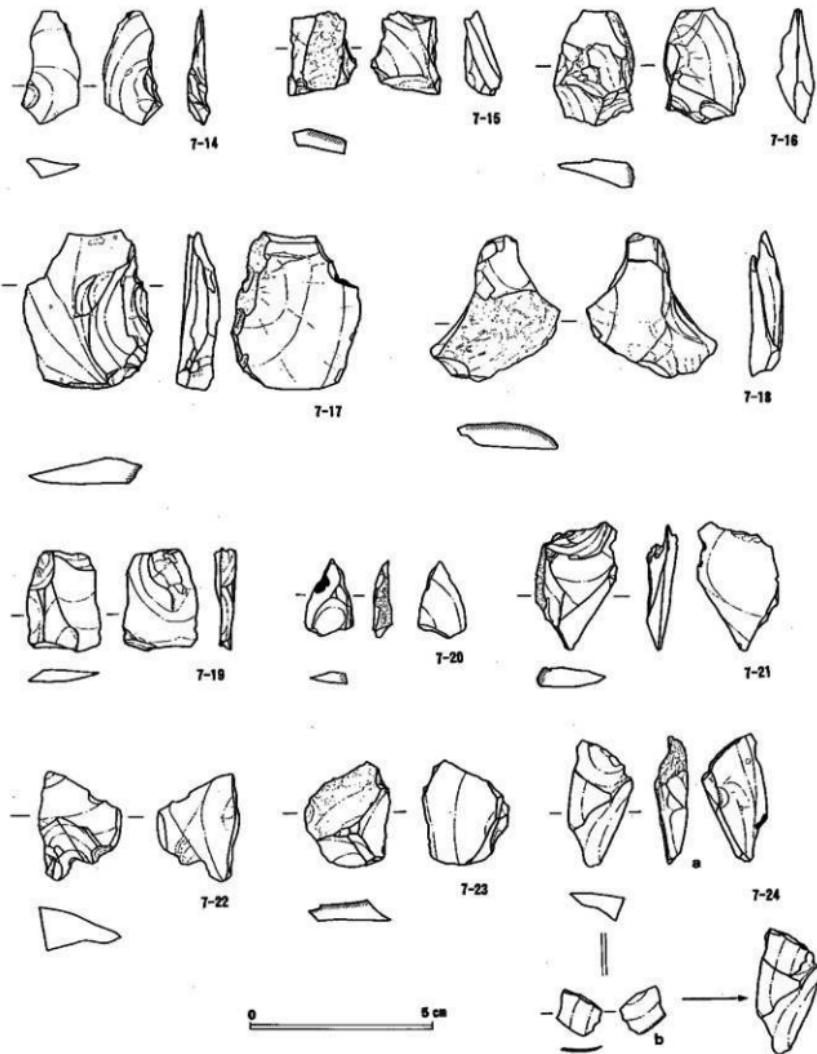
7-20は表面に石核底面をつけ、打点側にあたる右側縁に原礫面を残す剥片である。下端が折断されている。

7-21は表面に石核底面をつけ、打面調整の痕跡は認められず、原礫面から剥ぎ取られた剥片である。剥離後に左側下半が折断され、上端に剥離が施されている。

7-22は石核の折断面から剥離された剥片である。左側縁に打点が残る。

7-23は調整がなされた打面から剥ぎ取られた剥片である。表面上半に原礫面をつける。

7-24は接合資料である。しかし、これは意図的に剥片を得ようとしたものではなく、何らかの加力によって、7-24 b が7-24 a から剥がれ落ちるようにして形成されたものである。上端には原礫面をつけ、右側縁が折断されている。また、左側縁下半が少し欠損している。なお図化しなかったが、7-51についても7-51 b が7-51 a から剥がれ落ちたような形で認められるものである。



第29図 第7次調査遺物実測図4

7-25はポジティブな面から剥ぎ取られた剥片である。下端部は剥離後に折断されたようである。表面に広く原縁面をつける。

7-26は剥離後に打点側にあたる左側縁が折断された剥片である。下端には原縁面を残す。

7-27は打点近くからの剥離痕が表面に1枚認められる剥片である。右側縁に原縁面を残す。

7-28は打面調整は特に認められず、剥ぎ取り後に右側縁が折断された剥片である。

7-29はポジティブな石核底面をつける剥片である。左側縁および下端が折断されており、打面は認められない。

7-30は剥離後に打点側にあたる上端部が折断された剥片である。

7-31は表面に2枚の剥離痕が認められる剥片である。打面調整は特に認められず、剥離後に下端が折断されている。

7-32は表面にポジティブな面をもつ剥片である。打点側にあたる左側縁が折断されており、打面は認められない。また下端に原縁面を残す。

7-33は黒灰色チャートの剥片である。表裏面および全周にわたって加撃の痕跡が認められるが、この加撃が何を意図したものかはわからない。

7-34は赤色チャートの剥片である。右側縁上端の打面には筋理による凹凸が目立つが、細かな剥離痕も認められる。下端は剥ぎ取り後に折断されている。

7-35は黒灰色チャートの剥片である。打面調整を意図したのかどうかはわからないが、右側縁上半に剥離痕が認められる。右側縁下半および左側縁上半は剥離後に折断されている。

7-36は赤色チャートの剥片である。打面調整を意図したのかはわからないが、打面側に加撃の痕跡が認められる。右側縁下端に自然面を残す。

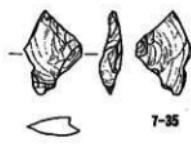
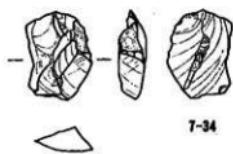
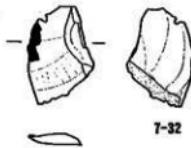
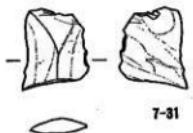
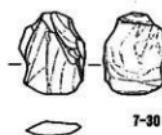
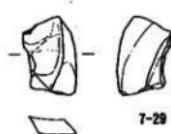
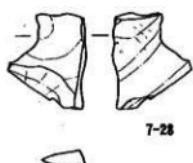
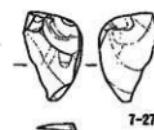
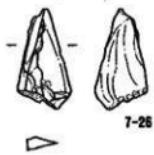
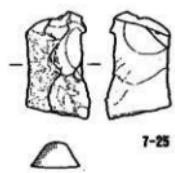
### III. 小 結

今回の発掘調査では多数の石器類を検出した。特に調査地西側に設定したトレンチからは、淡黄灰色砂質土・黄灰色砂質土層よりもまとまった形で旧石器類を検出することができた。さらに縁群の検出という成果も得て、これまでの調査の目的の一つであった旧石器時代の文化層の確認に至った。

縁群については調査区の範囲に限りがあったため、その全範囲を確認することはできなかつたが、比較的広く緩やかにまとまるという検出状況から、おそらく被熱するなどした後に廃棄されたものと考えられる。

また、文化層内からは、これまで確認されていなかった翼状剥片と国府型ナイフ形石器が検出され、当遺跡に瀬戸内技法の存在したことが明らかとなった。しかし、その数は少なく、例えば、これまで当遺跡では、文化層内外から27点（5-4除く）のナイフ形石器が確認されているが<sup>66</sup>、このうち国府型とみなし得るものは2点のみであり、瀬戸内技法が当遺跡において主体をなすものでないことは従前のとおりである。

そして、今回検出したナイフ形石器についてみると、これまでどおりその中心は中小型のも



第30図 第7次調査遺物実測図5

のであり、国府型ナイフ形石器である5-1を除いては、その大きさは長さ1.80~4.40cmの範囲に収まるものであった。そして、その素材剥片には横長・縦長両方のものが使用されていること、その調整加工が一側縁のみに施されているものと二側縁に及ぶものがあるという点、そして切出し形のものは少ないという点は、既出の資料と同様であった。

ところで、今回ナイフ形石器の中にチャート製のものが認められたが、ここでは、この他にも尖頭器や削器、楔形石器などチャート製の旧石器類が比較的多く検出された。これを火打ち石や風化程度の浅いものなどを除いた、旧石器類とみなし得るものの中での割合をみると、サヌカイト約88%、チャート約10%、その他約2%となる。これまでにも当遺跡では、サヌカイト以外の旧石器類としてメノウ製の錐状石器1点、チャートの剥片が2点確認されているが、今回の調査によって、当遺跡においてはチャートも石器素材としてある程度の割合をもって利用されていることが明らかとなった。

なお、チャート製のものに限らず今回検出された旧石器をみると、その器種はナイフ形石器の他に搔器やチョッパーなど多岐にわたり、これまでどおりその石器組成はバラエティーに富むものであった。

また、剥離技法についてみると、これも既出資料にみられたように、打面調整を施さずに剥離作業の行われている剥片等が比較的多く認められた。さらに今回の検出資料には、剥片剥離後その一端が折断されているものが多くあり、中には意図的に折断されているものも見受けられた。例えば、7-2や7-5などは折断することによって器形が整えられたものとみられ、当遺跡においては、折断することがある種の調整技法として存在していた可能性が考えられる。

以上のように、今回の調査では旧石器文化層や瀬戸内技法等の確認など重要な成果を得ることができた。しかし、その成果の多くはこれまでの収集資料等の分析より得ていた見解から大きくはずれるものではなく、むしろ従前の見解を跡づけるものであった。そして、これらをもって周辺の遺跡をみわたした場合、中小型のナイフ形石器を主体としつつ、多様な石器組成をみせるという点などは、これまで指摘してきたように、塚原遺跡の様相とよく似たものといえる<sup>7)</sup>。しかし、塚原遺跡の石器類については、そのほとんどが包含層から遊離した状況で検出されたものであることを考えれば、今回、吉志部遺跡において遺物包含層内から塚原遺跡と類似した石器類が出土したこと、かえって塚原遺跡の石器類の資料の一括性を評価し得るものとなり、この点で、今回の調査成果は意義深いものであるといえよう。

ところで、吉志部遺跡の詳細が報告されてから約20年が過ぎ、その間、近畿中央部においては良好な遺存状態で旧石器時代の遺構・遺物が多数確認されるようになった。特に大阪平野部においては層位的に遺構・遺物が検出され、またそこに広域火山灰層を挟む遺跡も確認されるようになり、遺跡間の対比や縦年の位置づけ作業が進展してきた<sup>8)</sup>。それゆえ、これまでの見解である津之江南遺跡C地点→吉志部遺跡・塚原遺跡といった編年觀も、改めて総合的に見直していく時機にあるのかもしれない。

そして、今回、第7次調査で採取した土壌の分析により、遺物包含層および地山層中にAT火

山ガラスの含有することが確認された。その詳細はIV節にあるが、結果として、地山層である明黄灰色粘質土層と遺物包含層の下層である黃灰色砂質土層の間か、もしくはこれら土層の堆積前後の間もない時期にATの降灰があり、これが二次的に両層中に取り込まれたのではないかということであった。のことから、第7次調査で検出された旧石器類については、AT降灰以降のものである可能性がたいへん強く、また第4次・第5次調査で検出された旧石器類についても、第7次と同様の土層内でその多くが認められていることから、これもおおむねAT以降に属するものではないかと考えられる。そして、今回の調査では瀬戸内技法に関連する資料も確認されているが、その中心となるものは瀬戸内技法以外の剥離技術によるものであり、ナイフ形石器については中小型のものがその主体となることから、吉志部遺跡の旧石器類は、AT降灰以降の瀬戸内技法衰退段階にその編年的位置づけをおくものと考えられる。

このように、今回の調査では編年作業の手がかりとなるAT火山ガラスと瀬戸内技法の存在を確認することができた。しかし、瀬戸内技法関連の資料に関しては、吉志部遺跡の旧石器類全体に占めるその割合はごく僅かであり、国府型ナイフ形石器と翼状剥片の各2点が確認されているのみである。そして、これらは当遺跡で主体となる中小型ナイフ形石器とも異質の感がある。それゆえ、ここで旧石器文化層としてとらえた土層中においては、少なくとも2時期の遺物の包含がある可能性も考えられ、この点で吉志部遺跡の編年位置づけは遊動的であり、今後さらに検討を加え、議論していく必要がある。

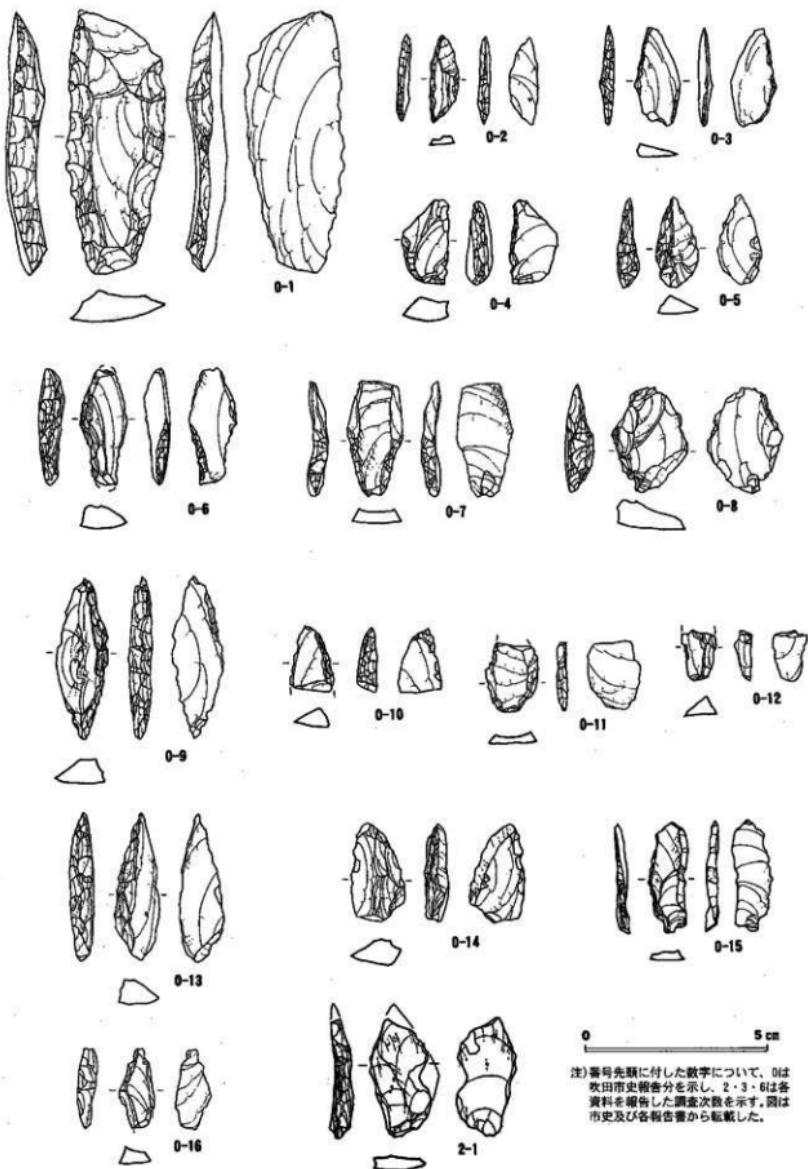
以上、旧石器を中心に吉志部遺跡をながめてきたが、はじめにも述べたように、当遺跡では旧石器時代の遺物ばかりではなく有舌尖頭器がまとまって出土していることでも特徴がある。しかし、今回の調査では石器は検出したものの、新たに有舌尖頭器を検出することはできなかつた。そして縄文土器をはじめとする他の遺物についても検出されず、今回もまた縄文時代の文化層を確認するには至らなかった。果たして、当遺跡において明確な縄文文化層を確認できるかどうかはわからないが、これについては今後の調査に期待したい。

第1表 吉志部遺跡旧石器器種割合

器種	吉志部遺跡全体		第4・5・7次調査		T1-TA-TB-TZ	
	点数	割合%	点数	割合%	点数	割合%
ナイフ形石器	27	12.6	10	6.2	8	5.8
孫器	4	1.9	2	1.2	0	0
削器	5	2.3	1	0.6	1	0.7
尖頭器	1	0.5	1	0.6	0	0
錐状石器	1	0.5	0	0	0	0
台形様石器	1	0.5	1	0.6	1	0.7
櫻形石器	3	1.4	1	0.6	0	0
チャッパー	1	0.5	1	0.6	1	0.7
敲石	2	0.9	2	1.2	2	1.4
台石	1	0.5	1	0.6	1	0.7
翼状剥片	2	0.9	2	1.2	2	1.4
盤状剥片	1	0.5	0	0	0	0
加工剥片	3	1.4	2	1.2	2	1.4
剥片	108	50.2	86	53.1	74	53.2
石核	9	4.2	6	3.7	5	3.6
碎片	44	20.5	44	27.2	41	29.5
その他	2	0.9	2	1.2	1	0.7
合計	215	—	162	—	139	—

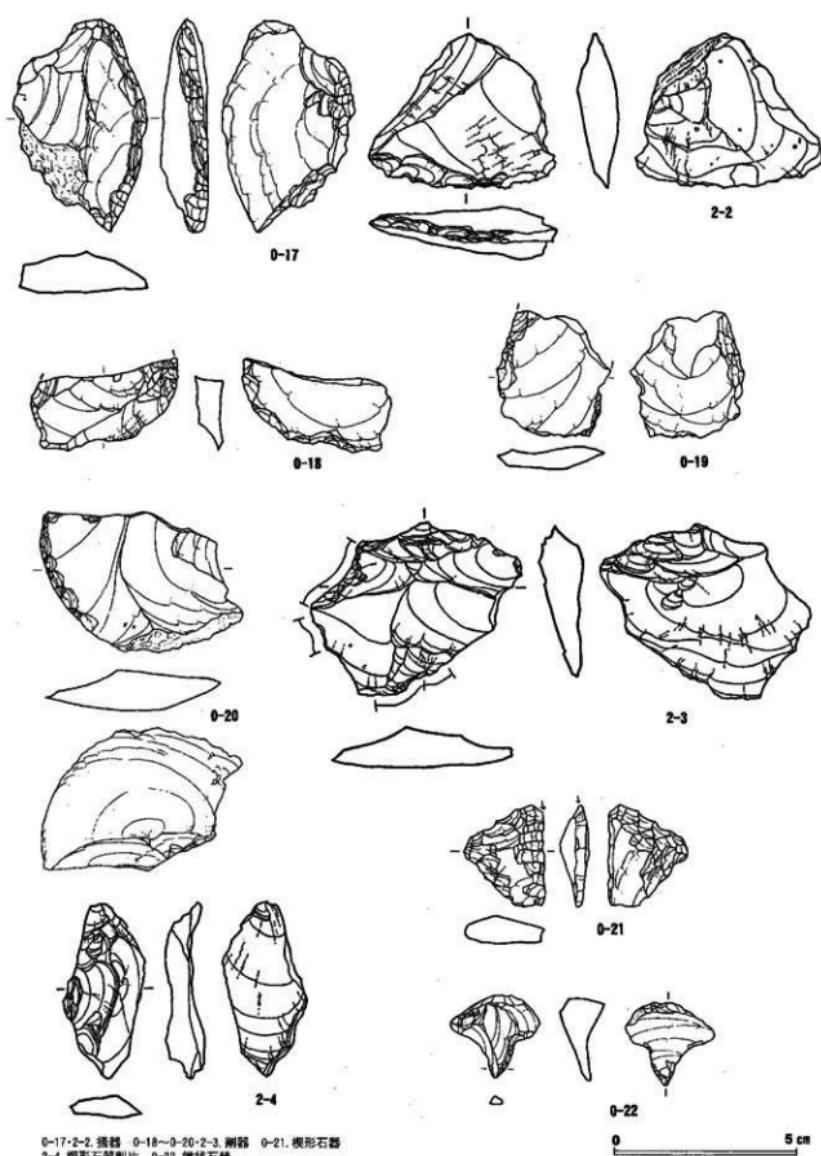
注1) 割合合計については、各割合数値を小数点第2位で四捨五入したため、100%とはならない。

注2) ここで台形様石器と表記したものについては、いわゆる国府文化期に先行する段階における「台形様石器」に属するものないことを断っておく。

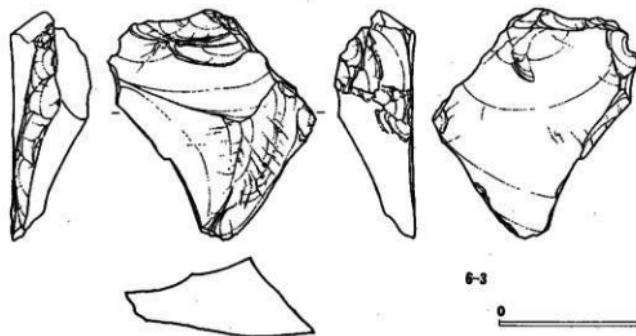
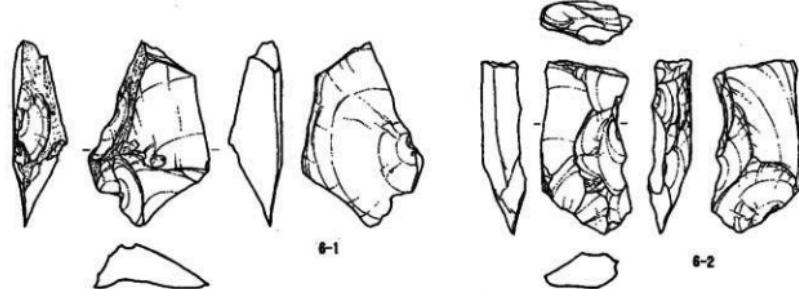
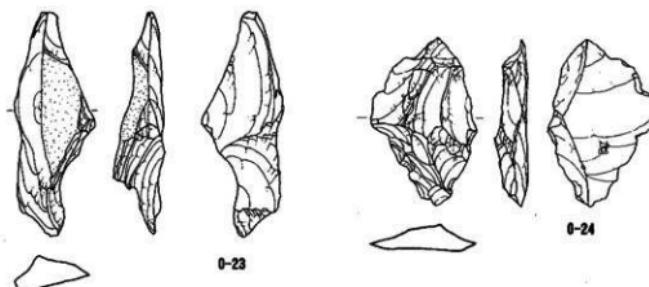


第31図 吉志部遺跡既出資料1 (ナイフ形石器)

注)番号先頭に付した数字について、0は吹田市史報告分を示し、2・3・6は各資料を報告した調査次数を示す。四は市史及び各報告書から転載した。

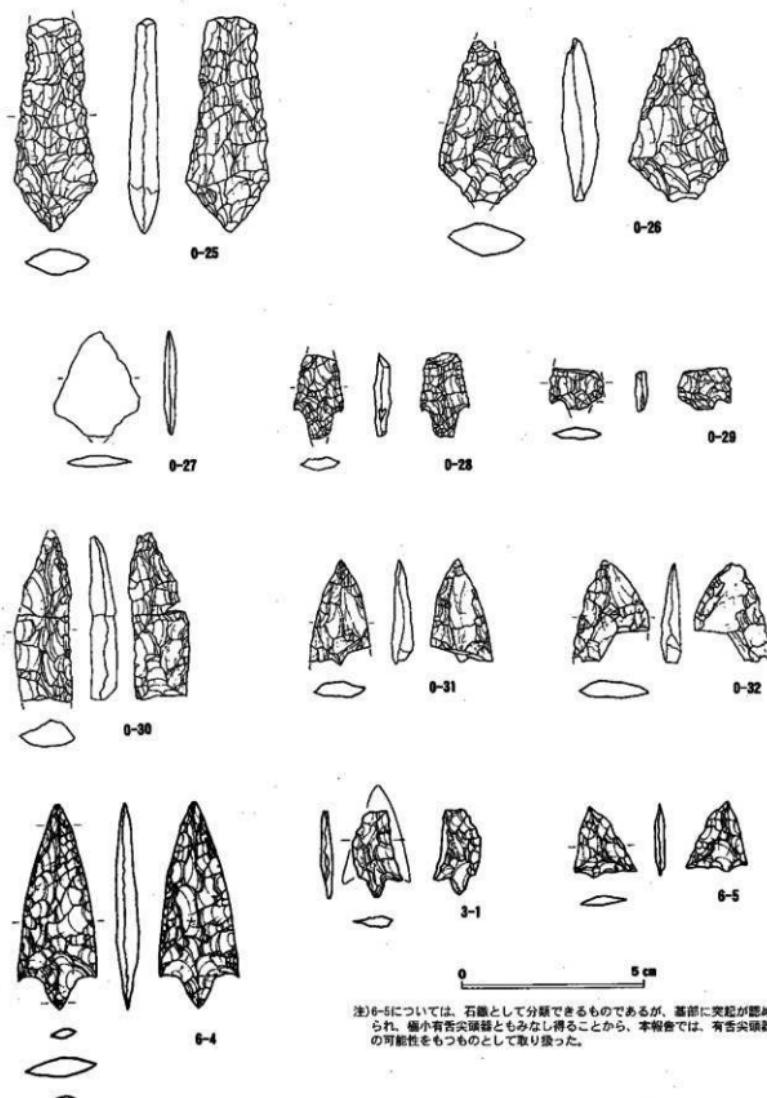


第32図 吉志部遺跡既出資料2



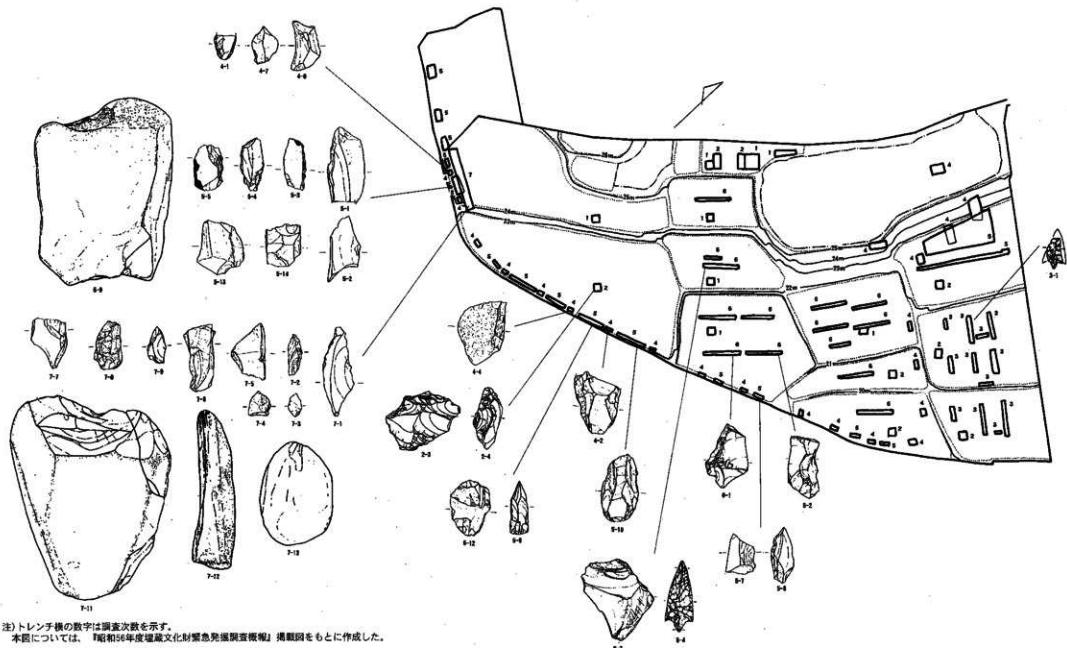
0-23. 石核 0-24-0-2. 石核(砾石型) 0-1. 加工底有剥片 0-3. 盘状剥片

第33図 吉志部遺跡既出資料3



注)6-5については、石器として分類できるものであるが、基部に突起が認められ、極小有舌尖頭器ともみなし得ることから、本報告では、有舌尖頭器の可能性をもつものとして取り扱った。

第34図 吉志部遺跡既出資料4（尖頭器）



第35図 吉志部遺跡発掘調査トレンチ配置および出土石器関係図（1:1,000）

第2表 吉志部遺跡石器計測表1

单位：μm、μ

第4次調查

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	トレチ	丸削	備考	原番号
4-1	ナイフ式石器	チヤート	1.90	1.70	0.50	1.81	T 1			
4-2	搔器	サヌカイト	4.80	3.70	1.25	18.59	T 7			
4-3	剥片	サヌカイト	5.10k	2.85	1.30	15.12	T 1			
4-4	石核	サヌカイト	5.25	3.80	1.25	22.93	T 6			
4-5	碎片	チヤート	2.10	1.20	0.60	0.74	T 1			
4-6	石核	サヌカイト	3.85	2.25	1.25	8.32	T 1			
4-7	石核	サヌカイト	2.95	2.05	1.50	6.46	T 1			
4-8	原石分割器	チヤート	4.90	2.85	1.60	38.10	T 1			
4-9	剥片	サヌカイト	3.50	1.35	0.60	2.62	T 1			
4-10	剥片	サヌカイト	2.80	1.60	0.80	2.31	T 1			
4-11	剥片	サヌカイト	2.30	1.95	0.30	1.07	T 1			
4-12	剥片	サヌカイト	2.65	2.65	0.85	10.61	T 4			
4-13	剥片	サヌカイト	4.80	3.70	1.45	22.42	T 1			
4-14	剥片	チヤート	2.00	1.85	1.85	6.34	T 7			
4-15	剥片	サヌカイト	6.35k	1.45k	0.90k	7.79	表探			
4-16	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.15	T 1			
4-17	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.15	T 1			
4-18	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.08	T 1			
4-19	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.07	T 1			
4-20	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.04	T 1			

第5次調查

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	トレンチ	焼附	備考	原番号
5-1	ナイフ形石器	サヌカイト	5.80	2.90	0.85	17.44	T B	内	国府型	B27
5-2	翼状石器	サヌカイト	5.20	2.35	0.50	5.08	T B	内		B6
5-3	ナイフ形石器	サヌカイト	4.10	1.75	0.70	4.72	T B	内		B7
5-4	ナイフ形石器	サヌカイト	4.10k	1.85	0.85	5.31	T B	内		B23
5-5	ナイフ形石器	サヌカイト	3.55	2.25k	0.80	5.37	T B	内	担形ナイフ	B14
5-6	尖頭石器	チャヤーイト	4.20	1.40	0.95	5.90	T F	外		F55
5-7	ナイフ形石器	サヌカイト	3.20	2.35	1.35	7.33	T I	外	国府型	-
5-8	ナイフ形石器	サヌカイト	4.40	1.80	0.90	5.46	T I	外		-
5-9	白石	砂岩	14.80	10.60	9.00	1943.50	T B	外		B41
5-10	擦器	サヌカイト	5.40	2.90	1.45	22.15	T G	内	角錐状石器?	-
5-11	剥片	サヌカイト	3.60	2.50	0.80	6.01	T E	外		-
5-12	楔形石器	チャヤーイト	4.30	3.25	0.65	8.66	T F	内		-
5-13	石核	サヌカイト	4.25	3.70	1.60	18.97	T B	内		B28
5-14	石核	サヌカイト	3.25	2.75	0.85	9.63	T B	内		B29
5-15	剥片	サヌカイト	5.65	3.00	1.60	18.94	T B	内		B5
5-16	剥片	サヌカイト	3.25	2.45k	0.90	5.97	T B	内		B18
5-17	剥片	サヌカイト	3.15	2.85	0.65	5.33	T B	内		B3
5-18	剥片	サヌカイト	2.95	1.10	0.60	1.75	T B	内		B49
5-19	剥片	サヌカイト	2.75	1.65	0.60	2.18	T B	内		B2
5-20	剥片	サヌカイト	2.90	2.35	0.50	2.79	T B	内		B1
5-21	剥片	サヌカイト	3.25	1.80	0.70	3.36	T B	内		B11
5-22	剥片	サヌカイト	2.45	2.70	0.80	4.44	T B	内		B4
5-23	剥片	サヌカイト	3.80k	1.60	0.55	3.03	T B	内		B34
5-24	剥片	サヌカイト	2.95	2.30	0.80	3.63	T A	内		A8
5-25	剥片	サヌカイト	3.50	2.30	1.00	8.60	T A	内		A15
5-26	剥片	サヌカイト	3.05	1.60	0.50	2.32	T D	内		D20
5-27	剥片	チャヤーイト	3.25	2.85	0.60	5.64	T E	内		E54
5-28	剥片	チャヤーイト	2.65	1.95	0.80	3.81	T E	外		-
5-29	剥片	サヌカイト	2.15	1.65	0.60	1.96	T G	外		G56
5-30	剥片	サヌカイト	3.90	1.90	0.95	6.67	T G	外		-
5-31	剥片	サヌカイト	2.70	2.15	1.85	10.59	T G	外		-
5-32	剥片	サヌカイト	3.85	2.30	0.70	4.92	T G	外		-
5-33	原石	サヌカイト	3.95k	2.80	1.15	15.95	T P	外		-
5-34	石鐵	サヌカイト	1.90k	1.40k	0.25	0.64	T E	外		-
5-35	石鐵	サヌカイト	2.60	1.85k	0.20	0.85	T G	外		-
5-36	石鐵	サヌカイト	1.75k	1.75	0.40	0.56	T P	外		-
5-37	石鐵	サヌカイト	1.70	1.45	0.35	0.59	T P	外		-

<sup>注）写のみは審査図がなく写真のみを掲載し、図・写無は審査図・写真とも掲載していないことを示す。</sup>

第3表 吉志部遺跡石器計測表2

単位: cm, g

## 第5次調査

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	レンチ	丸削削	備考	原番号
5-38	剥片	サヌカイト	1.50	1.70	0.25	0.67	TB	内	写のみ	B13
5-39	剥片	サヌカイト	2.20	1.65	0.40	1.04	TB	内	写のみ	B22
5-40	剥片	サヌカイト	2.10	1.70	0.35	1.07	TB	内	写のみ	B25
5-41	剥片	サヌカイト	1.90	2.00	0.65	1.55	TB	内	写のみ	B26
5-42	剥片	サヌカイト	1.75	1.50	0.35	0.75	TB	内	写のみ	B32
5-43	剥片	サヌカイト	1.85	1.15	0.30	0.49	TB	内	写のみ	B35
5-44	剥片	サヌカイト	1.55	2.00	0.40	1.12	TB	内	写のみ	B37
5-45	剥片	サヌカイト	2.25	1.45	0.20	0.62	TB	内	写のみ	-
5-46	剥片	サヌカイト	1.20	1.65	0.25	0.41	TB	内	写のみ	B17
5-47	研片	サヌカイト	-	-	-	0.07	TB	圆	写無	B9
5-48	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.15	TB	圆	写無	B10
5-49	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.03	TB	圆	写無	B12
5-50	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.16	TB	圆	写無	B19
5-51	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.04	TB	圆	写無	B21
5-52	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.06	TB	圆	写無	B24
5-53	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.35	TB	圆	写無	B30
5-54	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.27	TB	圆	写無	B31
5-55	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.30	TB	圆	写無	B33
5-56	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.01	TB	圆	写無	B36
5-57	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.38	TB	外	大打ち石等の写のみ	-
5-58	剥片	チャート	2.00	1.45	0.60	1.58	TE	外	大打ち石等の写のみ	-
5-59	剥片	サヌカイト	1.50k	1.90	0.55	1.17	TF	外	大打ち石等の写のみ	-
5-60	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.16	TG	外	大打ち石等の写のみ	-
5-61	研片	チャート	-	-	-	0.18	TH	外	大打ち石等の写のみ	-
5-62	剥片	サヌカイト	2.00	1.30	0.30	0.67	TO	外	大打ち石等の写のみ	-
5-63	剥片	チャート	1.30	1.35	0.70	1.53	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-64	碎片	チャート	1.30	1.50	0.75	1.18	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-65	剥片?	チャート	3.75	1.80	0.75	5.78	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-66	剥片	サヌカイト	2.10	1.85k	0.50	1.87	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-67	剥片	サヌカイト	1.75k	1.35k	0.55k	0.97	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-68	剥片	チャート	2.55	1.50	0.75	2.80	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-69	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.18	TP	外	大打ち石等の写のみ	-
5-70	剥片	サヌカイト	2.20k	1.65k	1.80	1.71	TG	外	風化度写のみ	-

## 第7次調査

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	レンチ	丸削削	備考	原番号
7-1	翼状剥片	サヌカイト	6.85	2.40	0.80	11.30	TZ	内	削器	Z1
7-2	ナイフ形石器	サヌカイト	3.15	1.10	0.40	1.25	TZ	内		Z99
7-3	ナイフ形石器	サヌカイト	1.80	1.10	0.35	0.57	TZ	内		-
7-4	ナイフ形石器	チャート	1.85	1.70	0.80	2.13	TZ	内		Z33
7-5	台形器石器	サヌカイト	4.25	2.65	0.75	7.38	TZ	内		Z41
7-6	刮削器	チャート	3.75	2.15	0.55	5.32	TZ	内		Z131
7-7	石核	サヌカイト	4.00	2.80	1.50	13.87	TZ	内	有加工痕	Z6
7-8	剥片	サヌカイト	5.20	2.50	1.25	15.52	TZ	内	粗工具石器	Z22
7-9	剥片	サヌカイト	2.90	1.45	0.85	3.25	TZ	内	横長剥片	Z17
7-10	剥片	サヌカイト	3.90	1.60	0.50	3.00	TZ	内		Z107
7-11	チョッパー	砂岩	15.80	12.40	6.30	1443.50	TZ	内		Z44
7-12	敲石	ホルンフェルス	12.30	3.50	3.60	174.95	TZ	内		Z212
7-13	敲石	チャート	8.00	5.60	3.80	216.72	TZ	内		Z18
7-14	剥片	サヌカイト	3.10	1.50	0.60	1.71	TZ	内		Z25
7-15	剥片	サヌカイト	2.30	1.90	0.80	3.35	TZ	内		Z9
7-16	剥片	サヌカイト	3.15	2.20	0.95	5.53	TZ	内		Z302
7-17	剥片	サヌカイト	4.25	3.55	0.85	13.37	TZ	内	a·b接合	-
7-18	剥片	サヌカイト	4.00	3.50	0.90	10.55	TZ	内		Z8
7-19	剥片	サヌカイト	2.65	2.00	0.55	3.09	TZ	内		Z173
7-20	剥片	サヌカイト	2.10	1.25	0.40	0.95	TZ	内		Z126
7-21	剥片	サヌカイト	3.50	2.20	0.75	4.14	TZ	内		Z133
7-22	剥片	サヌカイト	2.95	2.25	1.30	4.45	TZ	内		Z10
7-23	剥片	サヌカイト	2.85	2.30	0.65	3.81	TZ	内		Z258
7-24a	剥片	サヌカイト	3.45	1.70	0.95	3.72	TZ	内		Z49
7-24b	碎片	サヌカイト	-	-	-	0.12	TZ	内		-

第4表 吉志部遺跡石器計測表3

単位: cm. g

## 第7次調査

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	トレンチ	丸削削	備考	原番号
7-25	剥片	サヌカイト	2.90	1.75	0.90	4.37	T Z	内		Z51
7-26	剥片	サヌカイト	2.75	1.45	0.60	1.62	T Z	内		Z20
7-27	剥片	サヌカイト	2.45	1.60	0.40	1.22	T Z	内		Z64
7-28	剥片	サヌカイト	2.55	2.15	0.65	1.91	T Z	内		Z104
7-29	剥片	サヌカイト	2.15	1.50	0.60	1.87	T Z	内		Z106
7-30	剥片	サヌカイト	2.20	1.80	0.60	1.77	T Z	内		—
7-31	剥片	サヌカイト	2.25	1.85	0.45	1.81	T Z	内		—
7-32	剥片	サヌカイト	2.70	1.80	0.55	2.14	T Z	内		—
7-33	剥片	チャート	2.55	2.00	0.75	3.64	T Z	内		Z23
7-34	剥片	チャート	2.40	1.75	0.75	2.53	T Z	内		Z34
7-35	剥片	チャート	2.30	1.55	0.55	1.29	T Z	内		Z65
7-36	剥片	チャート	2.10	2.05	0.55	2.83	T Z	内		—
7-37	剥片	サヌカイト	2.70	0.90	0.60	0.92	T Z	内	写のみ	Z15
7-38	剥片	サヌカイト	1.10	1.25	0.40	0.37	T Z	内	写のみ	Z22
7-39	剥片	サヌカイト	1.95	1.65	0.35	0.93	T Z	内	写のみ	Z24
7-40	剥片	サヌカイト	2.25	1.55	0.30	1.07	T Z	内	写のみ	Z26
7-41	剥片	サヌカイト	2.20	1.35	0.25	0.52	T Z	内	写のみ	Z27
7-42	剥片	サヌカイト	2.45	1.90	0.35	1.45	T Z	内	写のみ	Z42
7-43	剥片	サヌカイト	2.75	1.20	0.40	0.83	T Z	内	写のみ	Z69
7-44	剥片	サヌカイト	1.70	1.45	0.40	0.99	T Z	内	写のみ	Z132
7-45	剥片	サヌカイト	2.10	1.15	0.25	0.69	T Z	内	写のみ	Z148
7-46	剥片	サヌカイト	1.90	1.30	0.50	0.66	T Z	内	写のみ	Z162
7-47	剥片	サヌカイト	2.80	1.20	0.60	1.73	T Z	内	写のみ	Z179
7-48	剥片	サヌカイト	1.70	1.65	0.30	0.99	T Z	内	写のみ	Z203
7-49	剥片	サヌカイト	2.25	1.10	0.50	1.37	T Z	内	写のみ	Z303
7-50	剥片	サヌカイト	1.95	1.10	0.45	0.43	T Z	内	写のみ	Z304
7-51a	サヌカイト	2.10	0.90	0.45	0.49	T Z	内	写のみ	Z121	
7-51b	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.07	T Z	内	写のみ	Z121
7-52	剥片	サヌカイト	1.65	1.00	0.20	0.30	T Z	内	写のみ	Z123
7-53	剥片	チャート	2.15	0.75	0.55	1.29	T Z	内	写のみ	Z13
7-54	剥片	サヌカイト	1.45	1.50	0.45	0.91	T Z	内	写のみ	—
7-55	剥片	サヌカイト	1.55	1.30	0.25	0.55	T Z	内	写のみ	—
7-56	剥片	サヌカイト	1.25	1.00	0.20	0.31	T Z	内	写のみ	—
7-57	剥片	サヌカイト	1.55	1.45	0.25	0.46	T Z	内	写のみ	—
7-58	剥片	サヌカイト	2.05	1.50	0.65	1.24	T Z	内	写のみ	—
7-59	剥片	サヌカイト	2.20	1.05	0.40	0.66	T Z	内	写のみ	—
7-60	剥片	サヌカイト	1.85	1.25	0.45	0.59	T Z	内	写のみ	—
7-61	剥片	サヌカイト	2.05	1.00	0.40	0.76	T Z	内	写のみ	Z11
7-62	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.11	T Z	内	写無	Z35
7-63	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.05	T Z	内	写無	Z36
7-64	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.01	T Z	内	写無	Z37
7-65	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.16	T Z	内	写無	Z98
7-66	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.06	T Z	内	写無	Z156
7-67	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.15	T Z	内	写無	Z200
7-68	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.15	T Z	内	写無	Z214
7-69	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.17	T Z	内	写無	Z222
7-70	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.11	T Z	内	写無	Z273
7-71	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.15	T Z	内	写無	—
7-72	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.17	T Z	内	写無	—
7-73	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.31	T Z	内	写無	—
7-74	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.13	T Z	内	写無	—
7-75	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.07	T Z	内	写無	—
7-76	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.35	T Z	内	写無	—
7-77	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.13	T Z	内	写無	—
7-78	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.07	T Z	内	写無	—
7-79	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.22	T Z	内	写無	—
7-80	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.26	T Z	外	写無	—
7-81	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.20	T Z	外	写無	—
7-82	碎片	サヌカイト	—	—	—	0.12	T Z	内	写無	—
7-83	碎片	チャート	—	—	—	0.04	T Z	内	写無	Z228

## IV. 捷論：火山灰分析

渡辺正巳(文化財調査コンサルタント)・西田史朗(奈良教育大学)

### (1) はじめに

吉志部遺跡は大阪府吹田市岸部北1丁目地内に立地する遺跡である。

本報では、石器出土層準の年代を推定する目的で、発掘調査に伴って露出した各層準より採取した試料を対象として行った、火山灰分析について述べる。

### (2) 分析試料について

第7次調査TZ内にて、吹田市教育委員会の発掘調査担当者により分析試料が採取された。試料は、①包含上層（淡黄灰色砂質土層）、②包含下層（黄灰色砂質土層）、③地山層（明黃灰色粘質土層）の3点である。模式柱状図を第36図の左端に示す。

### (3) 火山灰分析方法

渡辺ほか<sup>9)</sup>にしたがい、火山ガラスの含有量を求めた。さらに西田<sup>10)</sup>にしたがいEDS法により火山ガラスの元素分析および、VAISによる火山ガラスの判定を行った。

### (4) 分析結果

火山ガラスの含有状況を第5表、第36図に示す。また、火山ガラスの元素分析結果、VAISによる判定結果を第6~8表に示す。

### (5) 考察

#### 1. 火山ガラス含有量より

いずれの試料でも火山ガラスの含有量が2%程度（粒数比）以下と、純粋な火山灰層である可能性はほとんどない。

第5表の粒数比（あるいは重量比）の分析から、「地山層」と「包含下層」の間に火山灰の降灰層準が位置するように考えられる。しかし分析試料の採取間隔が広く、間を埋める試料も存在しないことから、降灰が地山層（地層として）中の出来事であったのか、包含下層（地層として）中の出来事であったのか、結論はでない。いずれにしろ、「地山層」と「包含下層」の間あるいは両試料採取層準の堆積前後間もない頃に火山灰が降灰し、両層中に二次堆積、あるいは生物擾乱により取り込まれたと考えられる。

#### 2. SEM像での表面形態観察より

SEM像での表面形態の観察を行うと、今回検出できたほとんどの火山ガラスは中程度の厚みのバブル・ウォール型を示す。K-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）火山ガラスより厚く、AT（姶良Tn

火山灰) 火山ガラスよりさらに厚いものが含まれる。火山ガラスの表面には腐食跡が見られることが多いが、今回の火山ガラスでも一面に腐食跡が見られる。表面形態からK-Ah火山ガラスとAT火山ガラスの混在が予想されるが、さらに別の火山ガラスが混じる可能性もある。したがって、検出できた火山ガラスは複数の火山灰層起源の火山ガラスが二次堆積、あるいは生物擾乱により混在している可能性が高いと考えられる。

### 3. VAISより

第6～8表に火山灰1片ごとにVAISを試みた結果が示してある。前述のSEM像の観察を指示するように「地山層」、「包含下層」中のほとんどの火山ガラスがATに由来し、「包含上層」中の火山ガラスはK-Ahに由来するもの、所属不明のものが多く認められる。下位の試料ほどK-Ahに由来するもの、所属不明のものの割合が低いことから、これらは「包含上層」の上位から生物擾乱のために混入した可能性が高いと考えられる。

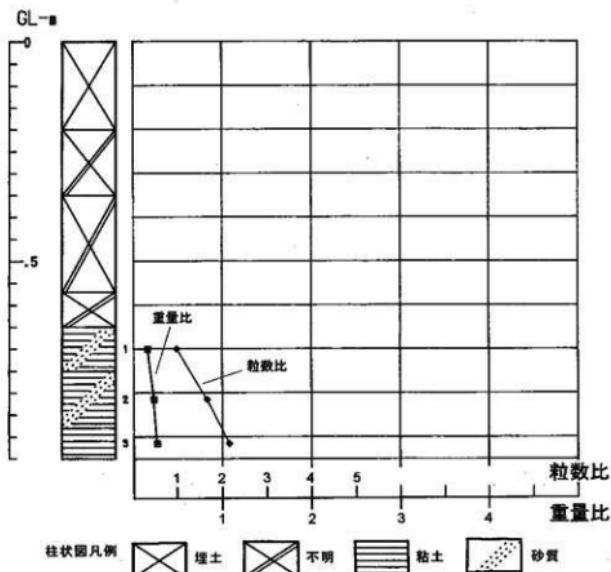
### 4.まとめ

前述の事柄から、「地山層」と「包含下層」の間、あるいは両試料採取層準の堆積前後間もない頃にATが降灰し（およそ23,000年前）、両層中に二次堆積、あるいは生物擾乱により火山ガラスが取り込まれたと考えられる。また「包含上層」堆積後K-Ah（およそ6,300年前）ほかの火山灰が降灰し、生物擾乱により各層に火山ガラスが取り込まれたと考えられる。

## （6）結語

吉志部遺跡において実施した火山灰分析の結果、以下のことが明らかになった。

- ①「地山層」と「包含下層」の間、あるいは両試料採取層準の堆積前後間もない頃（およそ23,000年前）にATが降灰した。
- ②分析試料中には、二次堆積、あるいは生物擾乱によりAT起源の火山ガラスが取り込まれた。
- ③「包含上層」堆積後、K-Ah（およそ6,300年前）ほかの火山灰が降灰した。
- ④分析試料中には、生物擾乱によりK-Ahほか起源の火山ガラスが取り込まれたと考えられる。



第36図 火山ガラスの粒数比・重量比一覧図

第5表 火山ガラスの含有量分析表

試料No.	試料の総重 量W(g)	含水比 w	試料の乾燥 重量W <sub>0</sub> (g)	粉碎後の 重量W <sub>1</sub> (g)	計測した試料 重量W <sub>2</sub> (g)	ガラス粒数 N(個)	粒数比 N <sub>0</sub> (個/g)	重量比 W <sub>0</sub> /W(g)	備考
1 (包含上層)	23.28	0.77	23.1	4.729	0.026	110	0.98	0.160	
2 (包含下層)	19.74	0.81	19.6	3.425	0.034	244	1.66	0.231	
3 (地山層)	24.99	0.88	24.8	3.767	0.023	215	2.16	0.265	

※Wは1/1000で四捨五入、W<sub>0</sub>は1/100で四捨五入して示してある

第6表 包含上層の火山ガラス元素分析結果

分析No	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO	対比結果
4747-01	4.10	0.11	12.36	76.83	3.35	1.29	0.17	1.50	AT
4747-02	1.59	0.68	12.03	78.61	3.61	1.69	0.20	1.76	
4747-03	3.83	0.12	12.56	77.48	3.16	1.27	0.14	1.17	AT
4747-04	4.30	0.23	12.53	73.20	3.02	2.49	0.53	2.77	Ah
4747-05	4.46	0.14	13.56	74.01	3.36	1.24	0.21	2.62	
4747-06	3.89	0.10	12.23	77.38	3.41	1.39	0.10	1.33	AT
4747-07	5.33	0.28	13.32	73.97	2.47	1.94	0.39	1.54	Ah
4747-08	2.53	0.14	12.65	72.18	3.65	3.03	0.53	4.20	Ah
4747-09	3.37	0.07	12.38	77.70	3.36	1.31	0.20	1.32	AT
4747-10	3.38	0.07	12.39	77.69	3.37	1.30	0.20	1.31	AT
4747-11	4.26	0.12	12.19	76.66	3.38	1.33	0.23	1.50	
4747-12	3.58	0.13	12.19	76.98	3.59	1.35	0.14	1.69	AT
4747-13	4.23	0.11	12.27	77.01	3.39	1.19	0.14	1.38	AT
4747-14	2.73	0.08	12.29	78.14	3.45	1.32	0.11	1.58	AT
4747-15	4.20	0.17	13.47	75.37	2.91	1.23	0.11	2.18	AT
4747-16	4.89	0.25	13.98	72.03	2.77	2.26	0.38	2.59	Ah
4747-17	2.62	0.07	11.83	78.53	3.70	1.54	0.18	1.21	AT
4747-18	4.65	0.25	12.96	73.45	2.70	2.29	0.35	2.52	Ah
4747-19	2.21	0.08	11.51	74.07	5.06	2.13	0.17	4.09	
4747-20	2.74	0.09	12.18	78.45	3.40	1.31	0.07	1.48	AT

第7表 包含下層の火山ガラス元素分析結果

分析No	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO	対比結果
4748-01	3.29	0.25	12.70	73.77	3.05	2.49	0.46	3.04	Ah
4748-02	3.41	0.06	12.38	77.83	3.60	1.15	0.24	1.12	AT
4748-03	3.28	0.10	11.97	77.36	3.84	1.45	0.14	1.51	AT
4748-04	4.23	0.14	12.36	76.50	4.43	0.96	0.14	1.00	AT?
4748-05	3.51	0.10	12.11	77.35	3.70	1.28	0.08	1.50	AT
4748-06	2.87	0.11	12.26	78.53	3.36	1.19	0.26	1.11	AT
4748-07	3.58	0.12	12.36	77.57	3.26	1.23	0.08	1.43	AT
4748-08	3.53	0.08	12.00	77.48	3.48	1.45	0.17	1.50	AT
4748-09	3.53	0.10	12.08	77.10	3.59	1.37	0.19	1.61	AT
4748-10	3.08	0.10	11.89	77.49	3.84	1.50	0.25	1.46	AT
4748-11	3.25	0.07	11.89	77.58	3.73	1.46	0.15	1.57	AT
4748-12	3.43	0.09	12.31	77.64	3.44	1.37	0.13	1.32	AT
4748-13	3.89	0.09	11.66	76.44	4.22	1.47	0.19	1.76	AT
4748-14	4.06	0.14	12.34	77.52	3.19	1.22	0.05	1.21	AT?
4748-15	2.21	0.11	12.22	78.87	3.56	1.34	0.10	1.30	AT
4748-16	3.40	0.09	11.91	78.18	3.60	1.22	0.10	1.36	AT
4748-17	3.84	0.09	12.41	78.10	3.09	1.19	0.07	1.05	AT?
4748-18	3.56	0.08	12.57	78.42	2.94	1.28	0.11	0.72	AT?
4748-19	2.72	0.11	11.98	78.11	3.49	1.48	0.12	1.62	AT
4748-20	3.53	0.11	12.11	77.32	3.71	1.34	0.11	1.36	AT

第8表 地山層の火山ガラス元素分析結果

分析No	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO	対比結果
4749-01	3.50	0.13	14.26	74.45	3.19	1.13	0.15	2.82	AT?
4749-02	3.45	0.07	11.71	77.52	3.99	1.40	0.11	1.47	AT
4749-03	3.04	0.07	12.24	77.99	3.51	1.34	0.14	1.41	AT
4749-04	3.70	0.11	12.13	77.49	3.61	1.23	0.17	1.28	AT
4749-05	4.12	0.11	12.07	76.92	3.71	1.34	0.17	1.27	AT
4749-06	4.41	0.12	12.62	77.07	3.24	1.15	0.08	1.07	AT?
4749-07	2.69	0.10	11.66	77.53	4.12	1.56	0.14	1.81	AT
4749-08	3.22	0.07	12.29	78.41	3.40	1.16	0.11	1.14	AT
4749-09	2.42	0.11	12.22	78.31	3.54	1.39	0.20	1.45	AT?
4749-10	4.18	0.09	12.23	76.09	3.60	1.40	0.14	1.96	AT
4749-11	4.16	0.11	12.29	77.23	3.35	1.32	0.13	1.11	AT
4749-12	3.65	0.11	12.01	77.48	3.59	1.31	0.10	1.47	AT
4749-13	3.29	0.11	12.40	77.93	3.46	1.28	0.07	1.19	AT
4749-14	3.64	0.11	12.21	78.02	3.17	1.17	0.13	1.30	AT
4749-15	2.85	0.11	12.17	78.85	3.08	1.36	0.14	1.22	AT
4749-16	4.01	0.14	12.39	77.73	3.07	1.19	0.08	1.12	AT?
4749-17	3.40	0.10	11.97	77.94	3.50	1.24	0.11	1.47	AT
4749-18	4.70	0.19	12.58	73.11	3.07	2.41	0.47	2.61	Ah
4749-19	4.77	0.09	12.22	76.75	3.28	1.28	0.09	1.29	AT
4749-20	4.59	0.13	12.09	75.80	3.57	1.68	0.13	1.60	AT

注)

- 1) 吹田市史編さん委員会編『吹田市史第8巻』、1981年、27-70頁。
- 2) 第1次調査については、①吹田市教育委員会編『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1981年、3-23頁。第2次については、②同編『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1982年、14-23頁。第3次については、③同編『平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1991年、12-23頁。第6次については、④同編『平成4年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1993年、19-26頁で、それぞれ報告されている。
- 3) 吉志部遺跡については、前掲1)文献と前掲2)①文献において総括的にまとめられているが、両者の間ではその見解に若干の相違があり、ここでは後者文献の見解によった。
- 4) ①金山喜昭「武藏野・相模野両台地における旧石器時代の礫群の研究」、神奈川考古19、1984年、1-34頁。②岡村道雄「日本旧石器時代史」、雄山閣、1990年、180-183頁。
- 5) ①高槻市教育委員会編『津之江南遺跡発掘調査報告書』、1976年。②同編『郡家今城遺跡発掘調査報告書』、1978年。
- 6) 本報告をまとめるにあたり既出資料を改めて確認したところ、前掲1)文献で縦長削片として分類された前掲1)文献所収図18No23がナイフ形石器としてみなすことができ、またナイフ形石器とされていた前掲1)文献所収図24No46が横長削片であると判明し、ナイフ形石器の点数に変わりはないが、その内容に若干の変更が生じた。
- 7) 大船孝弘「高槻市の遺跡」(麻生優他編『日本の旧石器文化3』所収、雄山閣、1984年、14-55頁)。
- 8) 久保弘幸「瀬戸内技法を伴う石器群の変遷」(中・四国旧石器文化講話会編『瀬戸内技法とその時代本編』所収、1994年、111-123頁)。
- 9) 渡辺正巳・古谷正和「花粉・珪藻・火山灰分析」(大阪府教育委員会編『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要』所収、1990年、71-82頁)。
- 10) 西田史朗「エネルギー分散型EPMA法(EDS)」(日本第四紀学会編『第四紀試料分析法2 研究対象別分析法』所収、東京大学出版会、1992年、189-199頁)。

## 第3章 吉志部瓦窯跡（工房跡）における発掘調査

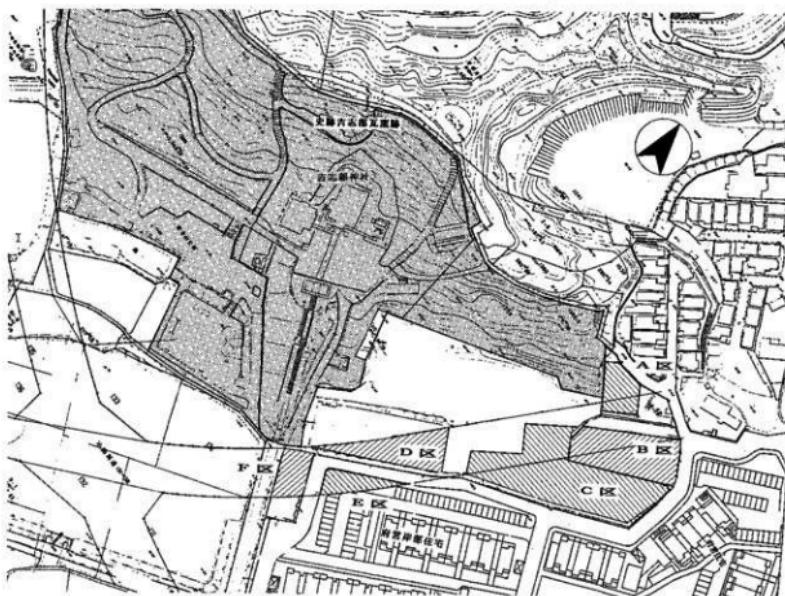
### I. 吉志部瓦窯跡（工房跡）調査の概要

平安宮造営当初の造宮瓦窯である吉志部瓦窯跡は吹田市岸部北4丁目、千里丘陵東南端の紫金山と呼ばれる支丘陵の南斜面に位置し、瓦窯は西から東に伸びる標高40m、比高20mの丘陵中腹に構築されている。昭和43年に大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、平窯9基、登窯4基が確認され、昭和46年に国の史跡に指定されている。

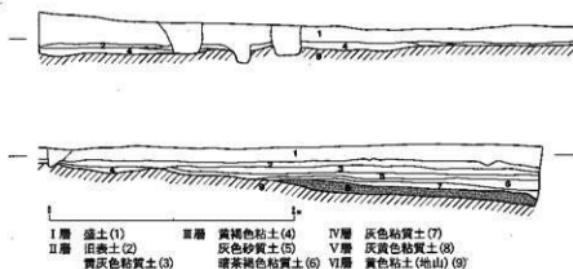
瓦窯の所在する丘陵南側は南方の沖積平野に向って緩やかに傾斜しており、この丘陵端から裾部分における確認調査等によって、吉志部瓦窯の工房に関連すると考えられる遺構を確認した。

発掘調査は都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う事前調査として、平成3年度及び7年度に史跡吉志部瓦窯跡の東南側に接する地点において、A～F区の6ヶ所の調査区（計2937.4m<sup>2</sup>）を設定して調査を実施した。

調査ではB・C・D区において吉志部瓦窯操業期の掘立柱建物15棟・回転台跡9基、井戸1基、土坑15基等を、C・E・F区において粘土探掘坑を確認するとともに、B・C・D区において後期難波宮の造宮瓦窯である七尾瓦窯操業期の土坑2基、井戸1基を、C・D区において平安時代後半期の掘立柱建物13棟を、C区において中世の溝等を確認した<sup>1)</sup>。



第37図 吉志部瓦窯跡（工房跡）発掘調査地周辺図（1:2,000）

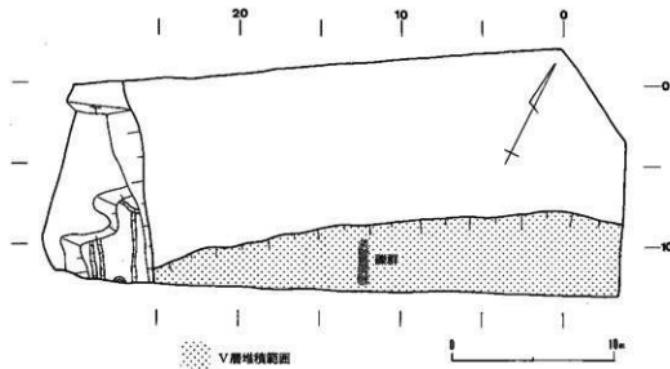


第38図 B区土層断面図（東壁）

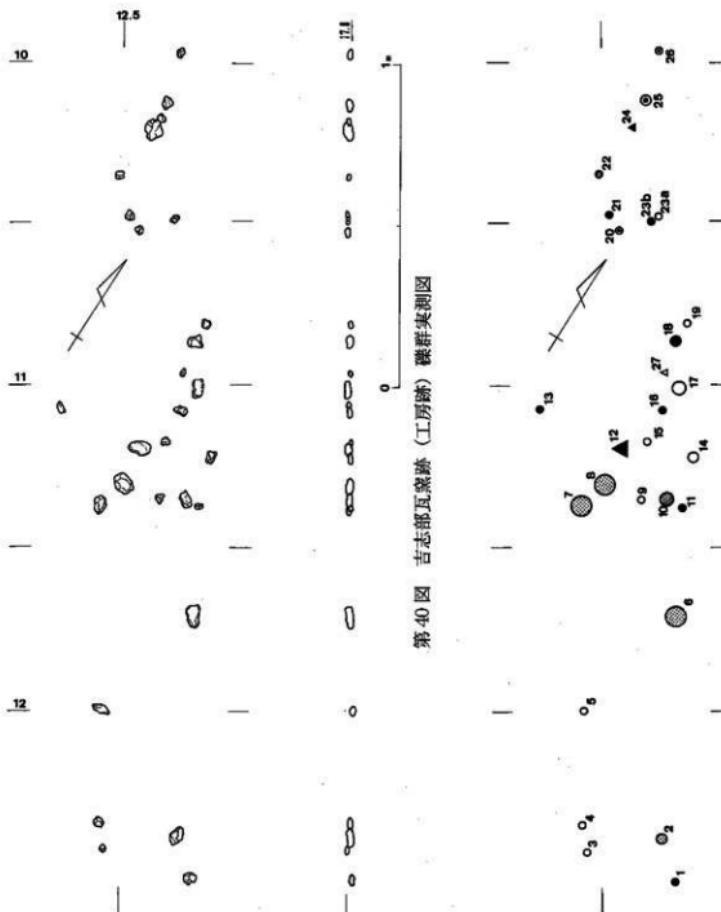
この内、B区南半部の工房遺構等の遺構面下層において旧石器時代の櫛群を確認するとともに、B・C・D・F区で平安時代及び中世遺物包含層等から旧石器及び縄文時代の石器の出土を確認した。

疊群を確認したB区の現状は丘陵直下で、宅地として造成された平坦面をなし、地表面は標高18.90mから18.65mである。B区の土層の堆積状況は現代の盛土層（I層、層厚30cm前後）、近・現代の耕作土層及び整地層（II層、層厚10~20cm）と続き、中世の包含層（III層）は調査区北半部では黄褐色粘土（層厚約10cm）で、南半部では灰色砂質土及び暗茶褐色粘質土となり、層厚も20cmとなる。

調査区北半部ではこのⅢ層下層において地山層（VI層）である白灰色及び黄色の均質な粘土層を確認するが、調査区南半部ではⅢ層下層において平安時代の遺物を含む黄灰色粘土及び灰色粘土層を主とするⅣ層が認められ、さらに南半部において、地山層である黄色粘土層（VI層）



### 第39図 B区下層調査状況



第40図 吉志部瓦礫跡（工房跡）蝶群実測図

- 63 -

第41図 吉志部瓦礫跡（工房跡）構成礫類別図（石材・母岩・残存率） 第9表対応

が南東に向って緩やかに傾斜していく部分で、灰黄色粘質土を主とする堆積層であるV層が確認された。地山層であるVI層は調査区北側では標高18.30mを前後し、北端から11mの地点で20cm程度下がる段をなし、調査区南端では標高17.70mである。調査区北半ではこのVI層上面が、南半ではV層上面が吉志部瓦窯操業期の造構面となる。

## II. 磁群・石器

### (1) 磁群

B区では地山層であるVI層は調査区北端から2/3程の地点から南に向かって緩やかな傾斜面をなし、調査区南端で0.2m程度下がる。

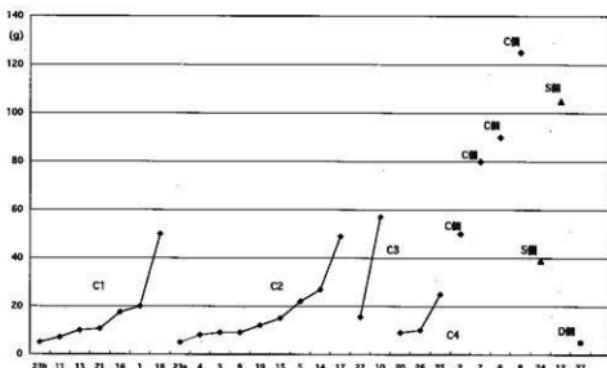
このVI層上に灰黄色粘質土を主とするV層の堆積が認められ、このV層において、調査区の東端から約17m、北端から11.4~14.2mの地点の標高17.79m~17.83mで南北2.6m×東西0.5mの範囲に磁の分布を確認した。構成磁は28個、総重量886.5gで、磁の8割以上が破碎磁である。石材はチャートが25点、砂岩が2点、泥岩が1点でチャートが主である。重量は最大で125g、平均は31.7gである。構成磁の破碎度をみると完形が4点(A 14.3%)、残存1/2が2点(B 7.1%)、残存1/4が5点(C 17.9%)、残存1/6以下が17点(D 60.7%)であり、残存1/6以下のものが半数以上を占めている。重量をみると完形の個体については80~125gで平均は100gであり、破碎磁については最も大きいもので50gを前後し、平均は20.3gであるが、20g以下のものが7割近くを占めており、破碎の進んだ状況が認められる。受熱の状況についてはチャート1点を除いて他は全て受熱している。

なお、調査途中に降雨のために調査地点が冠水して流れてしまったために、磁群下部や周辺部における炭化物の有無等については確認できなかった。

以上のように検出した磁群は比較的狭い範囲に展開し、構成磁は破碎磁の割合が完形のものより高く、さらに破碎磁については残存率の低い破碎の進んだ状況を示している。また、ほとんどの磁が受熱している状況から、磁石の破碎度の高さは受熱に伴って破碎が進行したことが考えられ、磁群の機能としては磁石を焼いて一定の作業が行われたものと考えられる。

第9表 吉志部瓦窯跡(工房跡) 磁群構成磁

番号	石材	母岩	直径	重量(g)	受熱	備考
1	チャート	C1	D	20	受	
2	チャート	個体	C	50	非	
3	チャート	C2	D	9	受	
4	チャート	C2	D	8	受	
5	チャート	C2	D	22	受	
6	チャート	個体	A	90	受	
7	チャート	個体	A	80	受	
8	チャート	個体	A	125	受	
9	チャート	C2	D	9	受	
10	チャート	C3	B	57	受	
11	チャート	C1	D	7	受	
12	砂岩	個体	A	105	受	
13	チャート	C1	D	10	受	
14	チャート	C2	C	27	受	
15	チャート	C2	D	15	受	
16	チャート	C1	D	17.5	受	
17	チャート	C2	B	49	受	
18	チャート	C1	C	50	受	
19	チャート	C2	D	12	受	
20	チャート	C4	D	9	受	
21	チャート	C1	D	10.5	受	
22	チャート	C3	D	15.5	受	
23a	チャート	C2	D	5	受	
23b	チャート	C1	D	5	受	
24	砂岩	S	C	39	受	
25	チャート	C4	C	25	受	
26	チャート	C4	D	10	受	
27	泥岩	個体	D	5	受	



## 2. 石器の概要

今回の調査で確認された23点の石器の内訳は、器種認定の可能なものをあげると、ナイフ形石器3点、翼状剥片3点、削器2点、縦長剥片1点、横長剥片石核2点、楔形石器1点、石鏃3点で、これらは実測図を掲げた。また、剥片類の内、2点の実測図を掲げる。非実測のその他の資料は6点となる。

ここでは、これらの石器の内の主要な資料を記述する。1~8はB区、9~14はC区、15~16はD区、17はF区の出土である(第10表)。

### B区出土石器(第44・45図)

1は、小型の横長剥片を素材としたナイフ形石器である。素材剥片は、推定4cm程の小型横長剥片を素材としている。ポジティブな底面が表面左上部に残存しており、先行したネガティブな剥離面と大剥離面の打点が同一打面を直線的に後退していることから、翼状剥片を素材としていると考えられる。表面先端に認められる打面からの剥離面は、打面縁または剥離作業面の調整痕であろう。刃角は緩やかで、30度未満であり、小型翼状剥片の剥離技術が、典型的な瀬戸内技法と異なる可能性を示唆している。素材剥片の打点部と打面は、表面から裏面方向への右側縁全体の背済し加工によって除去されている。左側縁の下半の刃部は、裏面からの刃済し加工が施され、二側縁加工のナイフ形石器となっている。

2は、盤状剥片の打面部から最初に剥離された翼状剥片である。いわゆる「ファーストフレイク」と呼称されるように、盤状剥片の打面部を作業面として設定したため、表面に残るポジティブな底面と背面の稜線上に打点のある打瘤痕が認められる。背面は、ネガティブとなって

第10表 吉志部瓦窯跡(工房跡)出土石器計測表

NO.	出土地点	遺構	層序	分類	石材	長(cm)	幅	厚さ	鉛(g)	備考
1	B区d-15		II層	ナイフ形石器	サヌカイト	3.15	1.20	0.35	1.61	
2	B区d-14		III層	翼状剥片	サヌカイト	5.20	2.40	0.35	5.46	
3	B区d-14		IV層	削器	サヌカイト	4.70	3.30	1.00	12.98	
4	B区d-14		IV層	削器	サヌカイト	2.55	4.65	0.90	9.43	
5	B区d-14		III層	剥片	サヌカイト	4.40	2.65	0.70	9.44	
6	B区d-14		III層	横長剥片石核	サヌカイト	4.35	3.15	1.30	18.34	
7	B区d-14		II層	剥片	サヌカイト	4.20	2.60	0.80	8.93	繩文
8	B区d-14		II層	縦長剥片	サヌカイト	5.70	1.65	0.50	4.18	
9	C区e-16	SD001	下層	圓形型ナイフ形石器	サヌカイト	7.35	1.80	1.00	11.74	
10	C区f-11	SD108	灰色砂質土	ナイフ形石器	サヌカイト	6.35	2.30	0.75	11.04	風化強
11	C区c-12	SK204	灰色砂質土	楔形石器	サヌカイト	3.40	2.60	0.90	8.30	繩文
12	C区d-11	SK302	淡灰色砂質土	石鏃	サヌカイト	2.20	1.60	0.30	0.87	繩文
13	C区e-12	SB210-P6	灰色砂質土	石鏃	サヌカイト	2.10	1.05	0.25	0.56	繩文
14	C区e-12	ピット	灰色砂質土	石鏃	サヌカイト	2.10	1.50	0.30	0.70	繩文
15	D区e-7	SD113	灰色砂質土	翼状剥片	サヌカイト	9.25	5.30	1.35	66.52	
16	D区f-8		II層	横長剥片石核	サヌカイト	5.40	2.35	1.15	13.72	
17	F区h-2		III層	翼状剥片	サヌカイト	4.40	3.65	1.15	28.75	

いる。この翼状剥片の剥離に先立ち、盤状剥片を素材とした翼状剥片は、打面部を丁寧に山形に調整しており、この翼状剥片の剥離は、稜をなす山形の頂点への加撃で行われている。器厚は薄く、刃角は10度程度である。

3は、盤状剥片または横長剥片石核の半裁を利用した削器である。この裏面には、ポジティブな大剥離面と、その打面部を除去したネガティブな剥離面が認められ、ここを剥離作業面とするもので、右半分を折断している。削器の調整は、剥片剥離の終了した後、石核作業縁の打面部縁辺に細かな作業面を形成するもので、明らかに目的剥片剥離以後に調整されている。素材となった石核は、薄い盤状剥片の打面部に作業面を設置する物で、底面がポジティブになっているなど、翼状剥片石核としての要件を揃えるが、削器としての調整と過半の欠損によって、本来の打面調整の有無、部位が明らかではない。

4は、大型の剥片の左側縁に作業部を配した削器である。表面と裏面の縁辺に加工を施すが、一部に潰れが認められ、楔形石器の側縁加工と一部共通する加工である。素材剥片の上半が折断されているが、側縁からの加撃であれば、楔としての折断破損の可能性もある。

5は、打面が平坦面と側面の自然面の稜線上に配された石核から剥離された剥片である。石核の底面は、大きな剥離面の一部からなっており、石核素材の盤状剥片は大きい。先行する剥片剥離は、いずれも平坦な打面から行われているが、作業面の幅よりも狭い幅が複数重なっている状態が観察され、剥離作業が作業部上を移動したことが知られる。この剥片は、目的的な剥片剥離の所産であろうが、この打点が石核側面の稜線上にあるのも、移動の結果生じた作業面の補正の意味を含んだ剥離であったことを示している。

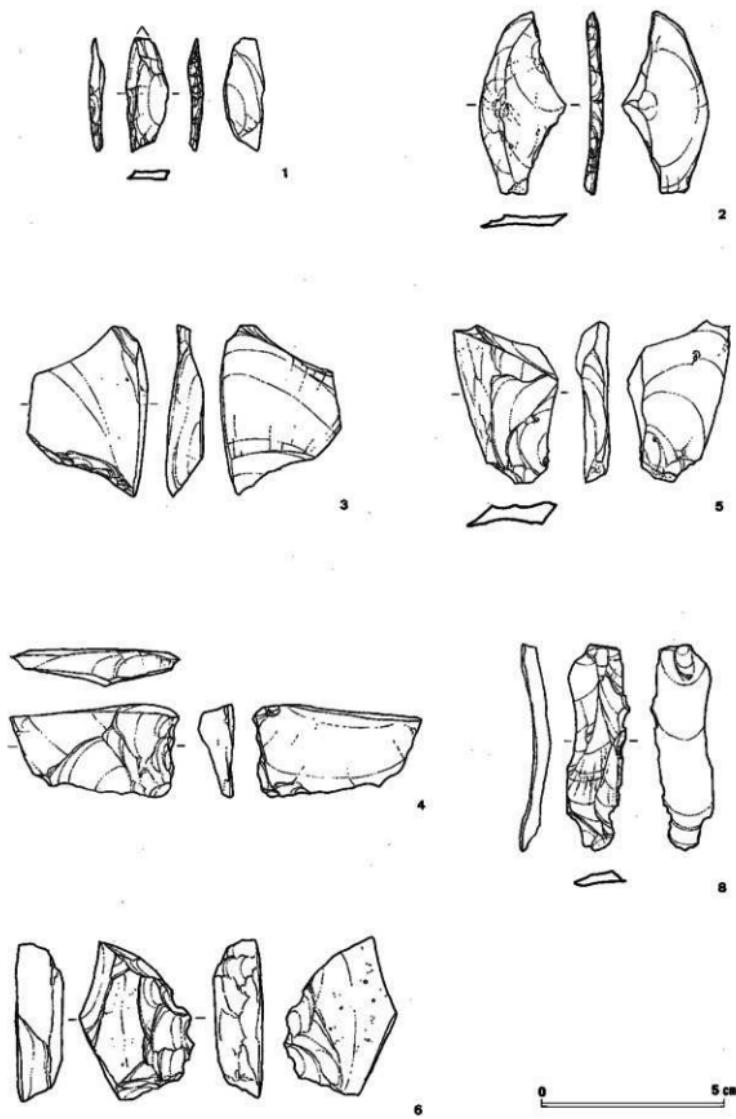
6は、横長剥片石核である。素材は盤状剥片であり、主剥離作業部が盤状剥片の打面部に設定されている。石核の背部、左右は、盤状剥片の縁辺を折断したものである。剥片剥離作業は、盤状剥片の打面部側の切断面が形成した角を潰すように進行し、表裏に作業面を転移させていく。長幅の近似した不規則な剥片が生産されるようである。

7は、表面に大きく自然面を残す剥片である。表面の右上半部の剥離面はポジティブで、円礫の分割面である可能性が高い。打点は、点打面である。打面縁に調整が施され、自然面とポジティブ面の稜線の上部を除去している。裏面は、大剥離面であるが、大きな打瘤裂痕がある。風化の進行がやや浅く、縄文時代の所産であろう。

8は、縦長剥片である。打面は平坦で、同打面からの縦長剥片は少なくとも4枚は連続して行われている。顕著な打面調整は見られない。裏面には、打点部から顕著な打瘤裂痕がみられ、ハードハンマーによる加撃であろうことが知られる。

#### C区出土石器（第45図）

9は、国府型ナイフ形石器である。ほぼ柳葉形を呈する整ったナイフ形石器で、表面の翼状剥片底面と裏面の大剥離面で長辺をなし、背潰しされた背部が短辺の、断面はほぼ三角形を呈する。器厚がほぼ1cmに達する肉厚のナイフ形石器である。刃角は、ほぼ40度を測る。表面の



第44図 吉志部瓦窯跡（工房跡）出土石器実測図1

ほとんどを占める底面はポジティブで、先行する翼状剥片の剥離痕がかすかに背部との間の上半部に帯状に残る。下半部は、石核の作業面か打面縁の調整痕が認められる。裏面の大剥離面の剥離の加撃点と盤状剥片の剥離加撃点が、剥片主軸方向に一致しており、翼状剥片の剥離が直線的に交代していることが窺えるが、素材剥片の右翼半がよく伸延している。ナイフ形石器背部の整形は、上半に対向剥離が認められるが、基本的には裏面から行われる丁寧な背付け加工によっている。左の刃部側縁には特に加工や刃こぼれ状の小剥離は認められない。

10は、翼状剥片の可能性の高い横長剥片を素材としたナイフ形石器である。かなり風化が進行しており、剥離の観察には困難がある。平面形は木の葉状で、右側縁が刃部、左側縁が背部となっている。表面の先端と右下半部にポジティブな底面が付着しており、盤状剥片素材の石核からの所産であることが知れる。表面には、中央部に2枚の連続したネガティブな剥離痕が認められ、剥離が作業面一杯に展開しなかったこと、2枚目が途中で伸延しなかったことが観察される。この剥片の剥離以前に行われた作業は、打面縁や剥離作業面の調整とは異なり、加撃点のコントロールの失敗により剥片の厚さが不足するなどした、有効な目的剥片生産ではなかったと推定できる。この結果、表面には典型的な翼状剥片の形状が失われている。翼状剥片の打面は、左側縁上半に大きな剥離痕で残存している。背部の加工は、左側縁の下半部に施されている。刃部は、上半から下半半ばにかけて、先端からの衝撃によって桶状剥離を少なくとも2回生じている。

11は、楔形石器である。左側縁には裏面から、右側縁には表面から、上端には裏面から縁辺加工が施され、縁辺の一部には潰れが観察される。縄文時代の所産であろうか。

12は、凹基式の整った形状の石鎌である。左右の側縁に角がある。13は、平基式の小型幅狭の石鎌である。14は、平基式石鎌である。石鎌3点は縄文時代の所産であろう。

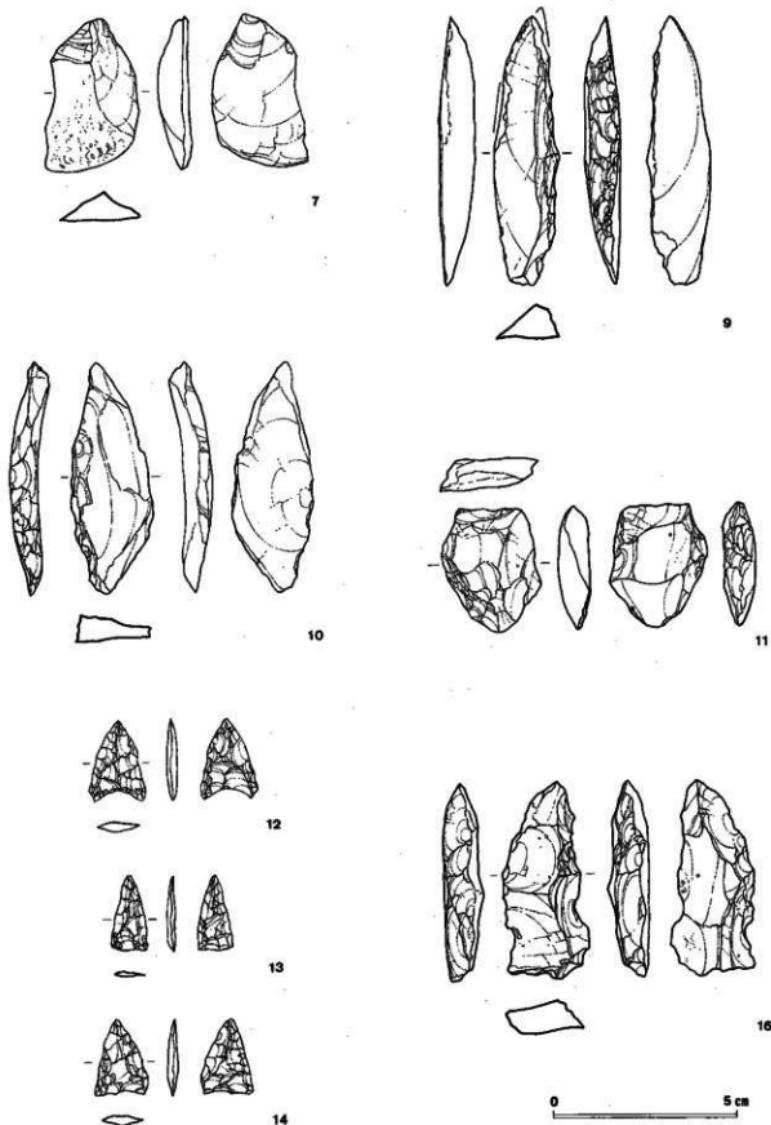
#### D区出土石器（第45・46図）

15は、大型の翼状剥片である。自然面と剥離面からなる山形の稜線を加撃して剥離されている。表面に付着する底面はネガティブで、剥片の左側縁に打点が観察されることから、盤状剥片石核またはその一部が翼状剥片石核の素材となっているようだ。石核の側面が剥離作業面になった翼状剥片石核から剥離されたものと考えられる。

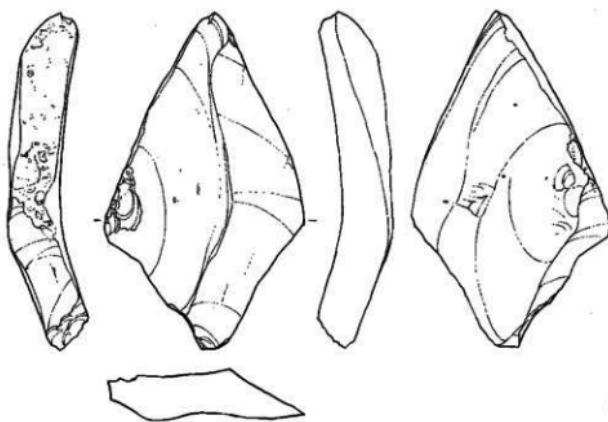
16は、横長剥片石核である。かなり損耗しており、残核とも呼びうる状態であろう。最終的には左側縁には表から裏に向かって、右側縁では裏から表に向かって剥片剥離が行われているが、いずれも小さく不定型な貝殻状剥片が生産されるに留まる。両側縁とも剥片と石核作業面の幅が対応せず、左右に激しく移動している。この両側縁に先立つ、やや整った剥離痕が表面・裏面の中央にのびる形に観察されるが、横長剥片を生産したものであろう。

#### F区出土石器（第46図）

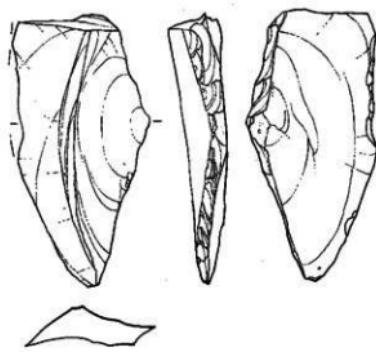
17は、大型の翼状剥片である。表面には大きくポジティブな底面を残す。先行するネガティ



第45図 吉志部瓦窯跡（工房跡）出土石器実測図2



15



17

0 5 cm

第46図 吉志部瓦窯跡（工房跡）出土石器実測図3

ブな剥片剥離は、連続して2回行われているが、いずれもオーバーハング気味の伸びきらない横長剥片剥離となり、2回目は底面にまで達していない。打面の調整は、山形に丁寧に行われており、剥離は山形の頂点に残された平坦面に加撃されて行われている。裏面の剥離は、大きな「し」の字状の剥離の伸びを見せており。大型剥片でありながら、器厚が薄く、刃角は約15度程度となっており、大きく付着するポジティブな底面とオーバーハングするネガティブ面の存在と、大剥離面の「し」の字状ねじれにより、ナイフ形石器の生産に供するには加工度を高める必要が生じるであろう形状の翼状剥片となっている。翼状剥片の左翼端は、早く折損している。

### III. 小結

吉志部瓦窯跡（工房跡）調査の石器群には、旧石器時代と縄文時代の石器が混在している。石鏃や楔形石器、一部の剥片などは明らかに縄文の所産である。その他は、旧石器時代の可能性が高いが、技術形態学的特徴のみでは判別できない資料も伴っている。

旧石器として間違いがないのは、国府型ナイフ形石器など3点のナイフ形石器、翼状剥片や横長剥片石核である。旧石器には、国府型ナイフ形石器と翼状剥片があることから、いわゆる瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器盛行期の石器群があることが知れる。吉志部瓦窯跡（工房跡）の調査では本来の石器組成を回復しているとは認められないが、国府型ナイフ形石器、翼状剥片が出土している点は、注意される。ただ、一部に小型の翼状剥片がある点、その他の横長剥片石核が小型化の進行した形状をしている点などで、全石器を一括して一つの石器群を認定してよいかは躊躇がある。

石核を分割した削器や、矮小化して残核となった横長剥片石核などは、サヌカイト原石産地から離れた千里丘陵南端での石材供給環境と、そこでの石器生産戦略、適応が窺える資料である。瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器盛行期の石器群の様相と、時期差を持つ石器群の混在の可能性と合わせて検討すべきであろう。

注)

1) 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会『吉志部瓦窯跡（工房跡）』、1998年。

## 第4章 吹田出土旧石器関連資料

### (1) 高城遺跡（第47図1）

高城遺跡は、高城町・昭和町一帯に広がる遺跡である。これまでの調査では主に古墳時代、平安時代・中世を中心とした遺構・遺物が検出されている。ここでは、平成5年の第1次発掘調査（高城町1395-1）において地山層から遊離した状況であるが、ナイフ形石器1点が検出されている。

ナイフ形石器はサヌカイト製で小型の横長剥片を素材とする。石核底面はつけず、裏面からの剥離調整によって背つけ加工が行われている。先端部は折れてしまっている。

### (2) 目俟遺跡（第47図2～7）

目俟遺跡は、目俟町に所在する弥生・古墳時代、中世を中心とする遺跡である。平成6・7年の発掘調査（目俟町1593-13他）において多くのサヌカイト片を検出した。このうち既刊の報告書では旧石器として4点を報告したが、今回本書をまとめるにあたり、改めて資料を見直すと、新たに2点の旧石器が確認された。ここでは既報告分も含めてこれら資料を紹介する。

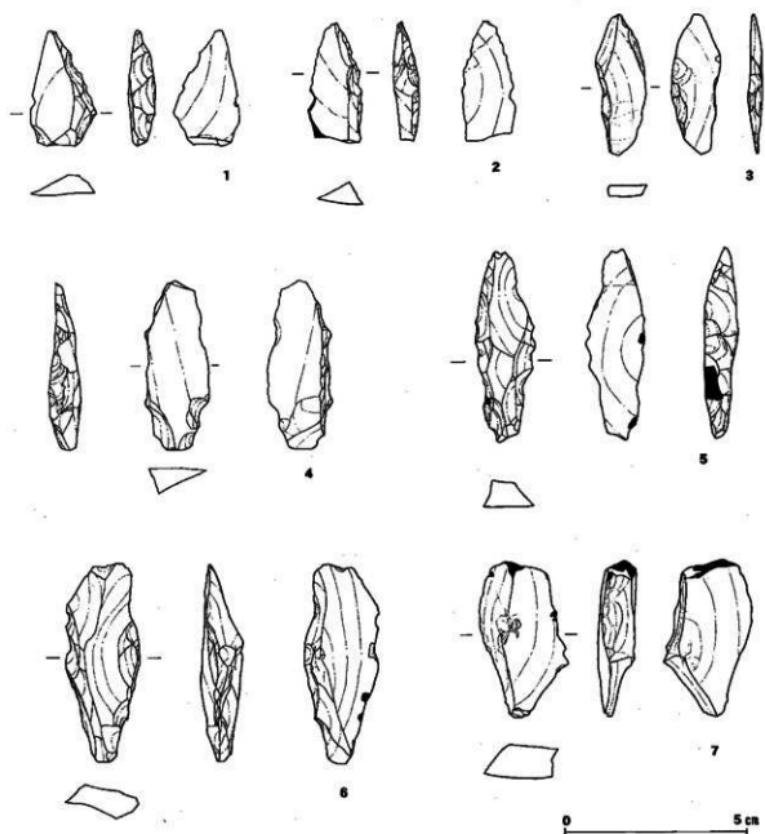
2・3・4はナイフ形石器である。2は横長の剥片を素材とし、右側縁に裏面からの調整剥離によって背つけがなされている。石核底面はつけない。3については他のものより素材が薄く、先に右側縁上部を折断した後、その下半を表面から打点・打面を除去するように剥離調整が行われ、左側縁については裏面からその下半に調整が施されている。この資料については、その調整剥離が緩やかな角度でやや深く入り込んでおり、また折断するという行為がなされている点で、台形様石器の調整技術と共通する面があり、目俟遺跡出土の他の旧石器とはやや様相を違えている感がある。4は素材剥片を横長に使おうとする意図が窺えるものである。表面は底面と一致し、左側縁を裏面から広く背つけ加工を施した結果、断面形が三角形となる。また、基部にも調整が施されている。

5は角錐状石器である。横長の剥片を素材とし、両側縁とも裏面から調整剥離が施されているが、右側縁上部にやや大きめの剥離がみられる。

6・7は翼状剥片であるが、6については右側縁が山形に打面調整されているものの、左側縁底部にはネガティブな剥離面がつき、厳密には翼状剥片といえないかもしれない。また、左側縁中ほどに裏面からの剥離が認められ、これを背つけを意図したものだとすると、ナイフ形石器としても分類できる資料である。7はファーストフレークである。上端部は欠損しているが、残存部分からもとともに寸詰まりの形状をなしていたようである。

### (3) 垂水遺跡（第48図8～10）

垂水遺跡は、円山町・垂水町1・2丁目に広がる弥生・古墳時代、中世を中心とする遺跡である。昭和30年以来の若村正博氏による遺物収集と本市及び関西大学考古学研究室による発掘



第47図 吹田出土石器実測図 1

第11表 吹田出土石器計測表

単位: cm、g

番号	器種	石 材	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	遺 跡	信 考
1	ナイフ形石器	サヌカイト	3.15	1.80	0.60	2.81		
2	ナイフ形石器	サヌカイト	3.30	1.40k	0.60	2.51	高城 城 日 日	
3	ナイフ形石器	サヌカイト	3.80	1.30	0.35	2.01	日 日 日	
4	ナイフ形石器	サヌカイト	4.60	1.70	0.90	5.64	日 日 日	
5	角錐状石器	サヌカイト	5.20k	1.60	0.90	6.86	日 日 日 日	
6	翼状剥片	サヌカイト	5.45	2.00	0.80	9.25	依 水 水 水	
7	翼状剥片	サヌカイト	4.20	2.35	0.90	9.72	依 水 水 水	
8	ナイフ形石器	サヌカイト	2.90	1.45	0.35	1.80	垂 垂 垂 垂	
9	彫器	サヌカイト	4.60	2.70	0.70	6.50		
10	石核	サヌカイト	5.00	3.00	1.20	13.83		
11	有舌尖頭器	チヤート	5.50k	1.90	0.60	7.61	中/坪	
12	尖頭器	サヌカイト	6.00	3.50	0.90	16.38	七尾瓦窯	
13	木葉形尖頭器	サヌカイト	5.95k	2.30	0.75	10.71	片山公園	未成品

調査によって旧石器類（サヌカイト製）が確認されている。旧石器類は標高20～50mの丘陵部で認められているが、それらは『吹田市史第8巻』において報告された。石器としてはナイフ形石器と彫器の2点が確認されており、この他、石核や剥片などが認められている。

このうち10は石核として市史で報告されたものであるが、左側縁部に原縁面を残しつつ、右側縁部が大きく2回の剥離によって打面調整され、裏面に主要剥離痕が1枚認められるものである。そして、剥離の打撃力が途中で分散したらしく、力がその先端まで伝わらず、剥離痕の先端部が鋭いエッジにはなっていない。しかし、打面が山形を呈するように調整されていることから、翼状剥片石核としても分類し得る資料である。

#### (4) 中ノ坪遺跡（第48図11）

中ノ坪遺跡は、岸部南2・3丁目一帯に広がる遺跡である。これまでの調査では、主に弥生・古墳時代、中世の構造・遺物が検出されている。ここでは平成9年の第1次調査（岸部南3-757-1他）において、これも地山層から遊離した状況であるが、有舌尖頭器が1点検出されている。

尖頭器はチャート製で、先端は折れてしまっているが、もとは細身で器体の長いものであったと思われる。調整剥離は、表裏面とも両側縁からやや斜めに長く中心方向にのびるように、規則性をもって施されている。逆刺部の角度は緩やかである。

#### (5) 七尾瓦窯跡（第48図12）

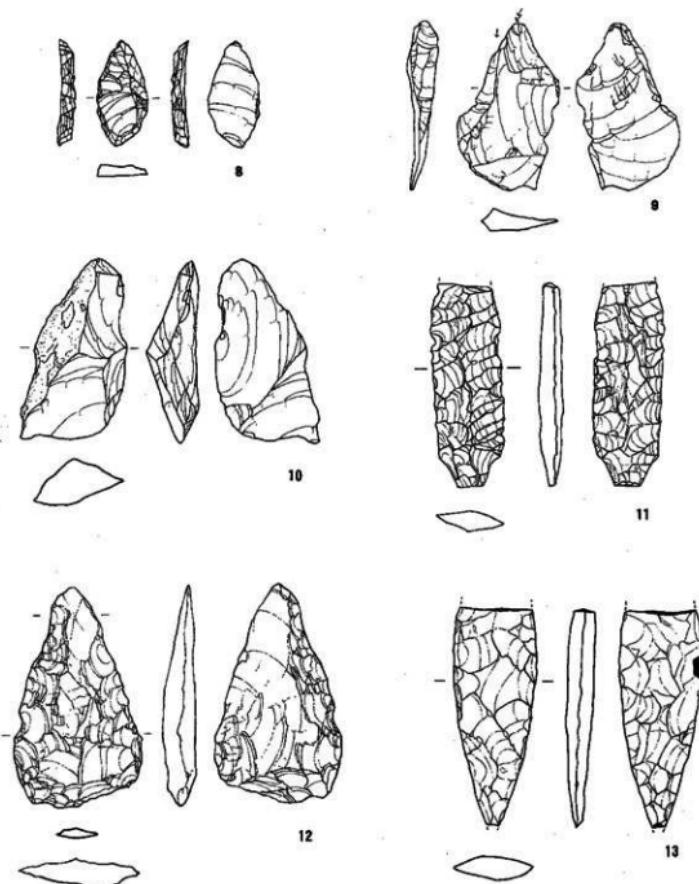
七尾瓦窯跡は後期難波宮で使用された瓦を製作した窯跡で、岸部北5丁目に所在する。これまでの発掘調査では窯跡およびその工房跡が確認されている。ここで紹介する尖頭器は平成5年に実施した工房跡の調査（岸部北5丁目26・28）において検出されたものである。

尖頭器はサヌカイト製で、身部には特に斜行剥離や鋸歯縁などの特徴は認められない。基部には一部に欠損があるが、特別な整形が施されていない素材剥片は、表面先端に大きな素材剥離面を残すこと、裏面全体にポジティブな大剥離面を残し、打瘤部が完全には除去されていないのが認められることから、未成品と考えた方がよい。明瞭な押圧剥離痕の連続は認められず、風化の進んで白く荒れた器面をもち、剥離面の観察がやや困難であるが、その器形から縄文時代草創期の所産とみなせる。

#### (6) 片山公園遺跡（第48図13）

片山公園遺跡は出口町所在の片山公園一帯に広がる遺跡である。これまで古墳時代の須恵器や埴輪片などが検出されている。ここで紹介する尖頭器片は、平成12年に若村正博氏が表面採集したものである。

尖頭器はサヌカイト製で、木葉形のものの下半部分にあたる。全体的にローリングを受けており、剥離痕は若干不鮮明となっているが、その調整はやや大きめの剥離をもってなされている。なお、基部端部についても欠損している。



注)垂水遺跡の石器については市史より転載した。

0 5 cm

第48図 吹田出土石器実測図2

## 第5章 総 括

前章までにまとめたように、近年になって吹田市においては旧石器から縄文時代草創期にかけての資料の増加をみてきた。従来より知られていた吉志部遺跡・垂水遺跡以外の遺跡においても新たな資料が認められるようになり、特に千里丘陵下の平野部から確認されるようになったことは、今後さらに資料の増加を期待させるものである。

さて、今回報告した資料に関してみると、その点数はまだ決して十分なものとはいえない。それゆえ、これをもって吹田地域の旧石器・縄文時代草創期のすべてを語るというわけにはいかないが、ある程度のイメージをもつことはできる。

まず、吉志部遺跡を中心とした丘陵地域に目をむけると、今回の調査で吉志部遺跡において瀬戸内技法の存在を認めることができた。また、吉志部遺跡から北東へ約400mの地点にある吉志部瓦窯跡においても瀬戸内技法による石器類が検出された。さらに、垂水遺跡でも既出資料の中に翼状剥片石核の可能性をもつ石核のあることが確認された。このことから、これら3遺跡は瀬戸内技法に関連する（可能性をもつ）資料を有する遺跡であることが明らかとなった。特に吉志部瓦窯跡においては瀬戸内技法盛行期に属するものとみられる石器類が検出された。しかし、これら資料は原位置をとどめた状態での検出ではなく、また一部で小型化の傾向も認められることから、これらの中には時期差のあるものが混在している可能性もあり、その時期や石器組成などの問題についてはさらなる検討が必要となる。

また、吉志部遺跡に関しては、瀬戸内技法によらない中小型ナイフ形石器が主体を占めていることは先述したとおりである。果たして瀬戸内技法関連資料と中小型ナイフ形石器とが同時期に存在したのかという問題もあるが、これまでの編年観からすると、吉志部遺跡は瀬戸内技法衰退段階にあるものといえる。そして、垂水遺跡についても、その資料点数は少ないが、小型ナイフ形石器の存在から瀬戸内技法衰退以降のものと推測される。このように、吉志部遺跡と垂水遺跡については瀬戸内技法関連資料が認められるものの、遺跡全体の編年的位置づけとしては瀬戸内技法盛行期より以降にあるものとみられる。そして、このような状況は平野部の遺跡においても認められる。

目俟遺跡においては翼状剥片の検出により、瀬戸内技法の存在が確認された。しかし、これを含めてその出土資料をみると、全体的にやや小型化の傾向にあり、これも従来の編年観からすると瀬戸内技法の衰退段階にあるものと考えられる。また、高城遺跡については瀬戸内技法によらない小型ナイフ形石器1点が確認されているのみで、その詳細は不明であるが、この資料をみると、これも瀬戸内技法衰退以降のものという可能性が高いといえる。

このようにみると、吉志部瓦窯跡において瀬戸内技法盛行期に属すると思われる資料がみられるものの、現時点では、吹田地域の旧石器時代の遺跡は瀬戸内技法の衰退段階に編年的位置づけをおくものが多い。しかし、これについては今後の調査によって新たな知見が得られる可能性が十分にあり、特に吉志部瓦窯跡においては、良好な状態での旧石器検出の可能性は高く、

今後さらなる資料の増加が期待される。

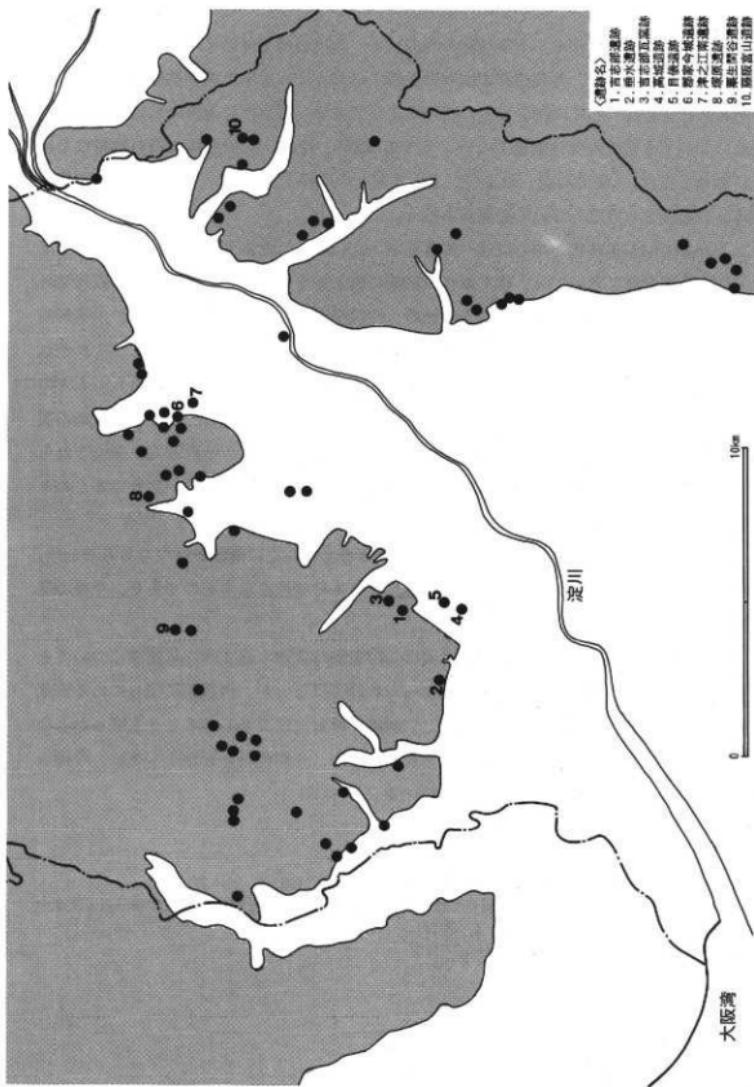
さて、次にこれらを立地的側面からみるとどうであろうか。繰り返し述べてきたように、最近の発掘調査によって、吹田市では千里丘陵から平野部にかけて旧石器時代の遺跡が認められるようになった。そして、千里丘陵上には吉志部遺跡をはじめとする3遺跡が展開し、これらはいずれも標高約20~50mの南面する千里丘陵上の、現在の大坂平野を望むような位置にあり、これまでの指摘にもあるように、いわゆる「淀川回廊」を見下ろす地点にある。

「淀川回廊」とは、瀬戸内から京都、北陸にかけての地域が古淀川流域を中心に交流をもっていたのではないかという考え方であるが、これら遺跡が営まれた時代は、気候が寒冷であり、海面が現在よりも低下しており、当時の遺跡の海拔高度は今日よりもかなり高い位置にあったと推定される。そしてその景観も現在とはかなり異なっていたと思われるが、この3遺跡の立地点からみると、これらが「淀川回廊」、さらにはサヌカイトの主要採取地である二上山へと指向する位置にあることがイメージされるのである<sup>1)</sup>。さらに、目俟遺跡や高城遺跡の立地点についても、旧石器時代においては海面の低下によって、平野部ではなく、丘陵部の一端に位置していたと考えられ、これもまさに「淀川回廊」を望む位置にあったといえるのである。そして、これらの遺跡が同時期に展開したのかどうかは明らかではないが、イメージとしては、丘陵部上方に吉志部遺跡・垂水遺跡・吉志部瓦窯跡が立地し、その下方に高城遺跡・目俟遺跡が位置していたことになる。

なお、瀬戸内技法盛行段階と中小型ナイフ形石器が主流を占める段階との時期が異なるとして、後者が前者よりも新段階のものとすると、両者間の段階における景観はそれぞれ異なった様相を示していたものと考えられる。つまり後者の時期では気候の温暖化が前者の段階より進み、海面が前者より上昇し、海岸線が幾分か遺跡側に近くなっていたであろう。そして、古淀川の流速や堆積状況等にも変化が生じていたものと考えられる。それゆえ、同じ旧石器時代の遺跡といっても、各遺跡によっては、それが展開した地域環境が異なっている場合のあることを考慮する必要がある。

このように吹田地域の状況からみると、「淀川回廊」を中心とする遺跡展開が読み取れるのであるが、ここで周辺地域にも視野を広げると、例えば、高槻市郡家今城遺跡や津之江南遺跡などは、「淀川回廊」に面する低位段丘上に立地する遺跡であり、この他にも同様の立地をみる遺跡は多い。しかし、旧石器を検出する遺跡は何も「淀川回廊」を指向する位置にあるものだけではない。茨木市や箕面市などでは、千里丘陵北側、北摂山地との接地点付近で旧石器が検出される遺跡が多く確認されており、特に、平成9・10年に大阪府文化財調査研究センターが実施した栗生間谷遺跡の発掘調査では、石器ブロック・砾群などの良好な資料が検出されている<sup>2)</sup>。こうした状況からすると、吹田の旧石器時代の遺跡を考える場合、そのすべてを「淀川回廊」との関係だけでとらえるのではなく、その北方に位置する遺跡との関係も考慮する必要があろう。

今回の吉志部遺跡の調査では、チャートが石器石材としてある割合をもって使用されていた。



第49図 吹田周辺地域（大阪府内）旧石器出土遺跡分布図

(注) ランダム分は山地、丘陵、島丘等を示す。  
(各市町村報告書及び注2) 文獻等を参考に作成。

このチャート石材の採取地がどこかという点は明らかではないが、一つの候補として丹波層群を源とする可能性が考えられる。千里丘陵の北方には、北摂山地を前面に丹波層群からなる山地が広がっている。そして、丹波層群の山々に近接する地点にある粟生間谷遺跡においてもチャートがある程度石材としての割合を占めているようである。粟生間谷遺跡におけるチャートの供給地についても現時点では明確でないようであるが<sup>3)</sup>、今後、吹田地域の旧石器時代を検討するにあたっては、「淀川回廊」および二上山方面との関係とともに、千里丘陵北方に位置する遺跡との関連をも考慮していく必要があろう。

さて、これまで旧石器時代を中心に述べてきたが、先に報告したように、中ノ坪遺跡・七尾瓦窯跡・片山公園遺跡においては、縄文時代草創期に属するものとみられる尖頭器が確認されている。中ノ坪遺跡ではチャート製の有舌尖頭器、片山公園遺跡ではサヌカイト製の木葉形尖頭器、七尾瓦窯跡では未成品ながらやや粗雑さがみられるサヌカイト製の尖頭器と、それぞれに素材や形態、製作技術などに違いがみられ、そこには時期差や異なる製作技術をもつ人々の存在が想定される。そして、こうした形態や製作技術等の差異に関しては、これまで11点の尖頭器が確認されている吉志部遺跡出土資料の中にもみられるのである。それゆえ、今後これらの資料を検討するに当たっては、これらを単に縄文時代草創期のものとして一括りでまとめるだけでなく、その製作技術や時期相などを考慮しながら進める必要があろう。

なお、最近になって縄文時代草創期のものと目される石器が新たに確認されつつあることは、今後吹田地域において当該時期の土器や遺構が検出される可能性を示すものであり、今後の発掘調査の成果に期待したい。

以上、近年の検出資料を中心に吹田地域における旧石器時代から縄文時代草創期についてを概観した。これによってその全容が明らかになったわけではないが、当該期に関してある程度のイメージをもつことは可能となった。しかし、同時に検討課題が多くあることも明らかとなった。本書では詳細な考察を行うまでには至らなかったが、今回の報告資料をもとに、今後さらに議論を進めていくことができればと考えている。

(注)

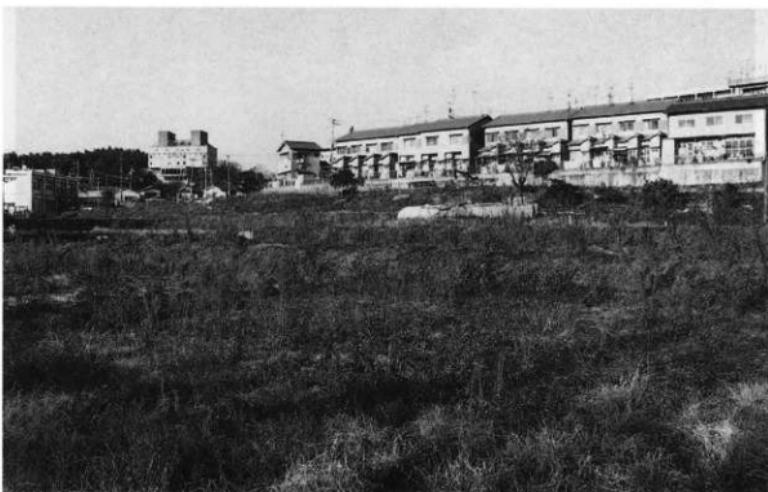
- 1) 吹田市教育委員会編『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、1981年、21-22頁。
- 2) 新海正博「箕面市粟生間谷遺跡第3次調査について」(近畿旧石器交流会編『第23回近畿旧石器交流会「櫛石鳥技法」の再検討』所収、1999年、4-20頁)。
- 3) 新海正博氏の御教示による。

# 報告書抄録

ふりがな	すいたのせっきじだい
書名	吹田の石器時代
副書名	旧石器時代～縄文時代草創期を中心に
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山口卓也 増田真木 賀納章雄 渡辺正巳 西田史朗
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL (06)6384-1231
発行年月日	西暦 2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉志部遺跡	吹田市岸部北 1-157-3 他	27205	45	34° 46°	135° 33° 31' 51"	(第4次) 19920630～ 19920717 19920819～ 19920826 (第5次) 19930111～ 19930313 (第7次) 19931117～ 19931208	(第4次) 177	変電所の建設
吉志部瓦窯跡 (工房跡)	吹田市岸部北 4-106 他	27205	38	34° 46° 50"	135° 32° 3"	19911224～ 19920325 19950424～ 19950903	293.4	道路敷設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉志部遺跡	集落遺跡	旧石器	礫群	ナイフ形石器、翼状剥片 搔器、削器、石核	AT火山灰の確認
		縄文 中世	なし 掘立柱建物跡、溝	石繖 瓦器、土師器、青磁	なし なし
吉志部瓦窯跡 (工房跡)	集落遺跡	旧石器 縄文	礫群 なし	ナイフ形石器、翼状剥片 石繖	瓦窯関係について は別書で報告



吉志部遺跡近景（平成 5 年当時、東から）



吉志部遺跡近景（平成 5 年当時、西から）

図版2  
吉志部遺跡2  
(第4次調査)

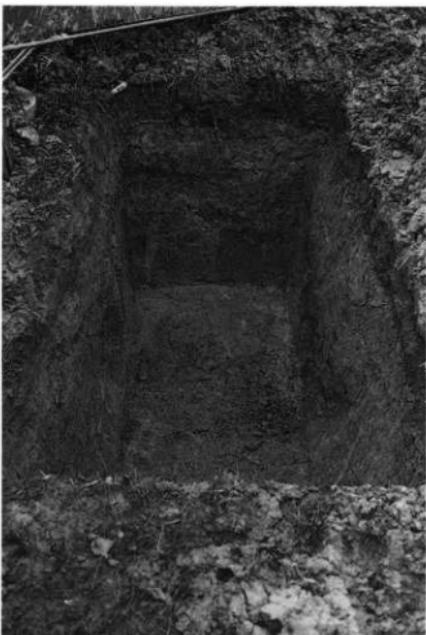


T 1 (西から)



T 1 南壁 (北から)

図版3 吉志部遺跡3（第5次調査）



TA (北から)

図版  
4

吉志部遺跡4  
(第5次調査)



T B (東から)

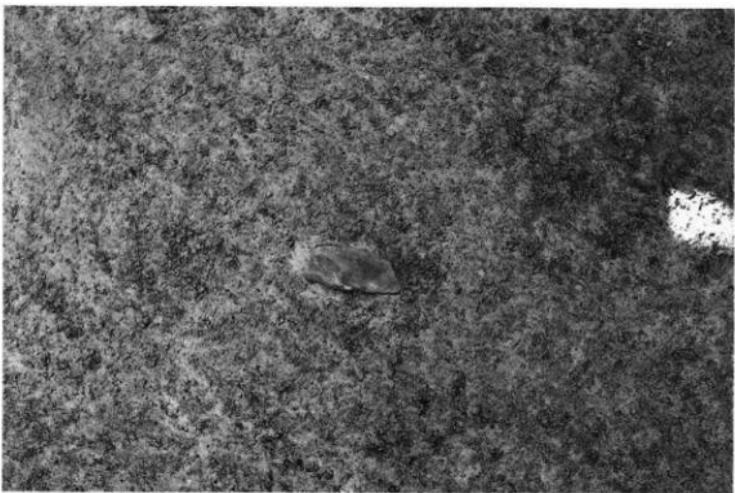


T B (東から)

図版 5 吉志部遺跡 5 (第5次調査)



T B (南から、矢印は台石)



T B 国府型ナイフ形石器検出状況

図版 6  
吉志部遺跡 6  
(第5次調査)



T.O中世遺構検出状況（南から）



T.O中世遺構検出状況（西から）

図版 7 吉志部遺跡 7 (第7次調査)

TZ櫛群検出状況(西から)



TZ櫛群検出状況(西から)



図版 8 吉志部遺跡 8 (第7次調査)



T2 kiln群検出状況(東から)



T2 kiln群検出状況(東から)

図版9 吉志部遺跡9（第7次調査）



T Z 磺群検出状況（南東から）



T Z 磺群検出状況（南から）

図版 10

吉志部遺跡 10  
(第7次調査)



T Z 翼状剥片検出状況（西から）



T Z 翼状剥片検出状況

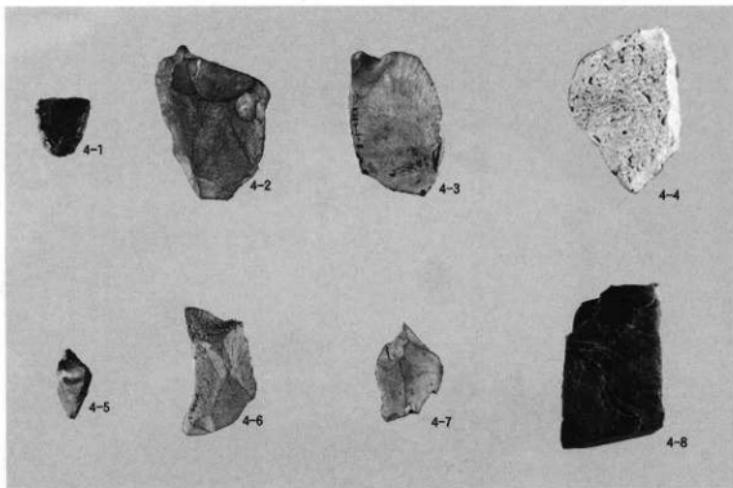


TZ 踏群検出状況（西から）

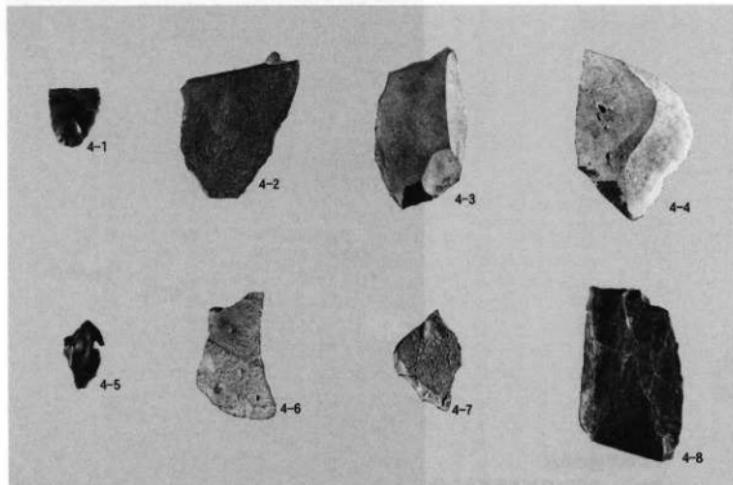


TZ 踏群検出状況  
(北から、矢印は有加工痕剥片7-8)

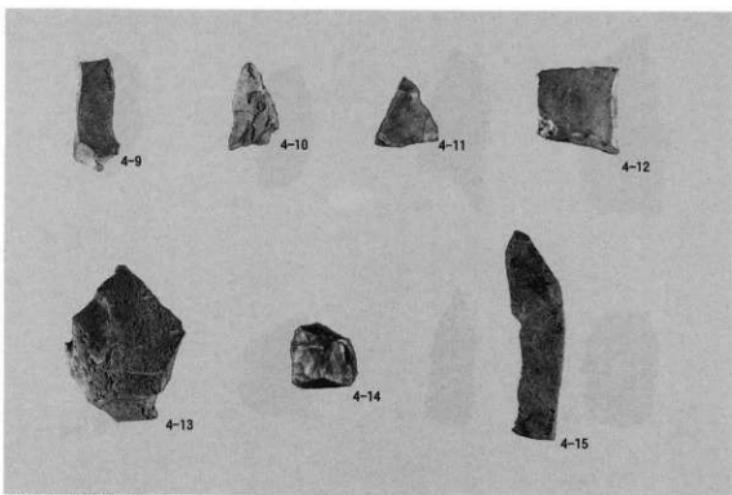
図版 12  
吉志部遺跡 12  
(石器)



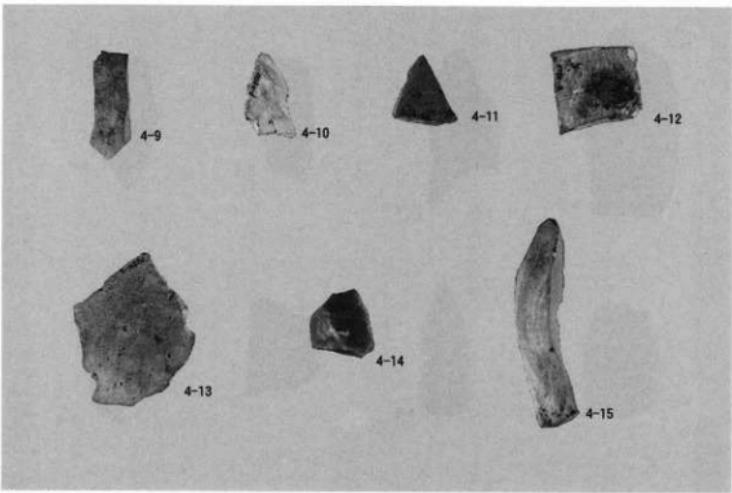
第4次調査出土石器 1



第4次調査出土石器 1



第4次調査出土石器 2

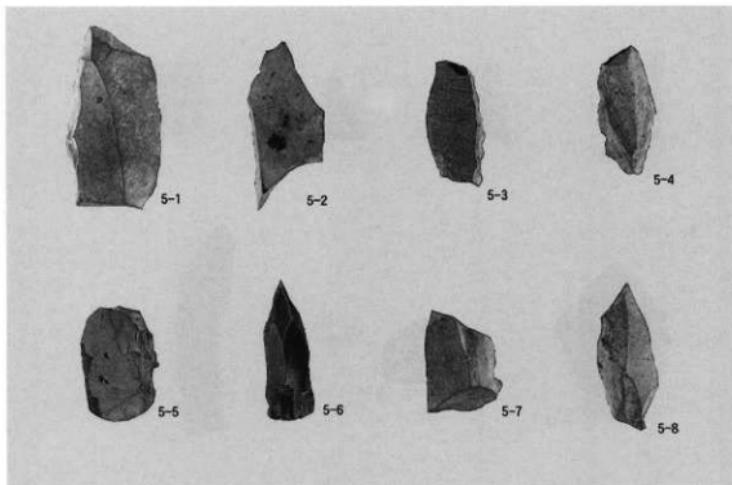


第4次調査出土石器 2

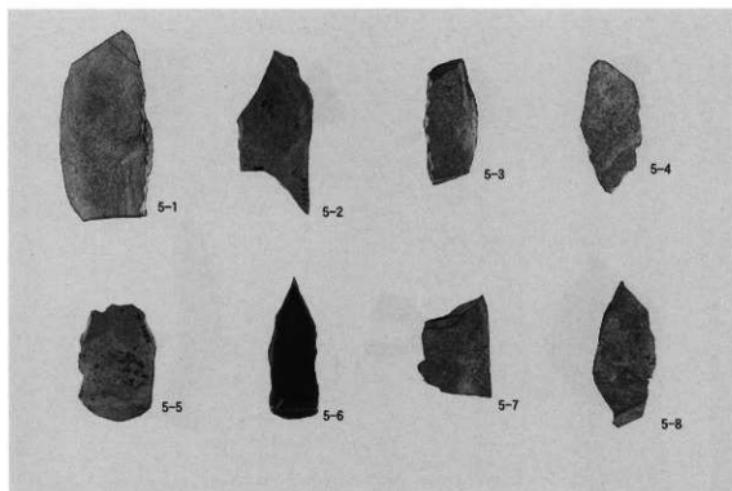
図版  
14

吉志部遺跡  
14

(石器)



第5次調査出土石器 1



第5次調査出土石器 1

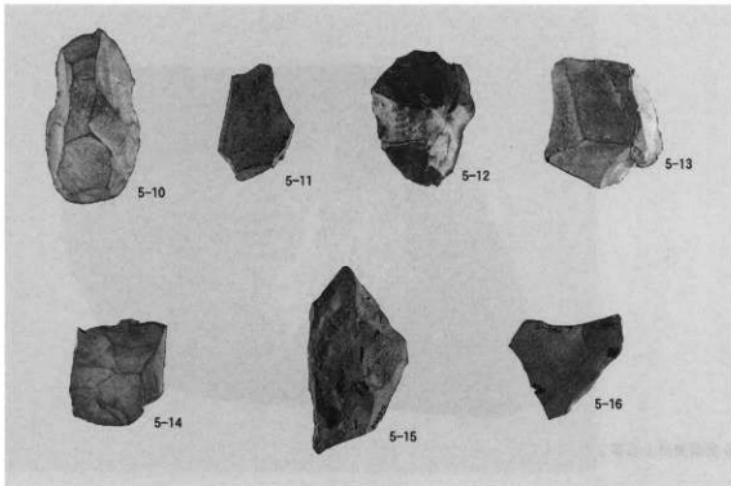
図版 15  
吉志部遺跡 15  
(石器)



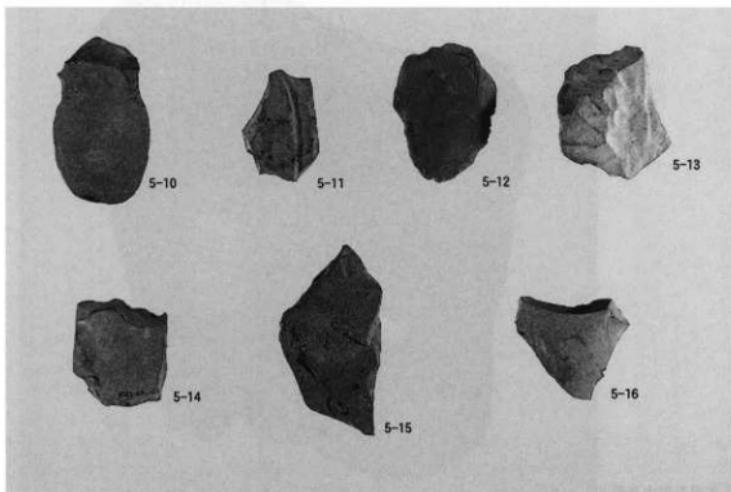
第5次調査出土石器 2



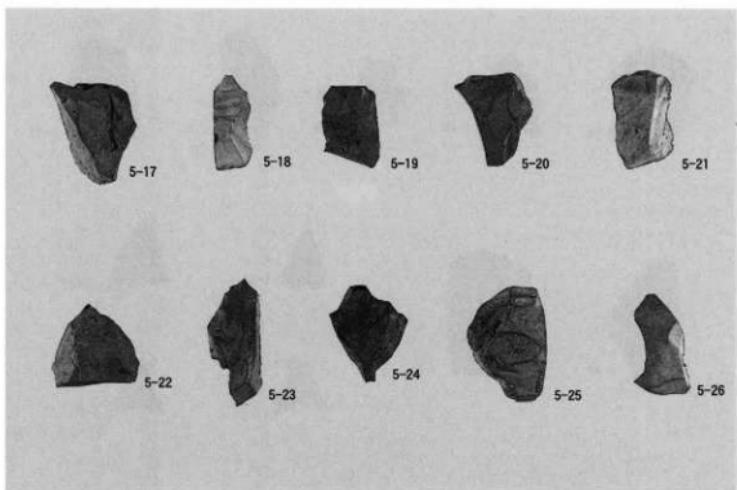
第5次調査出土石器 2



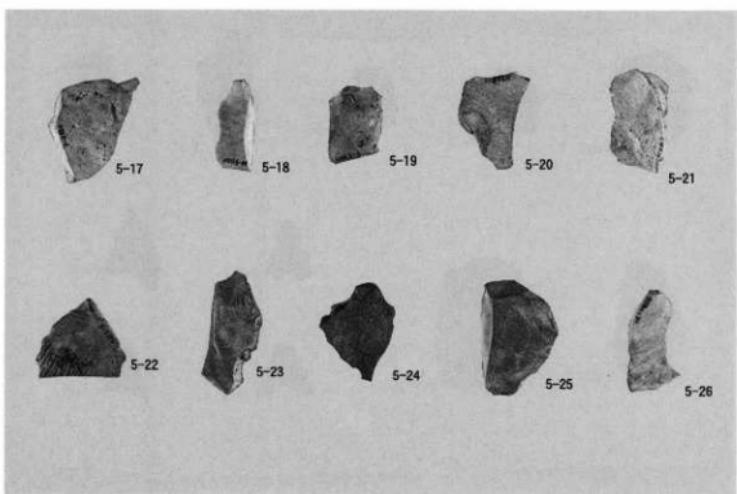
第5次調査出土石器 3



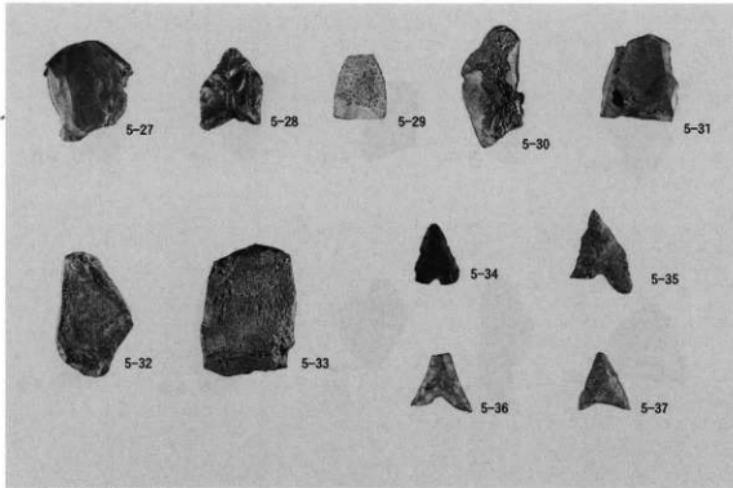
第5次調査出土石器 3



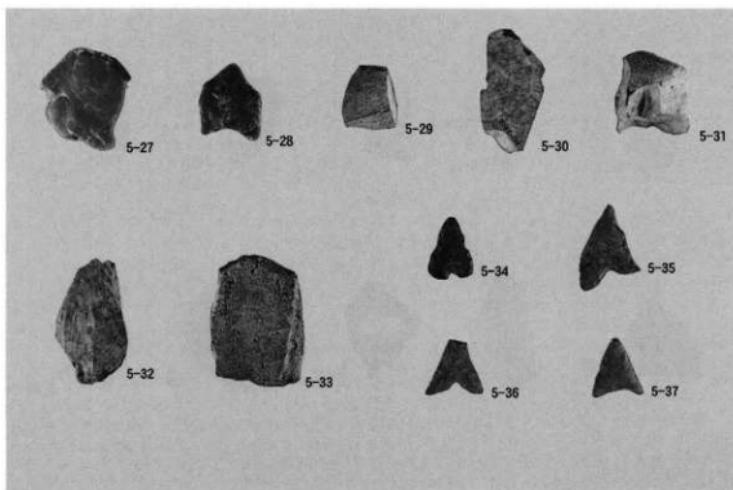
第5次調査出土石器 4



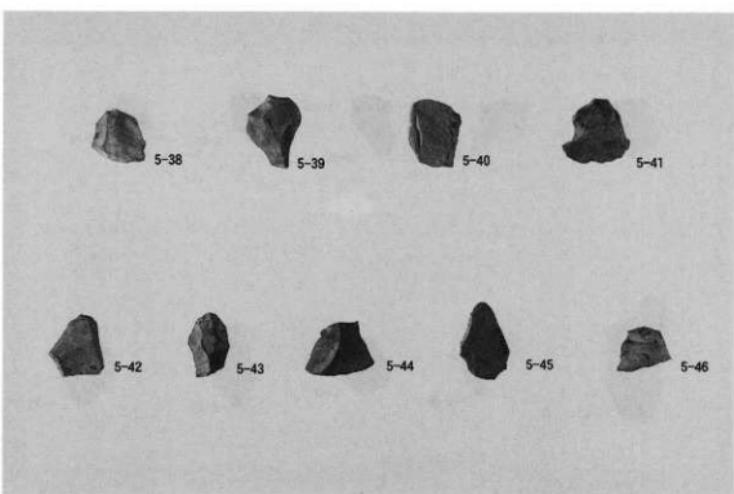
第5次調査出土石器 4



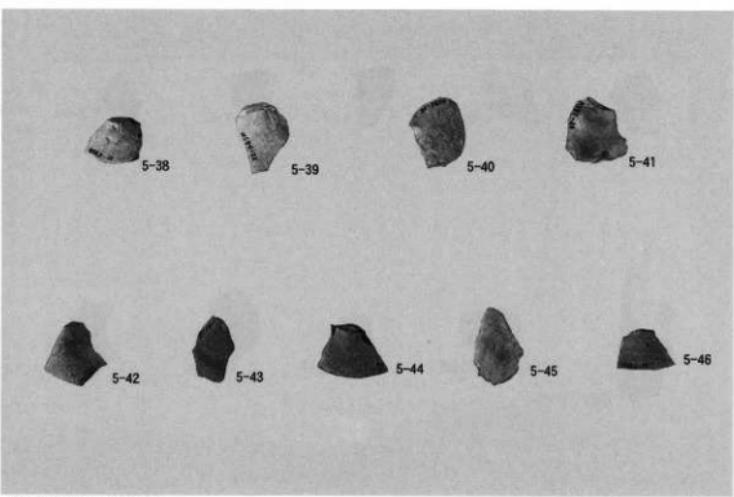
第5次調査出土石器 5



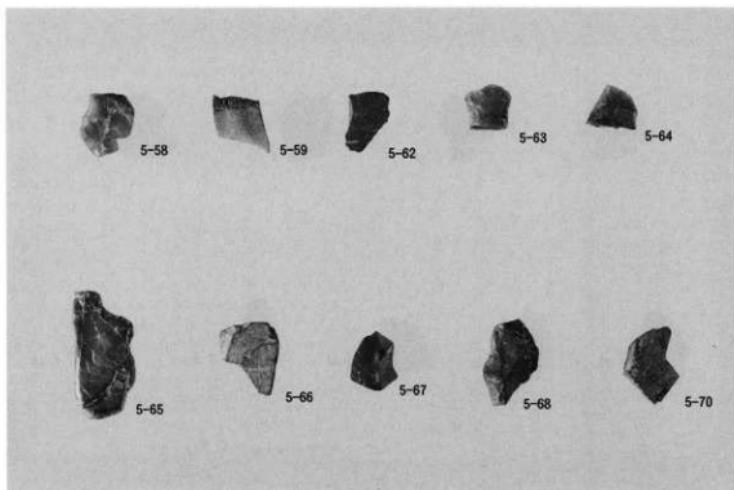
第5次調査出土石器 5



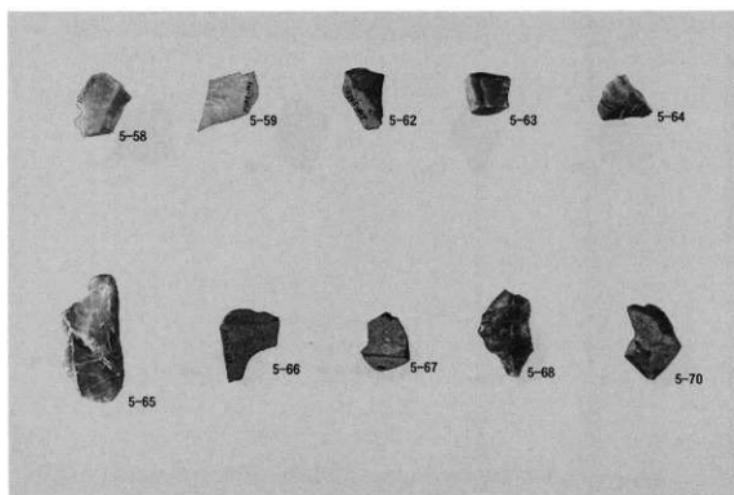
第5次調査出土石器 6



第5次調査出土石器 6



第5次調查出土石器 7



第5次調查出土石器 7